

---

# 朱の誓い、青の願い

青柳朔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

朱の誓い、青の願い

### 【Nコード】

N9360E

### 【作者名】

青柳朔

### 【あらすじ】

朱に染まることなかれ、深き青よ 人ならざる青年と、生まれ変わりの少女。これは決められた恋なのか これは、許される恋なのか。運命を信じない少女は、運命の恋に落ちる。前世の鎖はどこまで少女を縛り付けるのか。

## 序章

ときわ  
常磐。

これは呪いだよ。

永遠にとけることのない呪いだ。

おまえは私以外を愛せない。

今までも、そしてこれからも。

朽ちないその身体で恋焦がれるといい。

そうしておまえは人に近づいていけるだろう。

永遠の孤独のなかで救いになるのは今までの幸福な暮らしただけだ。  
もう取り戻せないそれをおまえは求め続けるだろう。

なあ常磐。

永遠の愛なんて存在しないんだ。  
存在しなかったんだ。

だからおまえが証明してくれ。  
あの世にいる私に見せてくれ。

何十年、何百年も続く恋物語を。  
この私が満足するまで。

さあ、永遠の恋を始めよう？

1：出会いと運命（1）（前書き）

2009/2/8 第1話、第3話大幅な加筆修正しました。

## 1：出会いと運命（1）

運命だなんて言葉、信じたことはなかった。

この世界がどんな色に染まろうとも、私は私の色を保っていられると思つてた。

青藍は走った。

ただひたすらに走った。

靴も履いていない足はもう傷だらけだ。それでも必死で走り続けた。

幸いにして月は雲に隠されている。このまま闇夜に紛れてしまえば、逃げることができるかもしれない。

油断した、ほんの一瞬だった。

地面から割り出た太い木の根に足を取られる。青藍の両手首は後ろに縛られている。そのせいで上手く受身も取れないままに倒れた。歯を食いしばりながら痛みを堪え、顔を上げる。

ああ、とため息が零れた。

「月が」

雲から満月が顔を出す。

月光は強い光を放ち、地上を照らし出していた。隠し守ってくれたものなんてなくなってしまった。

さく、と草を踏む音が間近で聞こえた。青藍は追っ手だろうか

嫌な汗をかき、しかしその足音は進行方向から聞こえていることに安堵した。

「こんなところに、人か」

低い声。

地面に倒れたままで声の主を見上げる。

金色の髪、深い森の緑色の瞳、人ではないかと思紛うほどの、美貌の青年だ。

何故だろう。

上手く息が出来ない。壊れてしまうかと思うほど心臓は脈打つ。溢れ出る感情はどれも言葉にならなくて、涙だけが込み上げてくる。

このひとが、いと美しい。

それはまだ大人とは言えない青藍には不釣り合いな感情だった。しかしそれ以外に当てはまる言葉を、青藍は知らなかった。

青藍には家族がいなかった。

唯一の肉親であった母は、三年前に死んでしまった。

ひっそりと母と暮らした家で一人生きてきたら、突然現れた男達に羽交い絞めにされて気がつけば荷台の中、だ。

村の人間達に売られたのだと、男達に言われた。

若い娘を一人でもいいから寄越せと、この野蛮な男達に脅され、自分達の娘が可愛い村人達はもはや頼る大人のいない、村はずれに住む青藍を差し出した。

狭い荷馬車の中には、青藍と同じ年頃の女の子ばかりが乗っている。皆この人売りに捕まって、これから物のように売られるのだ。

青藍は怖いと言って泣いてばかりいる周囲の少女達を見てうんざりしていた。

自分の不幸をこれでもかと嘆き悲しんでいる姿が鬱陶しい。この少女達は今まで恵まれた生活をしてきたんだろう。

青藍はちらりと前を見る。青藍の向かいに座る少女もまた、泣かずに蹲っていた。

鬱陶しいとを感じるが、しかし他の少女達の反応が普通なのだと、青藍は思う。自分が異様なのだと。そして、つまり目の前の少女も

「  
なに」

小さく問われる。知らず知らずに凝視していたらしい。

「別に、泣かないんだなと思って」

素直にそう答えると、ふん、と笑われた。

「生憎と、今まで幸せな人生送ってきたわけじゃないの。誰に買われるか知らないけど、両親に気が失うほど殴られる生活よりはましってmondしょ？」

無理に大人ぶったセリフだな、と青藍は冷静に思う。

本当は泣きたいんだろうに、彼女の誇りがそうさせないのだろう。泣いていた少女達も、静かだが響くその少女の言葉に黙り込む。



わずかな間だが泣き声が止んだ。

結局は、この子も他と一緒にか。

青藍は退屈そうにため息を吐き出した。

「……人に自分の不幸を言いふらして満足？ 別に同情しないし、慰めもしないよ、私は」

目の前の少女は目を丸くして息を呑んだ。

「自分は世界で一番不幸です、みたいな顔して。結局怖くてこのまま状況に流されるだけ？ 私はそんなのごめんだ」

青藍はそう言いながらすっと立ち上がる。

手首を締め付ける縄は相変わらずだが、足は縛られていない。

少女達の乗せられた荷台の出口にはおそらく見張りがいる。しかしこの荷馬車を運ぶ男は三人しかないはず。

「じゃあね」

青藍は短い髪を揺らし、そして荷台から躍り出た。カーテンを蹴り破り、ついでにすぐ近くにいた男にとび蹴りをかます。

会話が聞こえなかったから、見張りは一人だろうと 予想は当たった。他の二人はおそらく川にでもいるのだろう。長旅で自然の水場は貴重だ。

「くそっ！ 待て！！」

蹴りが甘かったせいで見張りの男がすぐに追いかけてきた。このままだと騒ぎを聞きつけて他の男達も戻ってきてしまう。

捕まったら、どうなるだろう。

たぶん殴られる。顔じゃなくて身体を。顔はたぶん傷つけないだろう。大事な商品の見栄えを悪くする奴はいないだろうから。

後ろに手を固定されたままの、走りにくい状態で青藍は暗くなつた夜の森を駆けた。

青藍の黒髪は闇によく溶ける。

走りながら葉で頬を切った。裸足だから、足の裏はもうぼろぼろ

だ。必死だから今は痛みを感じる余裕はない。

追ってくる足音は増えていた。

駄目かもしれないなんて考えない。

青藍は、ただ走った。

昔 青藍が幼い頃に大きな街に行った時のことだ。にぎわう町の中で、影に潜むようにひっそりと佇む老婆がいた。

よく当たる占い、予言 それは重宝されると同時に疎まれていた。予言が的中すればするほど、それは気味の悪いものになった。

皺だらけの老婆に指差され、青藍は一步後退る。その背中を母親は優しく受け止めた。

「この子は面白い運命を背負って生まれてきたねえ。呪いか、誓いか。愛か、憎悪か。どうなるかはすべてこの子次第だ」

お伽噺に出てくる魔女のような笑みを浮かべて老婆は言う。

その顔が怖いと、そう思っても目を離せなかった。

一つだけ、忠告をあげようかね 、老婆が呟く。

「朱に染まることなかれ、深き青よ」

## 1：出会いと運命（1）（後書き）

初めましての方も、いつもありがとうございますの方もこんにちわ。

これより青藍の物語が始まります。

最初の頃は謎の多い話となってしまうですが、よろしければどうぞお付き合いくださいませ。

あなたの読書のひとときの、ほんのささやかな手助けとなりますように。

## 2：出会いと運命（2）

世界の音が消え失せた。

目が彼から離せない。

世界中で彼と自分だけになってしまったかのように。

愛しい切ない苦しい恋しい憎い悲しい嬉しい。

正と負の感情が一気に溢れ出るようだ。

それは相反するもののようで、実は隣り合わせに共存している。

会いたかった会いたかった会いたかった。

それはもう魂が叫んでいた。

知らない人のはずなのに、青藍は知っていた。

それを本能と言うべきか、魂の記憶と言うべきか

。

説明しようのないものではあるが、確かに青藍の中にあった。

「居たぞ！ このくそガキ！！」

追ってきた男達の声に、青藍はびくりと身体を震わせた。

青年はただ静かに青藍を見た。

「……追われているのか？」

青年は転んだ青藍に手を差し伸べようとして、手首が縛られていることに気づく。

静かに、奴隷か、と呟かれた。

「……………どれい……………？」

その言葉が頭の中で繰り返される。

違うと否定しようとして、その一方でそうかもしれないな、なんて思う。これから売られるんだ。たった一度のチャンスを失敗してしまった今、青藍が逃げ出す好機はもう巡ってこないだろう。

「手間かせさせやがって！ ほら立て！」

手首を縛る縄をひっぱられ、青藍は痛みを噛み殺した。悲鳴なんてあげるものか。こんな男たちに屈するなんて嫌だ。

「疲れてるってのに走らせやがって！」

そう怒鳴られるのと同時に、頬を殴られた。

顔は殴られないと思ったが、商品価値を考えるほど利口な頭をこの男達は持っていなかったらしい。

口の中が切れたらしい。鉄の味がした。

青年が不快そうに眉を寄せる。

「おい、その。これは俺らの売りもんなんだ。何も見なかったことにして忘れるんだな」

ぐ、と縄を引っ張られ、青藍はわずかに抵抗した。

口の中の血を吐き捨てる。一瞬、男の顔にでもかけてやろうかと思ったが、そんなことすればまた殴られるだろう。痛いのは嫌だった。

青年は何も言わない。

ねえ、どうして？

私だよ。

忘れたの？

何故かそんな言葉が頭をよぎる。

どうしてそんな言葉が浮かぶのかと疑問に思っ自分と、ただ連れ去られる自分を傍観する彼に疑問を感じる自分とで真っ二つに割れる。

引きずられるようして、青年から引き離される。

「……………けて」

青藍は俯いたまま、小さく呟く。

月が眩しい。

夜が完全な闇だったらしいのに。

そうしたら、こんな顔見られなくて済むのに。

泣き顔なんて、誰にも見られたくないのに 特に彼には。

それでも青藍は口を開く。どうして自分がこんな行動をとるのか、分からずに。

「助けて 常磐！！」

青藍は激しく抵抗しながら、そう叫んだ。

常磐。

彼の名前を。

彼の目が見開く。

月に照らされて、一瞬だけ目が合う。

「 常磐！！」

もう一度、力の限り叫ぶ。

大きな手が、青藍まで伸ばされた。

常磐の手が、男の肩を掴んだ。

「ああ？　なんだよ」

男が鬱陶しげに振り返る。

青藍は涙を溜めた瞳で、青年を　　常磐を、見上げた。

「その娘、売ると言っていたな」  
静かで低い声。

そうだよ、ともう一人の男が答えた。その男に、青年は指輪を差し出した。大きな紅玉がはめ込まれた、一目で高価だと分かる品だ。  
「ならば俺がその娘を買おう、売ればかなりの額になるはずだ」

「うわああ、と男達が驚いて声を上げる。その拍子に青藍は投げ出され　常磐に抱きとめられる。

そして男達はもう少しふっかけようとしたのだろう、にやりと常磐を見た。しかし常磐の圧倒的な存在感に押し負けた。

「ま、まいど」

青藍が見上げれば、常磐は男達を睨んでいた。

逃げるように男達は走り去り、青藍は呆然としてその後姿を眺めるしかなかった。

「何故、知ってる」

頭上からそんな声が聞こえて、青藍は常磐を見上げる。

その端整な顔が、青藍を見下ろしていた。緑色の瞳がじっと青藍の青い瞳を射抜いて、ゆらゆらと揺れていた。動揺しているのだと、

青藍に悟られることも彼は嫌うだろう。

「……分からない、けど、知ってる」

常磐が訝しげな顔で青藍を見てきた。頭の悪い子供だと思われたのだろうか。けれど、そうとしか言いようのない感覚だった。

そして気がつけば勝手に口がしゃべりだしていた。

「だって、常磐は常磐でしょう？ 私がそう名づけたんだもの。私の常磐」

何を言っているんだろう、と青藍は思う。けれど口は自動的に動いているようなものだった。もはや脳まで、その感覚に侵食されている。

しかし常磐はただ黙って青藍を見下ろしていた。

その瞳にはどこか悲しさと、怒りがあるようで。

「真朱」

その名前が、懐かしいと思う。

その声には切なさや愛しさと、そして憎しみが込められているようだった。それだというのに、青藍は常磐がいとおしいと思う。

常磐がゆっくりと、身体を離れた。

青藍は今まで完全に常磐に寄りかかっていたのだと気づいて、慌てて自分の足で立つ。

「……俺を遣し、孤独を味あわせ、おまえは転生してまた時を歩むか」

何のことか、分からない。



青藍は知らない。

そして常盤は何も言わずに、踵を返す。しばらくそれを見送りそうになり、慌てて後を追った。

「待って！」

縛られた手首はそのままだ。追いかけるために走ろうにも、今更になつて足の裏が傷んだ。

どんどん常磐との距離は広がっていく。青藍は焦り、足の痛みを堪えて走った。

「待って！ 常磐！」

行かないで、と叫んでも、常磐は一度も振り返らずに歩いていく。とき、わ

疲労と苦痛で、青藍の歩みは遅くなっていく一方だ。いつの間にか止まっていた涙がまた溢れ出す。

もはや歩く気力もなかった。全力疾走で逃亡した拳句、大人の男に殴られ、手首は縛られたまま。

がくりと膝を突くと、もう立てなかった。

「……ときわ」

届かないような弱々しい声で、もう一度彼を呼ぶ。そのまま地面に倒れると、どっと疲れが押し寄せてくる。青藍は目をつむり、もういいやと投げやりになる。

彼の側にと急かす心とは裏腹に、もう身体は動かない。

青藍はそのまま静かに意識を失った。

### 3：出会いと運命（3）

私の常磐。

そう呼んでいた女はもういない。

憎悪を生みだす呪いを遣し、一人で逝ってしまった。

久し振りにそう呼ばれて、心臓が軋んだ。

そう呼んだのは彼女とは似ても似つかない少女だ。

いとおしさで、狂ってしまいそうだった。

それも彼女が遣した呪い故だとわかつているのに。

常磐、とずっと弱々しく呼んでいた声が突然止んだ。

躊躇いながらも振り返ると、少女は草むらの中に倒れていた。小柄な身体はそのまま埋もれてしまえば、誰も見つけることができないだろう。もともと人通りのある場所ではない。

関わりたくないというのが本音だった。あるいは関わりたくないことが正解だろうとも思っていた。

たぶん、この子に手を差し伸べることで、彼女が用意した呪いの一部なのだろうと。

葛藤していると、少女が苦しげに唸った。

ほとんど反射的に駆け寄ると、少女は少し呼吸が荒かった。よく見れば手足はあちこち怪我をしている。手首に巻かれた縄のせいで皮膚が擦れてしまっているし、足はとにかく傷だらけだ。膝まで葉で切ったような傷があり、足の裏は泥と血で汚れていた。まだ幼さの残る少女にはあまりにも酷な状況に、胸が締め付けられるような気がした。

この少女を守ってくれるような大人はいないのだろうか。かつて、彼女にも誰もいなかったように。

一度ため息を吐きだす。

もう放っておくことなんて出来るわけがなかった。

手持ちのナイフで手首を縛りつける縄を切った。そうすると痛々しいほどに手首が赤くなっているのがわかる。

そつと少女の身体を抱え上げる。

その身体は想像していたよりもずつと軽くて驚かされた。

「ん」

少女が腕の中で苦しげに唸る。怪我のせいで少し熱があるのかも知らない。

この森を抜けたすぐ先に大きな町があったはずだ。金に糸目をつけないければ宿は確保でいるだろう。祭りがあるような時期でもない。腕の中の重みとぬくもりにささやかな使命感を抱きながら、常磐は進む足を速めた。

温かい何かが、額をそつと撫でてくれるような感覚。  
小さな頃、寝込んだら母がいつもそんな風に撫でてくれた。

だれ？

青藍の問いかけに、その人は困ったように微笑んだ。

青藍が目を覚ましてすぐ目に飛び込んできたのは、見知らぬ天井だった。

まだ目覚めない脳が、何も考えずにただその天井を見つめる。温かい布団と、温かな部屋。

むくりと起き上がり、周囲を見た。

誰もいない。

あの森の中で倒れたはずなのに、とようやく頭が働き出す。

「……………常磐？」

いないと分かっているのに、彼の名前を呼んだ。青藍を助けた人間として、一番可能性が高いたろうと。そう考えて首を振る。拒絶されたことを思い出して泣きたくなった。

何度呼んでも彼は振り返らなかったではないか。

寝台から下り、窓の外を見ると町並みが広がっていた。どうやら部屋は二階に位置しているらしい。道を行き交う人々の頭を眺める。  
「どこだろう、ここ……………」

雰囲気は青藍が育った国と似ている。村に近い大きな町はこんな感じだったはずだ。朱色の屋根が連なって、白い壁が並んでいる。遠目から見ても美しいと思える統一感のある町並み。

「起きたのか」

背後から話しかけられ、青藍はびっくりと飛び上がる。

恐る恐る振り返った先には 金色の髪の青年が立っていた。いつの間にかに部屋の扉が開いている。

もう、会えないと思っていた。

「……常磐」

ほっと安堵したように青藍が微笑む。安心しきったその顔に、常磐は居心地悪そうに眉を寄せた。

それでも嬉しかった。

彼が側にいることが、こんなにも。

「どう、して？」

少し躊躇ったあとで、青藍はおずおずと問いかける。

昨夜、常磐は青藍が何度呼んでも振り返らなかった。

複雑な感情が交じり合ったあの瞳で見た後、青藍を置いて行ってしまった 青藍はそう思っていた。

「……傷だらけの子供を置き去りにするほど非情じゃない」

困ったように常磐は青藍から顔をそらし、小さく答える。

言われて自分の手足を見ると、すでに手当てされていた。手首は縄が擦れて薄皮が剥けていたのだが、薬も塗ってあるのだろうか、あまり痛まない。

「ありがとう」

真っ直ぐに常磐を見て青藍が笑う。

しかし常磐はまともに青藍を見ることはただの一度もなく、それだけが悲しい。

「着替えが置いてある。着替えたら下りて来い」

腹が減っているだろう、と言われて青藍は素直に頷く。どうやらここは宿屋らしい。二階建てで、これほど清潔な部屋であるという段階でそれなりに値の張る宿のはずだが。

常磐はそれ以上何も言わずに部屋から出て行く。

その後ろ姿を、青藍はただ見つめていた。

#### 4：出会いと運命（4）

用意されていた服を着て、青藍は一瞬眉を顰める。

水色の、少女用の服だ。十四歳にしては小柄な青藍にぴったりのサイズだ。しかしいつも少年のような格好をしていた青藍には、ワンピース型の服はあまり馴染みがない。

しかし汚れたものの服を着るのは嫌だったし、なにより常磐がわざわざ用意してくれたのだから　と自分に言い聞かせて袖を通す。そこで、青藍は自分の中に湧き上がる感情に首を傾げた。

どうして？

青藍はもともと、他人を信用するタイプじゃない。

母を失ってからというもの、信じられるのは自分だけだと、自分の力だけで生きていければ良いとそう考えてきた。人々との馴れ合いすら必要ないと思ってきた。

それだというのに、常磐に対してはこんなにも無条件の信頼を寄せている。

それはもう本能で、彼の側にいたいと思う。親を慕う小鳥のように、彼の傍らへと身体が急かす。

いとおしい、と。

そう思う。

恋がどんなものかもまだ知らないというのに。

直感的に、すべての答えは魂だと思う。

これが、幼い頃あの老婆の告げた運命だとも言うのか　。

一階は酒場で 昼間は食堂として機能していた。  
カウンターに面した席に座る、常磐を見つける。大陸の東の方の  
国では金髪は珍しく、人ごみの中でも常磐を見つけられる自信が青  
藍にはある。

人々はどこか遠巻きに常磐を見ていた。珍しい金髪で、あの美貌  
だ。近寄りがたいというのが本音だろう。

「……常磐」

呼ぶと常磐はほんの一瞬だけ青藍を見た。  
そして空席の隣をぽんぽん、とだけ叩く。ここに座れということ  
らしい。

そこには既に温かいスープとパンが用意されていた。着替えてい  
る間に注文してくれたのだろう。猫舌の青藍にちょうど良くらい  
まで冷まされていた。

「いただきます」

礼儀正しくそう呟き、青藍は遅い朝食にありつく。太陽はもう真  
上に近いところまで昇っていた。

ちらりと常磐を見る。

彼の前には飲み物があるだけで、何かを食べる様子はない。もう  
朝食はとっただろうし、昼食には少し早いのだろう。

常磐はじつと青藍の隣に座ったまま、何も話さない。

気のせいだろうか 周囲の視線が痛い。常磐の連れというだけ  
でこんなに注目されるとは。

「……手当て、ありがとう。服とか、靴も」



先ほども部屋でお礼だけは言ったが、改めて着替えると一式揃っていたことに驚かされる。青藍が寝ている間に買って来たのだろうか。

「あのままにするわけにいかないだろう」

いいから黙って食べ、と言われて青藍は仕方なく黙々と食べる。初めて会話らしい会話をしたような気がする。

そうして食べ終わり、ご馳走様でした、と呟くと常磐が席から立つ。慌てて後を追いつつ、自分が眠っていた部屋の隣の部屋に入る。ここが常磐の部屋らしい。

常磐はついて来た青藍に文句を言うわけでもなく、ただ一度ちらりと見ただけだ。

「名前は何？」

一瞬間き逃してしまいそうなほどに静かな声に、青藍はきょとんとした顔で常磐を見つめる。

「おまえの名前だ。まだ聞いていない」

言われてそうだと気づく。

自分が常磐の名前を知っていたものだから、当然のごとく自分のことを紹介することを忘れ去っていた。

「青藍」

青か、と常磐は小さく呟く。

そういえば、と青藍は昨夜意識がなくなる直前のことを思い出した。

常磐は確かに青藍に向かって名を呟いた。そう、確か

「……………しんしゅ、って誰？」

純粹な問いに、空気が一瞬凍りついた。

するりと常磐の腕が伸び、青藍の頬に触れる。

「魂は同じでも、記憶は残らないか」

それは悲しい眩きだった。少しでも泣きそうな瞳で、常磐は青藍をまっすぐに見ていた。青藍の中の誰かを。

「……魂？」

自分の直感にもあった。魂が常磐を求めていると。引き寄せられたのも、溢れ出しそうになるこの感情も。

「それ、どういうこと？ 私と関係がある人なんでしょう？ その人と常磐は知り合いなの？」

生まれ変わりなんて言葉を知らない青藍は矢継ぎ早に常磐に問いかける。ただ知るの、心の中心が魂と呼ばれる存在だということだけ。亡き母が教えてくれたこと。

「おまえが知る必要はない」

きつぱりと常磐に切り捨てられる。

「知らないのなら、知らないままの方が幸せだ。でなければ、呑まれるぞ」

何に、とは問わなかった。

頭の中でまたあの言葉が繰り返される。

朱に染まることなかれ、深き青よ

つまり、真朱は青藍を侵すものなのか。

常磐がいとおいそうに見るのも、憎むのも、悲しむのも、すべてその人のことなのか。

「家まで送ってやる、どこだ？」

常磐がそう問いかけてきて、青藍は首を横に振った。もう生まれ育った家には帰れない。帰ったらまた同じような目に遭うだろう、何より村人をもう信じられない。

「親は、もういない。村人に売られて、あんなったんだから。もう帰れない」

常磐に助けてもらえなければ、今頃物のように売られていただろう。おそらく、他の少女達はそうなった。

「……ならば、どこか施設に」

大きな町なら孤児院がある。もう働こうと思えば働ける年齢の青藍が受け入れられるかは怪しいが。

また、引き離されるといふ不安に青藍は怯える。  
ぎゅ、と青藍は常磐の服の裾を握り締めた。

どうして？

「側にいちゃ、駄目なの？」

強い意志で見上げた青藍に、常磐は困ったように淡く微笑むだけだった。

## 5：真朱の呪い（1）

真っ白な髪。

血色のような瞳。

それは不吉と呼ばれる色。

彼女は　もはや人ではなかった。

それでも定められた命のある生き物で、その人は時間の枠から飛び越えた自分を作り出し、最期は満足するように微笑んで逝った。  
とびきりの呪いを遺して。

真朱。

おまえはどれだけ俺を呪えば気が済むんだ？

さすがのように見上げてくる青藍を、常磐は子供をあやすような優しい手つきで、髪を撫でる。その瞳の奥にはどこか憐れみが含まれていた。

「……間違えるな。俺の側にいたいと思う気持ちは、おそらくおまえのものじゃない」

だから側にいる必要はない。

それを望んでいるのはこの小さな少女ではないのだから。

「……それでも、私にはもう誰もいない」

青藍は捨てられた子猫のように、ただ常盤に縋るしかない。

常磐は後悔した。

やはりあの時、名前なんかに反応するんじゃないかった。

この子を救うんじゃないかった。これからこの少女にどんなひどい未来が待っているとしても、他人事だと見て見ぬふりをすれば良かった。

それが出来なかったのは、たぶん自分の中に真朱をいとおしいと思う気持ちが強く残っているから。

「私にはもう何も残ってない……！」

ぎゅ、と固く握りしめられた手が常磐の心を揺らした。

「あなたが助けたんじゃない！ あなたが拾ったんじゃない！ だつたら捨てないでよ！ 最後まで責任持つてよ！」

青藍自身は、何を口走っているのか分からないのだろう。

ただ必死に離すまいとしがみ付くその小さな手が愛しいと、常磐は思う。

それは青藍だからなのか 真朱に連なる少女だからなのかは分からないけれど。

何より青藍のセリフは 常磐が、遠い昔に叫びたかった言葉そのものだった。だからなおさら心が打たれる。

この小さな手を、離せなくなってしまう。

常磐は自分に縋りつく青藍を抱きしめた。その時にはもう手遅れだったのだろう。

小さな小さな身体を、壊れないように優しく、けれど力強く抱きしめる。少年のように短く切られた髪を撫で、耳元で囁く。

この少女の中にあるものが何であろうと。  
自分がどれだけ呪われようと。

「守ってやる」

それが自分の宿命であるかのように、常磐は低く呟く。

青藍は驚いて目を見開く。状況を飲み込めないまま、耳元で聞こえる囁きを聞くことしかできない。

「おまえが俺の側から離れるその時まで、どんな災難からもおまえを守ってやる」

この少女を飲み込むであろう、過去の影からさえも。もう後戻りなんて出来ない。

この子がいとおしくて仕方ない。すがり付いてくる手を振り払うことなんてもう出来ない。青藍がその壁を壊してしまったから。

常磐の腕の中で、青藍はほっと安堵したように、身をそのたくましい腕にゆだねた。

安心したのか、常磐の腕の中で眠り始めてしまった青藍を、常磐は複雑な表情で見つめた。

いつから、こうなる運命だったのかと、ため息が零れる。

「ああ、遅かったか」

いつの間にかに現れたその人に、常磐は驚くまでもなく曖昧に微笑んだ。

「……だいぶ、な」

昔からの　それこそ何百年、何千年も前からの知人だ。人からすれば永久に命を持つと思えるほど長い命を持つ　神に、分類される人。

自分を作り出した彼女の知人であつた彼は、もはや自分の知人になつてしまった。気がつけば長い付き合いだ。

「アレの生まれ変わりか……できる限りおまえとは接触させないように気を配っていたんだが、運命を前に人も神も非力だな」

「……俺は、そのどちらでもない」

眠る青藍の髪を撫でながら、常磐は低く呟く。

「アレよりは神らしいよ、おまえは」

彼があえて名前を言わない彼女を思い出し、常盤は苦笑する。

「それは言わないほうがいいよ、東雲。彼女を喜ばせるだけだから」

常磐の言葉に、その人　東雲は、眉を顰める。

「彼女の……真朱の目的は、出来損ないの神である彼女の手で神を作り出すことだから」

そうして自分が作られた。

かつて人間だった自分に、神に等しい長い命を与えて。

「……つくづく、不幸な男だな、おまえは」

「幸とも不幸とも言えないな。これも呪いといえばそうなのかもしれないが　この子に出会った時に、身体中が痺れるほどに、嬉しかったんだ」

青藍が、常磐の名を呼んだ瞬間。

常磐も青藍のように歓喜で胸が震えた。

長い長い間、取り残されて独りだった。

やっと出会えた。また君に出会えた。

抱きしめたくて、名前を呼んで欲しくて、愛していると叫びたくて

それをしなかったのは、何千年も生きてきて培った理性と忍耐力が成せた業だ。初めて出会う少女に向かって、まして他の目もあるところで、そんなことはしない。

「呪いというか、なんと言つか、捕らわれてるな、相変わらず」

ため息と共に東雲はそう呟く。

常磐は苦笑して、そうだな、と答えた。

「この嬢ちゃんも、大変だな。……おまえと出会わない方が、幸せだったろうに」

東雲がふと視線を青藍に移し、哀れみを帯びた目で見つめた。

「彼女を嫌っていたのに、この子にはそんな優しい目を向けるんだな」

厭味のつもりで常磐が呟くと、東雲はまた常盤に目を移す。

「これと、アレは違うものだ。混同するな。魂は巡り、何度もこの世に現れる。けれどそれは前世と同じものではない。この嬢ちゃんには重い魂かもしれないけどな」

じ、と常磐を見つめるその視線には、どこか怒りも含まれていた。「俺はこの嬢ちゃんをずっと見張ってきた 見守ってきた、言ってももう間違いじゃない。おまえと巡り会わないようにしてきたことだが、今ではこの嬢ちゃんを幸せにしてやりたいと思えるほどに愛着が湧いている」

だから、と念を押される。

その先の言葉は、聞かなくても分かっていた。

「この子にアレを重ねるな」



## 6：真朱の呪い（2）

重ねてなんかない、と。

そう断言することが出来ない自分に腹が立った。

腕の中にある重みは真朱と同じものじゃない。眠っている少女は真朱ではない。けれど、身体は反応する。

彼女を守ろうと。その彼女が、真朱なのかこの少女なのか、常磐には分からない。

「おまえが真朱に縛られ続ける限り、この子もまた縛られる。

悪いことは言わない。早く手放せ。なんなら俺が引き取る」

東雲はそう言いながら青藍に触れようと、手を伸ばした。

その手を、常磐は無意識に振り払う。

そのことに、東雲だけでなく常磐自身も驚いた。

「……本能だな」

そう呟いて東雲が苦笑する。

そして常磐も悟る。

この小さな少女に縋りつかれたその時から、もう手放すことは不可能なのだ。もしかしたら、青藍が常磐を呼んだあの時から。

「すまない」

常磐は青藍を抱えなおしながら、東雲にそう言う。

ベットに寝かそうかと考えて止める。腕の中の重みがなくなることが寂しいと、そう思った。青藍を抱え続けることくらいは苦にならない。

「気づいているんだろう？ 常磐。おまえが真朱を愛していたのは、まやかしかだ。真朱によって作られた感情に過ぎないと。おまえは今、真朱を恨んでいる」

東雲の言葉が常磐に重くのしかかる。

あの頃の世界で、常磐にとって真朱は絶対だった。

常磐は真朱の所有物に過ぎなかった。

真朱にとって常磐は長続きする玩具でしかなかったのかもしれない。野望を叶える為の道具でしかなかったのかもしれない。

それでも、いつからか常磐は真朱を愛し始めた。

不器用で、強がりな神様を愛していた。

しかし今は

「ああ、恨んでるよ」

彼女が最後に遺した呪い。

長い長い時の中で、常磐はずっと独りで生きていく。

真朱との甘い思い出だけを胸に。

何度死のうと思っただろう。しかしそれも、真朱の言葉で遮られる。頭の中で繰り返し繰り返し常磐を呪い続ける。

生きると、生き続けると。

そのことに気づいてから、真朱に対する愛情は憎悪へと変わった。どうしてこんなに苦しまなければいけない？ どうして彼女の野

望のためだけに 他の神々を見返すために、神でもない自分がこんなに長い時を歩まなければいけない？

本来人間だった常磐にとって、その時間の長さは拷問だった。

「恨んでいる。けれど、同時にまだいとおしい」

散々彼女を憎み続けた日々も、長く続けば鎮静化した。

そうして穏やかだった日々を思い出せば、自然といとおさが蘇る。ここ数年は、その相反する二つの感情に悩まされ続けてきた。

「……真朱を憎む気持ちは分かる。だがこの子を傷つけるような真似だけはするな。俺は見ているからな」

念を押すような声に、常磐は苦笑した。

青藍に対しても複雑な感情しか浮かんでこない。

魂が再び巡り巡って、こうして出会えたことに喜んでいるのに、真朱がまた新しい人生を歩めることに憎しみが募る。

「いっそ、側で見張っていてくれた方が楽だ」

自分がこの少女を傷つけないように。

「今は、その時じゃない」

青藍はまだ真朱についてほとんど知らない。知らせていないから。それなのに突然神様に分類されるような者が現れたら 混乱する程度ではすまないだろう。

「もうアレは死んだんだ。その子はまた別の存在。割り切れば簡単なことだぞ」

それがなぜか自分にとっては難しいことなどだと、常磐は苦笑するしかなかった。

夢の中で青藍はただの傍観者に過ぎなかった。

「ねえ 生きてるの？ 死んでるの？」

夢の中には真っ白な髪の少女　年頃は青藍とそう変わらない。  
しかしその少女には年相応の雰囲気なかった。

少女は森の中で倒れている青年を見下ろして、無邪気にそう問いかける。

倒れている青年が常磐だと　青藍にはすぐに分かった。

常磐の腹部からは溢れるように血が流れていて、顔は蒼白だった。  
駆け寄りたいという衝動に駆られるのに、青藍の身体は二人の上空を漂うばかり。

常磐の瞳が、少女を捕らえた。

くすくすと少女は笑う。その声の不気味だと青藍は思った。今にも死んでしまいそうな人を前に　どうして笑えるのか。

「まだ生きていたのね。このままじゃ死んじゃうけど。　ねえ、死にたくない？」

当然の質問に、常磐は睨みつけるように少女を見た。声を出す力はもう残っていないのかもしれない。

常磐。常磐。常磐。

青藍は届かない手を必死に伸ばした。

助けたい。何の力にならないかもしれないけれども、常磐を助けたい。

「いいわ、その目。気に入った。助けてあげる。けれど、その代わりあなたはそれを全てを私に差し出さない。あなたは私のもの」

少女が常磐の顔を持ち上げて、不敵に微笑む。その少女を、常磐は残る気力で睨みつけていた。

生きたいと願う意思と、この少女に屈することを拒む心　常磐

の中ではその色々なものが交じり合っているようにも感じた。

少女の顔と、常磐の顔が重なり合う。否、重なったのは、唇だ。

青藍は息を呑んだ。常磐から流れていた血が、みるみるうちに止まっていく。蒼白だった顔は、青藍の知る常磐とまるで変わらないまでに色が戻っていく。

常磐が無理やり少女を引き離した。

それだけの力が戻ったのだと、行動で分かる。先ほどまでは指一本動かすことすら難しかったはずだ。

少女はくすくすと笑い、そして呟く。

「あなたの名前はたった今から常磐よ、この私がそう決めた」

常磐は たった今そう名づけられた彼は、ただ少女を睨みつけていた。

「おまえ、何者だ」

低く問う。

少女はああ、忘れてたわね、と呟く。

「私は真朱よ、天にも地にも嫌われた、出来損ないの神様」

真朱。

その名前を、青藍は知っている。



## 7：真朱の呪い（3）

神様。

青藍がこの世で最も信じていないもの。  
青藍がこの世で最も嫌いなもの。

だから、真朱の言葉を聞いても、ああそうかと思わない。  
会ったこともない、たった今その容姿を目にした真朱を、青藍は  
憎いと思う。それも真朱が神様だからかな、と思う。

妙に納得した青藍が浮上する。

意識が今いる場所とはまた違う場所に繋がる。

ああ、目が覚めるんだ、と冷静な自分が呟いていた。

目を覚ますと。そこには常磐の姿がある。

それが何物にも変えがたいほどに嬉しくて、青藍は微笑んだ。

「ときわ」

手を伸ばし、常磐の頬に触れる。  
どうした、と静かな声が問いかけてきた。まるで膜でも張ったよ

うなばんやりとしたその音に、まだ寝てるのかなと青藍は寝ぼけた。白い髪に、赤い瞳の少女。

本当に夢だったんだな、と気づいてほっとする。常磐が怪我をしていなくて良かったと。

そして同時にあれはいつか　遠い昔にあったことなんだろうと、頭が勝手に理解していた。

「ときわは、ときわのものなんだからね」

寝ぼけたまま、青藍は思ったことを口にする。

生まれたその時から、その人はその人のものだ。そう母に教わった。青藍にとって母から教わったことは絶対だった。

だから青藍は微笑みながら常磐にそう話しかける。

常磐は頬に触れる青藍の手を握り締めて、何故か今にも泣き出してしまいそうな顔になる。その常磐を慰めたくて、青藍は必死に言葉を探した。

「……ときわ？　常磐？　どうしたの？」

寝ぼけていた頭がようやくはつきりとした思考を始めた。それだというのに、常磐にかける言葉が見つからない。なんて役に立たない頭だろう。

「……悲しいの？」

常磐に抱えられたまま眠っていた青藍は、常磐の顔を見上げることでしかできない。常磐は顔を覆い隠すことなく、泣き出しそうな顔のままで青藍を見つめた。

「大丈夫だ、なんでもない」

なんでもなくない、と　そう言おうとした青藍は常磐にきつく抱きしめられた。骨が軋むほどに、強く、それは優しさの欠片も存在しない抱擁だった。

「とき、わ？」

眠る前に抱きしめられたのとは違う。その時も抱きしめる力は強



かったけれど、息が出来なくなるほど苦しくはなかった。

けれど振りほどこうとは思わなかった。たぶん、常磐も苦しいんだと、青藍はぼんやりと思う。

苦しくて苦しくて　それを慰めてくれる人も、いなかったんだろ。

このひとがいとおしい。

常磐という思い浮かぶのはそんな言葉ばかり。

どうして、と聞かれると分からないと答えるしかない。青藍の思いではないのかもしれない、とそこで冷静に考える。

それでも、今常磐を慰めたいと思うのは、間違いなく青藍だ。だから青藍は細い腕を常磐の背中に回し、同じように抱きしめる。

「大丈夫だよ」

側にいるよ。

もう、独りにさせないよ。  
だから、もう大丈夫だよ。

そんな思いを込めて青藍は静かに呟く。

青藍の肩がしつとりと濡れたことには、気づかないふりをしておいた。

そう長い時間ではなかった。ゆっくりと常磐が青藍から身体を離し、顔が見られたくないのかすぐに後ろを向いてしまった。

泣いたなんて、気にしないのに。そんなことを思いながら、そう指摘されるのは常磐が嫌がるだろうと、青藍は後ろを向いてしまった常盤の背中に、自分の背中を合わせる。こうしていれば、顔は見えない。けれどお互いのぬくもりは伝わる。

「……夢を、見てた」

話すことがない青藍が、ぽつりと呟く。  
返事がないことは気にしなかった。

「常磐が、たくさん血を流して倒れてた。助けに行こうとしても、いけなかった」

自然と身体が震えた。青藍は怯えたように後ろを振り向き、そこに常磐がいるのを確認する。背中越しに伝わる体温は温かい。

「そこに、白い髪の女<sup>ひと</sup>が出てきて　笑ってた」

びくりと、常磐の動揺が青藍にも伝わる。

やはり現実にあつたことだったのだと、青藍は確信した。  
振り返れば、驚いたように常磐が青藍を見つめていた。

青藍は妙に冷静なまま、言葉を続ける。

「その女は、真朱と名乗っていた。ねえ、常磐」

常磐の瞳が、その先を聞くことを拒むように揺れていた。

それでも青藍は続ける。たとえこの先、朱に吞まれようとも。

もう、後戻りは出来ない。したくない。

「真朱は、何者？」

## 8：真朱の呪い（4）

青藍の言葉に、逃げ込むような隙はなかった。

ただじつと見つめてくる瞳は、どこまでも青く、海のようにもあり、空を映し出したかのようにもあつた。

まっすぐな青藍の視線に、常磐は怯えたように瞳が揺れていた。それが分かつて、青藍は常磐を見つめ続けた。

これ以上に言うことはないから、何も言わない。けれど常磐を逃がすつもりはなかった。

随分と長い間沈黙が続き、常磐がひとつため息を零した。怯えた瞳は本当に一瞬で、今青藍を見る彼はいつもと変わらない強さと儚さがあつた。

そんなに、と低く呟いた。

「……知りたいか？ 自分の過去が」

青藍は何も言わずに頷いた。

「普通なら知らない、知らないまま過ごすはずの過去だとしても？」  
もう一度頷く。

常磐がため息をまた吐き出した。

「……いざ話すと、簡単すぎて笑えるな」

それが始まりだったんだろう。瞬きする間も惜しく青藍は常磐を見つめる。

「……真朱は、人神と人の間に出来た禁忌の子だ」

人神？ と青藍は聞いたことのない単語に首を傾げた。

「天にいる神とは違う、地上に……人の近くに寄り添う神のことだ。街に住んでいる人神は少ないが、人里離れたところには結構多い。」

もともと、人と神との婚姻は長きに渡り禁じられていた。だからだろう。最近では人に近づこうとする人神も少ない。昔は、それこそ人間にとって良き隣人だったんだが」

知恵を与え、人々を見守る、そういう存在だった、と常磐は説明を付け加える。

「人神と人が恋に落ちた。その事実が存在しなかった頃は、人神は人と共にあった。けれど真朱の親がそれを覆した。恋に落ちる時は落ちるのだと、人神も気がついてしまった。だから自分達も同じように人を愛することを恐れ、人々から距離を置いた」

村や街に住んでいた人神は徐々に減り、今では人神という存在を知る人間は少ない。知っていたとしても、伝承や伝説の一部となっ

てしまった。

「人神の過ちの象徴　だから、真朱の存在は天の神にも、人神にも疎まれていた」

人よりも長く生き、神と同じ時を歩めない。そういう存在だった、と常磐は懐かしむように呟く。

「だからずっと彼女は独りだった。人より長く生きる分、人間の社会には馴染めない。けれど神々からは迫害される　真朱のことを知る人間がいなくなった頃には、人間も彼女を迫害し始めた。化け物と呼ばれて」

びくり、と青藍の身体が震えた。知らないことのはずなのに、震え始めるとそれは止まらなくなった。

怖い、と心の奥底から何かが叫んでいる。

常磐は青藍の震えに気づき、立ち上がると、青藍の身体を抱きかえ、そのままベットに腰を下ろした。青藍は常磐の太腿に座り、胸にもたれる形になって、話が続けられる。

不思議と、震えが治まった。

「おまえは、真朱であり、真朱とは違う。真朱が天寿を全うし

その魂が巡り巡って、行き着いた先がおまえだった……分かるか？」

青藍は小さく首を振って、常磐を見上げた。

常磐は苦笑して、青藍の髪を撫でる。

「生き物には魂がある。それがすべての源だ。それは分かるな？」

「……母さんに教わった」

小さく答えると、常磐がそうか、と答える。

「生き物の死はつまりその器の 肉体の死を意味する。つまり魂は死なないんだ。魂は長い時をかけて次の肉体に移り、そしてまたこの世に誕生する。それを生まれ変わりと言うんだ」

常磐の言葉を一つ一つ飲み込んで 青藍は問う。

「つまり、私の魂が、前に宿っていた人が真朱？」

「ああ。おまえが見た夢も、たぶん魂の記憶だろう。普通は、そういうのは残らないものなんだがな。神の生まれ変わりなんて聞いたことないから、ありえないことでもないのかもしれない」

青藍は真朱を思い出す。

真っ白な髪に、真っ赤な瞳の少女。たぶん彼女は死ぬそのときまで、あの姿だったのだらうと思う。

血を流す常磐を見て、楽しそうに微笑む。あの歪んだ口元を思い出して、青藍はぞっとした。

「いや」

それは自然と口に出ていた。

小さなその声を聞き取れずに、常磐が青藍の顔を覗き込もうとする。その視線を避けるように、青藍は深く俯いた。

「嫌だ。あんな人の魂じゃない」

静かに、だがはつきりと青藍は拒絶の言葉を口にした。

青藍の身体が震えだす 恐怖ではなく、怒りで。

「だってあの人は傷ついた常磐を見て笑ってた！ 玩具を見るみたいな目で見てた！ そんな人の魂なんて必要ない！」

あの場にいたのが自分だったら、と何度願うだろう。

常磐を救ったのもまた彼女であることに変わりはない。けれど同時に、常磐に大きな苦痛を与えたのも彼女なのだ。

青藍は無意識のうちに自分の二の腕に爪を立てた。魂を傷つける方法があるのならいいのに、と心のどこかで思う。

「やめろ。自分を傷つけるな」

常磐が青藍の手を掴み、自傷行為を止める。

駄々をこねる子供のようになり、青藍は首を横に振った。

「真朱なんて嫌い！ 自分の中にあの人を同じものがあるのも嫌！ あんなに残虐な一面が もしかしたら自分にあるのかと思うと、それだけで恐ろしい。」

常磐の大きな手が青藍の手を優しく包み込む。そのぬくもりが痛い。

「それでも、おまえと俺が巡り会ったのは彼女のおかげだ」

ぴた、とその言葉が青藍の動きを止める。

泣き出したくなって、青藍は顔を歪めた。認めたくないのに、認めざるを得なかった。

「おまえが真朱の生まれ変わりだったから、こうして側にいてやる。あの時おまえが俺の名前を呼ばなかったら、たぶん俺はおまえを助けなかっただろう」

そんな言い方ずるい。

青藍はどれも否定できない。

常磐に巡り会えたのは紛れもなく自分の魂が彼を求めていたから。

魂の奥底で叫んでいたのは 真朱であるとしか思えないから。

「……俺のために、怒ってくれてありがとう」

そう微笑む常盤の顔が、青藍はとても痛々しく見えた。



## 9：二人なら

身体が傷ついたのは青藍なのに、心が傷ついたのも青藍なのに  
ひどく傷つけられたような顔をして、常磐が立ち上がった。

もう一度、よく考えると、そう低く呟いて常磐はそのまま部屋から出て行ってしまった。

常磐と一緒にいたいと、そう願うのは青藍の中に眠る真朱も同じなのだ。つまり今この行動が、真朱が影響してのものかどうかなんて定かではない。

呑み込まれる。そんな言葉が重みを増して青藍にのしかかった。

それでも常磐と共にいるか。

別れを選ぶか。

常磐は青藍を思って、もう一度チャンスをくれているのだ。

自ら爪をたてた腕がひりひりと痛んだ。

時間感覚が鈍くなるほど、青藍の脳は考えることを止めていた。

何かを考えるとというその行為でさえ、真朱の影がちらつくようで怖かった。

長い間、部屋の中に一人きりで、青藍の時は止まっていた。

「……………ときわ」

無意識のうちに、常磐の姿を求める。

側にいて、側にいて、と心が訴え始める。それは紛れもなく青藍の心だった。

そうだ。

あの夜、常磐を呼び止めたのは真朱かもしれない。けれど、走り出したのは。

あの荷馬車から逃げ出して、傷だらけで走り、常磐を見つけ出したのは青藍だ。

真朱と重なり合った感情や行動の中に、確かに青藍の意思はあるのだ。

そう気づいた途端、青藍は部屋から飛び出していた。

宿屋の一階に常磐の姿はなかった。

もしかしたら、と宿屋の主人に常磐のことを尋ねてみたが、首を横に振られた。行き先も告げていないらしい。

待っていれば帰ってくるだろうと、そう安心なんて出来なかった。青藍と常磐の関係はいつも危うい。

繋がっているようで繋がっていない細い糸のようなものだ。いつでも、どちらからか簡単に切ることができてしまう。

夜の街は昼間の賑やかさとはまた違った華やかさを持っていた。すれ違う人々は皆誰かと一緒にいるのに、青藍は一人きりだ。

「常磐」

呼ぶ声は周囲の雑音でかき消されてしまう。

青藍は不安そうに周囲を見回して、あの金色の髪を捜す。昼間ならすぐに分かるのに、夜闇に吞まれたそれは、なかなか青藍の瞳に映らなかった。

「常磐」

今度はさきほどよりも強く、名前を呼ぶ。

泣き出しそうになるのを堪えて、青藍は何度も何度も常磐を呼んだ。

迷子になったみたいだ。頼れる人なんていない。母親が死んでからずっと一人で生きてきたというのに、今更どうして常磐がいなければ駄目だなんて思うんだろう。

一人でも人は生きていける。そう信じていたのに。  
ぬくもりを感じたその時から、もう離れられない。

「……ときわ」

こんなにも常磐が愛しいと思うのは、たぶん真朱も一緒。  
求めてやまないのはたぶん、青藍と真朱の、二人が彼を必要としているからだろう。

根本的なところで、青藍と真朱は同じなのだ。

「夜に、一人で出歩くな」

歩き疲れて、道の端で座り込んでいた青藍の頭上から、優しく、そしてどこか苛立ったような声が降ってきた。

顔を上げれば、そこには金色の髪が輝いていた。月なんか霞んでしまつくらいに、青藍には眩しく見えた。

「常磐っ」

躊躇いもなく常磐の首にしがみついた。一瞬バランスを崩しかけた常磐も、青藍の背中に手を回しその華奢な身体を支える。

「側にいたい。側にいて。確かにそれは真朱の願いでもあるけど、私の意志でもあるよ。私は私の意志で、常磐と一緒にいたい」

堪えていた涙が今更溢れてきた。安堵に身体力が抜ける。  
「それで、いいのか」

躊躇するような常磐の声に、青藍は迷いなく頷いた。

ふう、と呆れたのか、安心したのか　どちらとも分からぬため息が耳元で聞こえた。

「戻るか」

そう短く言うと、常磐はそのまま青藍の身体を抱きかかえた。これではまるで子供のようだと　片手で軽々と抱えられてしまった青藍はふて腐れる。

夜の街の賑やかさが、今はもう怖くない。

行き交う人々に奇妙な目で見られることも気にならなかった。西洋の男に抱えられた、東洋の少女。傍目からすれば確かに奇妙な取り合わせだ。

「どこに、行きたい？」

常磐の問いに、うん？　と青藍は首を傾げる。

「もともと、根無し草みたいに適当に旅してきたからな。次に行く先も決めてない。おまえはどこに行きたい？」

どこに、と問われても、青藍にはすぐに思いつかなかった。

青藍の世界はそれまでとても小さくて、自分の住む村と、その周辺の森だけが彼女が生きていく上で必要な場所だった。

どこにどんな国があるのかも、この世界がどれほど広いのかも、青藍は知らない。

「どこでもいいよ。常磐がいるなら」

青藍にとつて重大なのはそれだけだ。

「寒いのと暑いのと、どっちがいい？」

「寒いのは平気。暑いつてどのくらい？」

「吸い込む空気すら熱く感じる場所もある」

想像してみて、青藍はうわ、と呟く。北の方に住んでいた青藍には耐え難い気候だろう。

「それは、まだいいかな」

たぶん耐えられないと思うし、と呟くと、常磐が苦笑しながら同意した。

「とりあえず、これから決めればいいか」  
時間はいくらでもあるからな、という常磐の言葉に、青藍は頷く。

二人でいられるなら、どんな場所でも良かった。  
二人でいられるなら、どんな場所でも幸せだった。

## 10：人と神（1）

共にいるだけで幸せだと、そう思えた。

青藍と常盤が一緒に旅をするようになって、三ヶ月が経とうとしていた。青藍が暑さに弱いだろうという考えから、二人はただ北上している。

村の外、というものを知らない青藍にとっては先々で見る景色のどれもが真新しく、きよろきよろと忙しく首を動かしているのが最近の光景だった。

北上しつつ、西へと向かっているため、黒髪の人間が徐々に少なくなり、代わりに色鮮やかな髪の人を多く見るようになった。燃えるような赤い髪、常盤のそのように輝く金色　瞳の色も様々だ。

「このまま進めば、アラガルドの街に着くな」

常盤が太陽の位置を確かめて、そう呟いた。

「あらがるど？」

横文字には相変わらず慣れていない青藍が、首を傾げて問いかける。常盤は青藍を見下ろし、柔らかに微笑んだ。最近よくこういう表情を見る。

「西と東のちょうど中間にある国の、交易都市だ。今までおまえが行った街のと比べ物にならないほど広い。迷子になるなよ」

ふわ、と髪を撫でられて青藍はむ、とする。

「子供じゃないんだから、平気だよ！」

大人、とは言えないかもしれないが、人ごみの中で迷子になるような年ではない。常盤は基本的に青藍を子ども扱いする。それもかなり幼い。

「気をつけると言ってるだけだ。もしそうになったら宿屋に戻れよ。」

正直治安はそれほど良くないからな」

「言われなくても分かるってば……」

そんな初歩のところから教えられることばかりなので、青藍はこの頃抵抗することすら面倒になってくる。確かに旅をするにあたって、世間知らずだった青藍にあらゆることを教えたのは常盤だが、それと一般常識とは違う。

それでも青藍は母が亡くなった後、一人でどうにか生きてきたのだ。一般常識という分類では同じ年の子供より上であると主張したい。

それが無駄であるとも分かっているのに、もう何も言わないのだが。

「それに、会わせたい奴もいる」

そう言いながら差し出される手を、青藍は当たり前前のもののようにとった。大きな手が小さな青藍の手を守るように包み込む。

「誰？」

「会えば分かる」

たぶん、と付け加えられ、青藍はただ首を傾げた。特に興味もなかったなので、青藍は追求もしない。

ただ握り締められる手のぬくもりに甘える。

ほどなくアラガルドの街に着き、握り締めた手を離さなかった。本気で迷子になりかねないほどの人の量に、青藍はただ呆然としていた。

常盤の忠告になるほどと納得し、そして

まさか、この年で迷子になるとは思わなかった。

本気で離れたら終わりだ、と思っていたので、繋いだ手は意地でも離さないつもりだった。

しかし人込みの中、ずっと手を繋いだままでいるということは困難で、波に飲まれたと思った時には、手のひらにぬくもりはなかった。

「常磐！」

以前なら見つけやすかった常磐の金色の髪も、常盤が言っていたように、このあたりではもう珍しくなかった。金の髪の人さきほどから何人もいる。西と東が交わるところというだけあって、黒髪もちらほらというから常盤からも探しにくいだろう。

いくら呼んでも、常磐の姿は一向に見当たらない。

旅に慣れてきたとはいえ 見知らぬ街に独りでいれば、どうしようもなく不安になる。

「……常磐」

子供のような情けない声しか出なくなってきた。呼んでも常磐は見つからない。

小さな頃、同じように街で迷子になったことがある。

泣くだけ泣いて、途方に暮れていたところ見つけ出してくれたのは母親だった。

遠くから聞こえた自分を呼ぶ声に心の底から安堵したのを覚えている。

止まっていたはずの涙がまた溢れ出して、母親に抱き付いて離れなかった。そこだけが、自分が安堵できる場所だともいうように。懐かしさと不安がこみ上げてきて、青藍は泣きそうになった。



涙を堪えていると、どこからか嫌な視線を感じた。少女が街中で一人でいることは、やはりどの街でも危険だった。特に活気溢れる街ほど、そういう輩はいるもので。

『それほど治安が良くない』と言った常盤の声が甦る。そう古くない記憶が呼び起こされた。もしかた人売りに捕まれば、どうなってしまうのだろう。

そんな不安を顔に出さないようにしながら、青藍はただ常盤を探した。

しかし見知らぬ気配が複数、近付いてくることに青藍は身体を固くする。

嫌だ。来ないで。

震える青藍の肩を支えてくれる人は、今はいない。

「……まったく。アレは何してるんだ」

背後からの知らない声。しかしそこに危険を感じなかった。

恐る恐る振り返った先にいたのは、少し濃い肌に赤茶の髪の

青年、で合っているのだろうか。見た目に合わない雰囲気を持つ男だった。

「……だれ？」

随分と身長差があるので青藍は首が痛くなりそうなほどに男を見上げる。

「常磐の知り合い……」と言っておこう。アレには近付くなと言われたんだが、まあ非常事態だしな。そもそも目を離れたあいつが悪い」

ぽんぽんと頭を叩かれ、不思議と安堵する。そしてこの男から感じる違和感に首を傾げた。

しかし青藍の優先事項は圧倒的に常磐が上で。

「……常磐はどこ？」

青藍の言葉に、東雲は苦笑した。

優しい手は青藍のまっすぐな黒髪を撫でて、まるで我が子を見つめるような温かな瞳が青藍の不安げな姿を映していた。

「そろそろ来る」

気配が近づいているから、と言われて青藍はほっとしたように微笑む。

そして宣言通り、常磐が人込みを掻き分けて青藍のところまでやって来た。息を切らしているその様子から、彼も必死で探してくれただろうと想像がつく。

「常盤！」

青藍は常盤の胸に飛び込んで、幼い頃に戻ったかのように、その腕の中で少しだけ泣いた。

常盤も青藍の不安を拭い去るように強く抱きしめてくれる。その力強さが今は心地よい。

いつから、一人になることをこんなにも恐れるようになったのだろう。

母が死んでから、ずっと一人だったのに。

いつからこんなにぬくもりに甘えるようになってしまったんだろう。

たぶん常盤のせいだ、と青藍は思う。

常盤は青藍を甘やかすから。

側にいたい時に側にいて、青藍に優しくするから。  
甘える青藍を拒むことがないから。

たぶんもう、青藍は一人ではいられない。

## 11：人と神（2）

人目も気にせず、青藍はしっかりと常磐に抱きつく。人ごみのなか、そんな二人を気にする人もそういない。

「言っていただろ、おまえに会わせたい奴がいると。それがこいつだ」

青藍の肩を抱いたまま、常磐が青藍助けた青年を紹介した。青藍はその動きにつられるように顔だけ振り返る。

「東雲だ」

柔らかに微笑む東雲は、やはり青年というのにはどこか違和感があった。老獪という言葉で片付けられるといえばそうなるかもしれないが。

「青藍です」

名乗られた手前、青藍も常磐から離れ、行儀よく挨拶をする。

「ああ、知ってる。生まれたときから」

東雲は笑いながらそう言った。青藍は意味が掴めずに首を傾げ、常磐を見上げた。

「わからないか？」

常磐が面白がるような口調でそう青藍に問う。そんなこと聞かれなくても　と青藍は困惑し、そして違和感の正体に気づいた。

東雲から感じるそれは　夢の中で感じた、真朱のものと  
ても良く似ている。

つまりそれは

「……人神？」

天上の神より人に近い、地上の神々。

当たりだ、と常磐が青藍の髪を撫でた。真朱と共に暮らしていたことのある常磐が、人神との付き合いがあるとしても不思議はない。青藍は素直に納得した。

「……東雲様は、真朱とも親しかつたんですか？」

神と名乗られた以上、敬意を払う必要があると青藍は東雲を様を付けて呼ぶことにした。真朱には敬意なんて言葉すら浮かばない。

「いや。アレは人神と交流はなかったよ。嫌われていたからな。神という名のつく者達に」

「……………東雲様、もですか」

問うことを躊躇したような青藍の言葉に、東雲は苦笑した。

「例外はないさ。アレも神を嫌っていた。憎んでいたとも言えるな。俺はこいつと知り合うことがあったただけだ」

だから、他の人神よりはあいつに詳しい、と東雲は呟くように言った。

そこまで話をして、青藍は一つのこと気がついた。東雲は、ただの一度も真朱の名前を口にしない。まるで口にすれば汚れてしまうかのように、その単語を避けてる。

青藍も真朱は嫌いだ。けれど、少しでも同情してしまうのは、欠片でも真朱の残した何かが青藍の中にあるからだろうか。

彼女はたぶん、人にも神にもなれず、孤独だったんだろうなんて、そう憐れんでしまうほどには、青藍は真朱を完全に嫌悪できなかった。

「では、私のことも目障りなのではないんですか？」

青藍の問いに、東雲は驚いたように目を丸くした。青藍は特に気にした様子はなく、ただじっと東雲を見つめている。

東雲の大きな手が青藍の頭を優しく撫でた。苦笑しながら、それはないと東雲が答える。

「生まれ変わればもう別のものだ。混同するほど俺は愚かじゃない。おまえが生まれたときからアレの生まれ変わりということで監視はしていたがな、それはもう今となっては監視ではなくなってます」

たよ。わざわざ嫌っている人間の前に姿を現すほど、暇でもないしな」

随分とひねくれた言い方だが、つまりは嫌われていないということなのだろうか、青藍は首を傾げる。

「つまりはおまえが可愛くて仕方ないってことだよ」

常磐が笑いながら付け加えてくれる。

そう言われても、青藍からしてみれば奇妙で仕方ない。初めて会った人に可愛くて仕方ない、なんて告白されても反応に困る。

無条件で自分を好いてくれる人なんて、母親以外にはいなかったのに。

自分が知らないだけで、ずっと青藍は見守られていたなんて。

「常磐に近づくなと念を押されていたからな、今まで会うことは出来なかったが」

「なんで？」

別に害があるわけではないだろうに、と青藍は常磐を見上げて問う。

「混乱するだろうと思ったからさ。そうも言ってられなくなったが」

青藍は分からずにますます首を傾げる。そんな青藍を見て常磐は微笑み、その手をしっかりと握る。

「とりあえずどこか店に入ろう。そこでゆっくりと話でもすればいい」

そうだな、と東雲が同意する。立ったままというのも疲れるので、青藍も素直に頷く。

常磐の手をしっかりと握り返し、人ごみにもまれながらも今度こそ手を離すまいと必死になる。

背の高い青年が二人に、どう見ても血縁ではない少女　そのうちの一人などは人とは思えないほどの美貌の持ち主でもあるから、

周囲からの視線の集まりようは半端ではない。

「大丈夫か？」

常磐が青藍を気遣いながら、店の扉を開ける。  
人ごみのなかでもみくちやにされた青藍は呼吸困難になるのではないかと真剣に思った。

「だい、じょうぶ」

人ごみさえ抜ければあとは呼吸を整えるだけだ。  
心配そうに見つめてくる常磐に微笑み、心配いらないと手を振る。  
常磐も微笑み返して、繋いだ手はそのままに、店の隅の方のテーブルに座る。東雲はそんな常磐の様子に苦笑しながらそのあとをついてきた。

店員に注文を聞かれ、適当に頼むと妙な沈黙が落ちる。  
若い女性の店員が先ほどからちらちらとこちらを見ていた。常磐と東雲に興味があるのだろうか。

「……それで？」

女性店員の視線に青藍はむ、としながら話を進める。  
常磐と東雲は一度顔を見合せて      結局常磐が話し始めた。

「簡単に言えば、おまえが神々から狙われているかもしれない」

突然降ってきた話に、青藍は目を丸くする。

「何それ」

あまりにも常磐の口調が軽かったからだろうか、危機感を抱くような余裕はない。まるで冗談を言われているかのようだ。

「真朱が神々から嫌われていたということはもう理解できただろ？」  
こくん、と青藍は頷く。初めて会ったが人当りよさそうな東雲がやんわりと拒絶しているということは分かりやすい例だった。

「神々にとって、真朱の存在は、死ねば終わりだった      が、おまえが生まれた。真朱の魂と、わずかだが記憶を持つおまえが」  
それはどの神々にも予想外だったはずだ。

人と人神の子供である真朱　その存在は神々に恐怖を与える。

絶対的なものだったはずの自分達が、実は欠陥だらけだったと突き付けられているような気分を与える。

「そして、おまえは俺と出会った　出会ってしまった。神々は余計に焦っただろうな」

常磐が苦笑しながら、青藍の頬を優しく撫でる。

「今はまだ動きはないに等しいが、いずれ接触を図ってくるかもしれない。もしかすれば、命を狙われることもあるかもしれない。神の住処に幽閉される可能性だってある」

口調はとても優しいが、言葉に隙はない。その可能性が、可能性のまま終わることはないだろうと暗に告げていた。

「だから、俺一人では万が一の時動くのに時間がかかる。だからこいつと会わせたかったんだ」

「一応は神様だからな、俺も」

ふう、とため息を吐きながら東雲が言う。

神との交渉の際に、常磐では相手にされないかもしれない。けれど東雲ならば

つまりはそういう未来まで予想して、常磐は青藍の身の安全を考えてくれているのだ。

「……………つまりは、真朱が神様に嫌われていたから、私も嫌われているってこと？」

言葉にするとそれはとても子供じみた話のように思えた。

「　　すまない」

東雲の静かな謝罪が、それを真実だと教えてくれる。

まるで知らない相手に、まるで関係のないことで拒まれる　ひどい話だと青藍は笑う。それは何かを諦めているような笑みだった。

「東雲様が悪いわけじゃありません……仕方ないです」

真朱は禁忌の存在。

その存在は神々を脅かす。



別に、特別でもない人間に拒まれようが恨まれようが、あまり心は苦しくならない。

青藍は常磐さえいてくれればいい　そう思える。

「しかた、ないです」

けれど自分に言い聞かせるように呟いた言葉は、あまりにも虚しくその場に響いた。

## 12：人と神（3）

くだらない。

真っ白な髪が風に揺れていた。

華奢な彼女を囲む人々は神か、人か。

何を恐れる？ 何を怯えている？ 人を愛すように人神を作ったのは天の神々であるあなたたちでしょう？

嘲笑する彼女を、周囲の神々はただ厳しい顔で睨む。

生まれ出た命に罪はないなんて考えはないのか。神が聞いて呆れる。もはや死んだこの私を捕らえ、輪廻の輪から遠ざけるつもりか。

その声に、常磐に向けていたような甘さも優しさもない。嘲るように笑い、そしてその赤い瞳で数多の神々を睨んでいた。

かちやり、と周囲の神々が刃物を構える。

ここまでするかと笑う彼女に諦めの色はなかった。

ならば呪いを残しましょう。あなたたちはいつまでもこの真朱に囚われる。いつまでもいつまでも、自分達の過ちに怯え続けなければならない。

捕らえるのなら捕らえればいい。この魂、簡単には渡さない。

暗闇の中、青藍は目を覚ます。

上体を起こして周囲を見ると、常磐や東雲と共にやって来た宿屋だ。女の子なのだからと主張する東雲に押されて青藍は一人部屋だ。常磐は危険が迫っているかもしれないのだからと一緒の部屋にしようとしていたのだが。別に青藍は常磐と一緒にの部屋でも良かった。

「……………ゆめ、かな」

ぼつりと呟いた言葉はあまりにも儚く空気に溶けてしまう。

今日は月が明るい。目が慣れれば部屋の中が十分に見渡せた。

一人部屋だけど、一人でいるには広すぎた。

「常磐」

嫌な夢だったのだと思う。

あのあと真朱はどうなったのだろう。

思い出そうとしても、身体が震えるだけだ。このまま眠れば夢の続きを見るのだろうか。

青藍はベットから下り、部屋からそつと出る。常磐と東雲は隣の部屋だったはずだ。

部屋の鍵は渡されていたので音を立てないようにそつと鍵をあけた。

二つ並んだベットの上で常磐も東雲も大人しく眠っている。これでは誰かが侵入してきても気づかないのではないだろうかと青藍は苦笑した。

そつと常磐が眠るベットに近づく。

綺麗な金の髪が月明かりに照らされてきらきらと輝いてる。緑色の瞳は閉ざされて 否、まどろむようにゆっくりと開いた。

「と、常磐？」

起こしてしまっただろうかと青藍は少し慌てる。しかし常磐は少し寝ぼけたように手を伸ばし、青藍に触れる。

「どうした？ 眠れないのか？」

優しく微笑む常磐に、青藍の心もほんわりと温かくなる。

「ちよつと顔を見たかっただけ」

甘えるようにそう答えると、常磐はしょうがないと笑う。

「怖い夢でも見たか」

布団を持ち上げて、常磐は青藍を中に入れる。突然のことに青藍は驚いて硬直した。

「と、常磐！？」

慌てて布団の中なら出ようとすれば、うるさいと言われてしつかりと抱きしめられる。ちよつと常磐の腕を枕にしているように青藍は横になっていた。

ほんの少し顔を見て落ち着いたら戻ろうと思っていたのに 常磐はほとんど寝ぼけているらしいことだけは分かった。

温かいぬくもりに青藍も眠気がやってくる。

戻らなければ、という意味とは反対に青藍はまどろみの中に落ちて行った。

朝の光に眩しそうに目を細め、常盤は目を覚ました。

なんだか妙に温かったような。

そう、まるで子猫と一緒に寝たときと同じように。

原因はすぐに分かった。

隣で常磐にくっついて眠っている青藍の存在に、常磐は硬直した。  
「……………アレ？」

どうしてこんなところに、と考え、夢うつつの中でそういえば青藍が来たような気がすると考え始める。

「あ……………朝か、おい青藍を起こしに」

東雲があくびをしながらベットから下り、青藍を起こしに行こうとしたのだろう。しかしその青藍が常磐の隣ですやすやと眠っているのを見て常磐同様、硬直した。

「……………」

「……………」

お互い顔を見ながら沈黙が続く。  
そしてその沈黙を破ったのは。

「おまえまさか手え出したのか……………！！」

東雲の絶叫だった。

「ば、馬鹿！ 起きるだろうが！！」

慌てて常磐が東雲の口を塞ぐ。青藍は唸りながら寝がえりをうつ。二人で沈黙してその姿を確認し、ほっと安堵してから常磐は東雲の口から手をはなす。ついでに青藍に布団をかけなおしてやった。

「おまえいつのまに青藍を連れ込んだ？ 俺の目の黒いうちは許さんぞ」

まるで父親だな、と常磐はうんざりしながらとりあえず否定する。

「あれが眠れないからってこっちに来たんだよ。何もしてない」

「眠れないからって……………年頃の女の子なんだからそういうことを許しちゃいかんだろう。おまえもおまえだ、まったく」

ぶつぶつと文句を言う東雲を見ながらため息を吐きだし、常磐はまだ眠ったままの青藍を見る。真っ黒な髪は少し寝癖がついている。規則正しい寝息を聞いて目を細めた。

孤独でいることが普通だったのだろう　青藍は飢えたように常磐に甘えてくる。甘やかしてくれる人間がいなくなったことで、甘えたい時に甘えられなかったからだろう。青藍は妙に大人びているわりに、子供っぽいところがある。

「ん……」

触れようとして伸ばした手が、青藍の声でぴたりと止まる。

眩しそうに目をきつく閉じ、明るくなる視界が慣れないのか、目をこすりながら青藍が目を覚ました。

「……おはよう、常磐」

「ああ」

まだ寝むそうにしている青藍のせいで朝から濡れ衣をかぶりそうになったのだが　実に熟睡できた様子の彼女を見ると、強く怒ることもできない。

「よく眠れたか？」

聞くまでもない質問だが、常磐は頬に張り付いた髪を払ってやりながら問う。

「うん。怖い夢はもう見なかった」

半分寝ぼけているせいか、子供のような口調で青藍が答える。潜り込んできた理由はそんなところだろうと思っていたので常磐は微笑むだけで何も言わない。

「おい、起きたなら顔洗って着替えてこい。自分の部屋で」

くいつと東雲が隣の部屋を指さす。

着替えも何もかも向こうの部屋だ、と青藍が苦笑して頷く。

「着替えたらまた来るね。朝ごはんまだ行かないでよ？」

用意がもう整っているらしい東雲と、まるでまだ何もしていない常磐に向かってそう念を押して青藍は部屋から出ていく。

青藍が出て行った扉をしばし見つめて、大人の男二人は大きくため息を吐いた。

### 13：呼ぶ名前（1）

集まる視線にも随分慣れた。

常磐も東雲も目立つ容姿である上に、青藍という娘とも妹とも説明のつかない年齢の少女、という組み合わせは人々の好奇心を煽るらしい。

律儀に待っていた常磐と東雲と共に朝食を食べる。青藍は昔こそ小食だったが、常磐があれもこれもと食べさせようとするおかげで食べる量は確実に増えた。

「ええと　それでこれからどうするの？」

一番食べるのが遅い青藍はスープを飲みながら二人に問いかける。常磐と東雲は一度顔を見合わせる。

「……今のところは様子見しかない、な」

けろりとした青藍に戸惑っているのか　ひどく歯切れの悪い常磐の返答を気にする様子もなく青藍はパンを千切る。

「じゃあ、しばらくこの町にいるの？」

「いや、こういう町は都合が悪い。出来ればすぐ発つ」

都合が悪い？　と首を傾げる青藍の正面で水を飲みながら常磐が続ける。

「いろんな人種がいるところだと、それだけ誰でも目立たないからな。偏りがあるくらいの方が警戒しやすい」

「正直俺のところに落ち着けば一番楽なだけだなあ」

東雲が呆れたように呟く。東雲のところ、というのはたぶん人の世ではないのだろう。人神の住まうところならばおそらく神の世界に近い。

「あその空気は俺には合わないんでね」

何度も交わされた会話なのだろう、分かり切った答えを待っていないかのように、東雲は肩を竦める。

「常磐が行かないなら私も行かない」



きつぱりと青藍が言い切ると、東雲ははああ、とため息を吐きだす。

「言うと思った。おまえが釣ればこいつもついてくるんだけどなあ」

「逆だと思う。常磐が釣れると私もついてくるの」

私が常磐についているんだもの、と笑うと、東雲も苦笑して青蘭の髪を撫でる。

「早く食ってしまえ。食い終わったら買出しだ」

神様なんだけどなあ、と青藍は笑う。東雲はまるで親戚のおじさんかお兄さんのように親しみやすい。

買出しにて青藍に新しい服を買おうということになり、二人が愛らしいワンピースを薦めるのをどうにか振り切って、少年が着るような上下の服を手に入れた。動きやすいので青藍は気に入ったのだが、二人はご立腹らしい。

「あの服の方が可愛かったんだがなあ」

「似合ってたのに」

大人二人からの集中攻撃に青藍は若干負けそうになったが、きつと言い返す。

「今まで常磐が買ってくれたのは全部あんな感じのじゃない。少しくらい動きやすい服がないと駄目だよ。一応旅してるんだし」

青藍も年頃の女の子だからこそ、可愛いと言われれば悪い気はしない。だがやはり機能性を考えると少女の服というのは旅にはかなり向かない。

短い髪といい、少年の服といい、今の青藍は少女には見えにくいだろう。

「まあ……防犯的なことも考えればそれもいいかもしれないけどな」  
悪い虫がつかなくていい、という東雲の言葉に常磐が大いに頷く。

青藍は意味が分からずにただ首を傾げた。どういう意味？ と問うが頭を撫でられて終わりだ。

こんな日常が続けば、と心の底からそう思う。  
続くわけがないのだと、冷静なもう一人の自分が訴えてきてるの  
だけだ。

その日の昼には賑やかな町を発った。

森を抜けて次の町へと向かう。昼間でも大きな木々が太陽を遮る  
森は、どこか薄暗く、湿った風が頬を撫でていく。

気味が悪いな、と青藍は自然と常磐に寄り添うように歩く。

一人だけあぶれた東雲が苦笑しながら前を歩いていた。

踏みしめる落ち葉は乾いた音もせず、ただ土に埋もれていく。  
見上げれば深い緑。この落ち葉はいつたいいつ地面に降り立ったの  
だろうと青藍は思った。

「ここ抜けると町？」

「いや、しばらく歩く。次の町は西洋に近いな。たぶん、おまえ目  
立つぞ」

その黒い頭とか、と笑いながら常磐が髪を撫でた。

じゃあ常磐のような、金色の髪の人がたくさんいるのだろうか。  
もっと違う髪の色の人がいるのだろうか 常磐が連れ出してくれ  
る世界は、いつも青藍に真新しい。

湿った空気にも、しばらく歩けば自然と慣れた。

常磐にぴったりとくっついて歩いていた青藍は徐々に離れて行っ  
て、近くの植物に手を伸ばし始める。子供そのものの行動に大人二  
人は微笑ましげに観察するだけだ。

「怪しい植物には触るなよ。毒だつたらどうする」

目の届く範囲でしか動かない分まだ幼い子供よりマシかと東雲が苦笑しながら注意する。

ずっと幼い頃から監視という形で見守ってきたが 最近の青藍は実に伸び伸びとしているようだ。守ってくれるという絶対的信頼が、常磐にあるのだろう。その常磐を通して東雲にも多少の信頼があるはずだ。

母と二人で暮らしていた頃も、独りになってからも どこか青藍は感情を落とした人形のように、ずっと不憫に思っていたのだが。

「元気になりすぎな気もする」

ふう、と東雲はため息を吐きだしながら呟く。

「ひつついてきたかと思えばアレだ」

くすくすと笑いながら常磐が言う。

「似ても似つかないな、真朱とは」

そう続けた常磐の言葉はどこか寂しげだった。青藍を見つめる目には切なさが宿る。

そんな常磐を見て、東雲は眉間に皺を寄せた。何よりも過去に囚われ続けているのは間違いなく常磐だ。

「とき」

一言言おうと、口を開いた時だった。

涼しい森でもなお寒気がするほどの、冷氣。

「 忌み子め」

低くその声は響いた。

東雲が見た先には青藍がいた。その青藍の後ろには闇とも光とも

いえるものを纏った人　否、それは人ではなかった。

振り返った青藍の目に、それは懐かしく感じた。青藍を見下ろすその神は、ただ汚いものを見るような目をしていた。鎌を振りおろそうとする姿がまるで死神のようだ。

ああ、まずい。

このままでは死んでしまう。

頭の中ではそう冷静に思っているのに、身体は凍りついたかのようにならない。

常磐が必死に手を伸ばしていた。

その手に応えようと青藍も手を伸ばしかけた。

「

真朱！」

耳を疑った。

しかし確かに彼はそう叫んでいた。

伸ばしかけた手はゆっくりと下ろされた。  
自然と青藍の瞳からは涙が零れた。

## 14：呼ぶ名前（2）

「下がれ！　ここは人神の領域だぞ！」

東雲しのめの声が森に響いた。

青藍せいらんの背後の神は静止し、東雲と睨み合う。振りおろされかけた鎌は未だに青藍の細い首を狙っていた。

「天上の神々が領域を侵すのか。もとよりその子はただの人の子。魂の罪はすでに贖われたはず」

今の東雲には親しみやすさがない。人神としての威厳が空気すら押しつぶすように感じられた。

しかし、青藍にはそれすらどうでもいい。

『真朱しんしゅ』と。

常磐とこわが、確かにそう呼んだ。

今まで、ただの一度も青藍の名を呼んだことはないのに。

名前を呼ばれなくても、それだけ近くににいるからだ。そう誤魔化すことが出来たのに。揺るがない証を突き付けられたようで、青藍は目の前が真っ暗になった。

頬を伝う涙が痛い。

常磐は隙について青藍の腕を掴み、そのまま引き寄せる。鎌の切っ先がすれすれのところで青藍を傷つけることなく、すり抜けた。引き寄せられるままに青藍は常磐の胸にもたれる。力強く抱きしめてくれる常磐の腕が、今は何故か鬱陶しい。

触れてほしくない。

「存在そのものが罪だ。天上の神々を脅かす前に、消してしまうほうが世のため」

低く紡がれる言葉は、常磐の言葉ほど青藍には毒に感じなかった。常磐の口から発せられた『真朱』の方がずっと痛い。

「アレに連なる子だからという理由で殺されるのか。それは人神として許すわけにはいかない」

そもそも真朱にも罪はなかった。罪を負うべきは彼女の両親だけだった。

ただ神々が真朱という存在を許せなかったただけだ。それが存在しなかったと思いこみたただけだ。

「……そもそも、その忌み児は生まれる運命になかったはず。白き人神の魂は永遠に神世に囚われているのだから」

冷やかな目が青藍を見た。

青藍を抱きしめる常磐の腕の力が強くなった。

「運命は神にも分らない。この子がこうして存在するのは、もはや疑いようのない事実だ。どこかで綻びがでたのだろう」

東雲が困惑の表情を浮かべて呟く。

「 引け。その娘は我が保護下にある」

青藍をかばうように立ちながら東雲が強く言い放つ。

一瞬の沈黙の後、恐ろしい死神は姿を消した。空気がその瞬間に変わる。肺を押しつぶしそうな圧力は消え失せ、もとの森に戻る。

さく、と東雲が落ち葉を踏みしめて青藍に歩み寄る。  
青藍の頭は機能していなかった。東雲の声はほとんど耳に届いていない。

やっぱり私は、身代わりだったんだろうか。

真朱を失った常磐にとって、『青藍』は個として認められていない存在だったんだろうか。

「放せ」

静かに東雲が常磐に命じた。

何故、と問いたげに常磐はぎゅ、と青藍を抱き寄せる。その様子に東雲は眉間に皺を寄せた。

「以前に、言ったな」

力強いその声が、青藍の耳に届いた。

何を、そんなに怒っているんだろうなんてぼんやりと考える。

「その子に、アレを重ねるなと」

びくりと、常磐の身体が震えた。

東雲は常磐の腕を青藍から引きはがし、優しく抱き上げた。青藍はぼんやりとした頭の中でどこかほっとしていた。

常磐のぬくもりが、今は痛い。

「大丈夫だ、青藍。おまえはちゃんとここにいる」

優しく大きな手が青藍の頭を撫でた。いつも撫でてくれるぬくもりとは違うのに、違うことに安堵している。



青藍は東雲の上着を掴み、静かに泣いた。

常磐は二人の背中を見送ったまま、しばらく立ち尽くした。

自分はどうしてこんな過ちを犯したんだろう。

今まで、青藍と真朱を混同して見たことなんてなかったはずなのに。

よりにもよって、あの小さな女の子が危険な時に、どうして彼女の名前が出てきてしまったんだろう。

常磐は拳を作って樹の幹を殴りつけた。

衝撃で葉が舞い落ちる。手が痛んでも気にならなかった。

一体、どこまで呪えば気が済む。

真朱。

これ以上大切なものを失いたくないのに。これ以上何も失いたくないのに。

大切なものはいつもこの手のひらからすり抜けていく。

東雲は青藍を抱きかかえられたまましばらく歩き、予定とは変わってその日は野宿になった。昼間に襲撃があった以上、今夜は人を巻き込まない為にも町に入らない方がいいだろうと判断した。

「そのうち、常磐も追いつくだろう。あいつには頭を冷やす時間が必要だ」

ぱちぱちと火が音をたてて燃え上がる。

青藍はあれから黙ったままだ。常磐に依存していた青藍には、分かっていたとしても辛い現実だったんだろう。

そつとしておこうと、東雲もあまり刺激しないようにしている。突き放されたような青藍の顔と、呆然とした常磐の顔。二つの表情が東雲の目に焼き付いている。やはり二人は出会わない方が幸せだったのかもしれない。

「東雲様」

ぽつりと青藍が口を開いた。

青い瞳には炎が揺らいでいる。

強い瞳に射抜かれて、東雲は言葉を失った。

「お願いします。教えてください。真朱のことを」

ああ、なんて強い子なんだろう。この子は。

東雲は眩しいものを見るような気分で青藍を見つめた。

「いいのか。知らない方が幸せかもしれないぞ」

普通の子供ならば知らないままの遠い過去だ。確かめるように問うと、青藍はしっかりと頷いた。

「たぶん知らなきゃいけないんです。私は。このまま常磐と共にいようと思うのなら」

ああ、まだこの子は常磐を見捨てないでいてくれるのか。

## 15：遠き記憶（1）

それは、もう気が遠くなるほど遠い昔のこと。

それでも、目を閉じれば今でも鮮やかに彼女を思い出すことが出来た。

憎しみと、愛しさとともに。

駆け抜けた先で、ようやく出口を見た。

救いを求めるように差し出した手は、見えない壁に阻まれる。

「くそっ」

深い森を抜ければ、先にあるのは小さな村だ。かつてこの場所から森へと入り、静かに朽ちるだけだと思っていたのに。

何度森から出ようとしても、まるで薄い硝子でもあるかのように、森から一步も出ることは叶わない。

「無駄よ、常磐。あなたは森から出れない」

くすくす、と嘲笑うような声が聞こえて、頭上を見上げた。すると木の枝に腰掛けた白き少女が常磐を見下ろしていた。

真っ白な長い髪は結われることなく揺れていて、赤い瞳は玩具で遊ぶ子供のように無邪気だ。

少女の姿をした悪魔。

「俺に何をした」

「人ではない生き物に変えたのよ。神様の力というやつでね。素敵でしょう？」

ふわりと、音もなく地に降り立ち、神だと名乗る悪魔　真朱は常磐を見上げ、その頬に触れながら笑う。

「触るな」

頬に伸ばされた手を振り払う。その勢いで常磐の手の甲が真朱の頬を打った。

加減をしていなかった分、嫌な音がした。軽い真朱の身体は簡単に吹き飛ぶ。子供に手を上げてしまったと、動揺する。

「……平気よ。慣れてるから」

真朱は怒ることなく、打たれた頬を押さえながらゆっくりと立ち上がる。小さな手のひらでは赤く腫れた様子を隠しきれない。

その様子に常磐はただ居心地が悪くなる。殴った感覚の消えない手が壊死していくような気がした。

真朱は常磐を振り返ることなく森の奥へと歩いて行く。

白く長い髪が暗い森の中で浮かび上がっていた。

常磐にはこの森に来る前の記憶がない。

正確にはなくなった、なのだろう。傷だらけでこの森まで逃げて来た時には、怪我を負った理由も逃げて来た理由も覚えていたと思う。しかし今の常磐には『何故か怪我を負って、誰かから逃げた』ということしか覚えていない。

家族がいたのかも、本来の自分の名前も。

記憶を消したのも、おそらく真朱なのだろうということは想像できた。思い出した方が良い記憶なのかどうかも分からないから、この点に関してはどうすればいいのか分からないかった。

ただ森の中を彷徨う日々が、どれほど続いたのだろうか。

永久にも感じるほど長い時だった。時折からかうように真朱がどこからかやって来ては常磐に話しかけてきた。その度に鬱陶しいと追返し、時には傷つけ　そのことに罪悪感を覚え続けてきた。

何も食べない日々が続いても　飢えを感じるものの、それが常磐の命をすり減らすことはなかった。

死ねない身体というのは本当なのか、と苦笑しつつ　心臓を貫いたらどうなるのだろうなんて考えが頭の隅をかすめた。食べることも億劫で、立ち上がる気力もなくなりそのまま座り込んで木々の合間に見える青空を見上げる。

死ねないことが恐ろしいなんて、常人には理解できない恐怖だろう。

「　自虐的ね、常磐は」

青空が白く染まった。

少女が呆れたように常磐を見下ろしている。

「　……近寄るな」

「随分嫌われちゃったみたいね。……逃げる気力もないくせに」

馬鹿な子、と笑いながら常磐の頬に手を伸ばす。

振り払おうにも手を上げることすら辛い。そしていつも小さな手を振り払ったあとに感じる罪悪感を思い出してさらに躊躇した。

「そう簡単に壊れるようには作ってない。飢えても、心臓を刺しても、首を貫いても　常磐は死なない。その綺麗な姿のままで永劫の時を生きるの」

くすくすと笑いながら真朱は「素敵ね」と呟いた。

「　……さい、あくだな」

苦しげに息を吐きながら常磐は呟く。

「どうして？　神様よりも長く生きれるのよ？　人も神も超えた存在になれるのに、何が不満なの？」

常磐は沸き立つ苛立ちを抑えきれずに渾身の力をこめて叫んだ。  
「どうして？　ふざけるな！　俺がいつそんなものを望んだ！！」

いつ俺を化け物に変えてくれなんて言った!!」

真朱の小さな手を握り締めて、睨みつける。

真朱はきよとした後で、ふわりと微笑んだ。

「あなたが望んだんじゃない。死にたくない」と

違う? と小首を傾げて問う真朱は一見するだけならば愛らしい。

荒い呼吸のまま常磐は真朱を見上げて睨み続けた。

「そんなもの、覚えていない。どうして死にかけたのかも、どうして死にたくなかったのかも! おまえの仕業だろう!？」

常磐の悲痛な叫びに真朱は動じることなくただ静かに見下ろしていた。赤い瞳が無感情でただ常磐を映す。

「知らない方が、幸せなこともあるわよ？」

ただ無表情に見下ろしてくる真朱に飲まれる。

記憶を無くすかそのまま残すか、その選択すら許されなかったのに、彼女から慈愛すら感じてしまいそうな声だった。

無の表情の中に、どこか優しさを感じるなんて、とうとう脳までおかしくなったのだろうかとかと常磐は笑う。

「……それでも、失えば悲しいだろう」

強く握りしめていた真朱の手をすりと放す。

放れた真朱の手は、躊躇うことなく優しく常磐の頭を撫でた。

「不器用ね、常磐は」

苦笑まじりのその言葉に反論する力はもうわずかにも残っていない。

徐々に遠のいていく意識の中で、真朱の声だけがいつまでも頭の中で響いていた。

「私を心の底から憎むこともできないなんて」





## 16：遠き記憶（2）

目を覚ますと身体は泥に埋まっているかのように重かった。  
眩しい光に目を細めながら、ぼんやりと天井を見上げる。建物の  
中で目覚めるなんてどれくらいぶりだろう。

「起きたの？」

柔らかな声に、思考力が急激に戻ってきた。

慌てて起きあがると、そこには真つ白な髪に真紅の瞳の少女  
真朱がただじっとこちらを見つめていた。

「……なんで」

ここにいる、と低く呟くと、真朱は淡く微笑む。

「倒れた人間を放置するほど最低ではないわ。もっと身体を大切に  
してくれなくちゃ。私の大事なもののなんだから」

いとおしげに見つめてくる瞳が鬱陶しかった。

大事なもの　大事な玩具の間違いだろう、と叫びたいのに何故  
か声が出なかった。

苛立つ気持ちを抑えようとシーツを握り締める。不思議ともう空  
腹も感じず、眩暈もなかった。真朱がまた何かしたのだろうかと思  
えてすぐにその考えを追い払った。それが真実だとすると、もっと  
苛立ちが募るばかりだ。

「……まだ寝てなきや駄目よ。どうせここからは出れないようにし  
てるから、しっかり休みなさい」

「森と同じ仕組みか」

睨みながら問うと、ふっ、と真朱は笑いながら頷く。

「だってそうしなきゃちゃんと寝ていてくれないでしょう？　森も

同じよ。外に出ても常磐にとって良いことなんてないわ」

「それは俺が決めることで、あんたが決めることじゃない」

若干声を荒げてそう言う。「そうかしら？」と真朱は微笑む。

「私は神様なのよ」

そう呟く真朱の顔はわずかに曇った。まるで自分で神様だと言っておきながら、それを心の中で強く否定しているかのように。

そのまま真朱は何も言わずに部屋から出て行った。すぐにベットから降りて扉に向かうが、扉はぴくりとも反応しなかった。

くそ、と苛立ちを扉にぶつけてそのままずると座り込む。

「ふざけるな……！」

何故、どうして、自分が。

さまざまな疑問は浮かんでは消え、そして消えては浮かんでいく。こんな未来を知っていたならあの時、この森でそのまま果てたほうがましだっただろう。

死ぬことも許されないことが、こんなにも辛いなど思ったことはなかった。

それからしばらく、ぼんやりと外を見ていた時だった。

「おまえか、忌兎に作られた紛い物とは」

窓の向こうで一人の青年が立っていた。肌は少し濃く、赤茶色の髪が肩のあたりまで無造作に伸ばされていた。そして言い表しようのない雰囲気。年齢とは合わない、どこか世離れた老人のような、奇妙な空気。

「……誰だ」

警戒しながら問うと、青年は何も言わずに窓に近づいてきた。そっと窓に触れると、パチンと何かが割れるような音がする。

「名乗る必要はない。人の子よ、人の世界に戻れ」

窓は青年が触れることなく勝手に開かれ、外の空気が部屋に入り込んだ。

「あんたも神様の部類か」

窓枠に触れながら問うと、青年は嫌そうに眉をひそめ、そして目をそらして呟いた。

「アレと一緒にするな」

その声にははつきりとした嫌悪があった。アレというのはおそらく真朱を指すのだろう。

青年に従う必要はないが 部屋から出れることは正直ありがたいと窓から外へと出ようとする。青年はちらりとこちらを見て背を向けた。

「間違えるな、アレは神ではない」

「？」

何を言っているんだ、と眉を寄せた。真朱が神でないというのなら、なぜ自分は生きているというのか。何故不思議な力を持っているというのか。

「それは、どういう……」

背を向ける青年に問いかけようと口を開くと、背後から扉の開く音が聞こえた。どこかひんやりとした空気が背筋をなぞる。

「これは、大きなネズミだこと」

くす、と笑う声は身体が凍りつくほどに冷たい。

微笑む真朱はただ閉鎖していた扉を開けて、そこから一步も動かずにこちらを 閉鎖した空間を壊した青年を見ていた。

「困ったことをしてくれるわね。それは私のものよ？ 勝手に外に出さないでくれる？」

それ、と指差しながらも真朱はまるでこちらを見ていなかった。所有物扱いされることには相変わらず言いようのない嫌悪感が湧き上がってくる。

「馬鹿なことを言っなよ、忌兎が。人は人の世にあるが定め。神でもないおまえが手を出すのは領域違反だ。生かされているというこ

とを忘れるな」

青年は振り返り、真朱を睨みながら呟く。

「東雲、だったかしら。生かされているのだとしても、殺すこともできない下っ端の人神が偉そうに」

一触即発とはまさにこのことだ。二人の間には殺伐とした雰囲気  
が渦巻いていた。こちらの呼吸が苦しくなりそうだと思わずぶつ  
かり合う視線から逃れようと後退る。

「俺が気に食わなかるうがどうでもいい。上の決定だ。この人間は  
もとの世に戻す」

青年 東雲がそう言うのと、真朱が眉間に皺を寄せて無言で睨み  
つける。

重たい沈黙がしばらく続き 真朱は諦めたように踵を返した。  
「好きにすればいい」

白い髪がふわりと風に揺れた。背を向ける真朱の顔は見えない。

「俺の、記憶は――！」

元の生活に戻されても、名前も住んでいた場所の覚えていない。  
そう思っ  
て真朱に向かって叫ぶと、彼女はちらりとだけこちらを見  
た。

「森から出れば徐々に戻るわ」

それだけ言うと、彼女は家の奥へと消えていく。

どこか捨てられたような気持ちがあふつりと湧き そんな馬鹿な  
と首を横に振った。記憶も戻る。元の生活に戻る。そのどこに不  
満があるというのか。

「行くぞ、送ってやる」

東雲が急かすようにそう言う。

こくりと一度頷き、彼女が住むそれなりにしつかりとした家を見  
た。そこはかつて神殿か何かだったのだろうか 白い壁には蔦が  
這い、見事な彫刻であっただろうものは粉々に砕けていた。

後ろ髪引かれるような感覚をどこか感じながらも東雲の背中を追  
い、その森を後にした。

「馬鹿な常磐」

その背中が徐々に小さくなるのを窓越しに見つめながら、真朱は  
呟く。

「外には悲しみしかないのに。苦しみが残ってないのに。それで  
も帰るなんて」

くす、と微笑み、真朱はいとおしげに窓に額を寄せる。赤い瞳は  
ずっと常磐の背中を見つめていた。

「でも、だいじょうぶ」

くすくすと、その声は少しずつ大きくなっていく。

「あなたは必ず、戻ってくるから」

## 17：遠き記憶（3）

閉ざされた森から出た途端、眩暈がするほどの記憶の津波に襲われた。

目の前に見えるのが過去なのか現実なのか幻なのか実体なのかそれすら分からなくなり、思わず固く目を閉じる。そうすることで記憶のみが脳内で再生された。

噎せるような血の匂い。

それは、一番最後の記憶だった。

溢れる血は流れていくほどに体力を奪うような気がした。

進む足どりはどんどん遅くなり、引きずるようにしか歩けなくなってくる。

早く。

心はもつと急かしていた。

早く、早く、早く。

逃げなければ。逃げなければ。

早くしなければ追っ手が来てしまう。そうすれば命はない。

くそっ、と苛立たしげに呟く。どうしてこんな目に遭わなければならない。どうして俺は逃げなくてはならない。

「ガズラル……っ！」

自分が憎々しげに吐いたその人物の名に心当たりはまだなかった。

「大丈夫か」

冷静な声に意識は現実へと引き戻される。

目を開ければ近くにはあの青年がいた。真朱が東雲と呼んでいた青年だ。

「アレに記憶を封じられていたんだろう。森を出たばかりの頃は自分の記憶に飲み込まれやすい。少しずつ取り戻さないとどれが現実か分からなくなるぞ」

東雲は人差し指で自分の頭をつつきながら説明し始めた。

「脳は一度に大量の情報を入れられないからな。おまえはこれまでの人生分の記憶を全部すっかり忘れていたんだ。その何十年分の記憶を数時間で取り戻すと発狂する可能性もある」

たった今戻った記憶はわずかなものだ。それだというのに　頭がぐらぐらと揺れていた。吐き気がして深く息を吐く。

「……休め」

ぼん、と肩を叩かれて力が抜けた。

「……あんたは、」

何者だ、という問いは声にならずにそのまま飲みこまれた。東雲は苦笑しながら首を横に振る。その表情に真朱に向けるような険しさは存在しなかった。

「そのうち説明してやる、言っただろう。休め。これ以上おまえの脳みそに情報を入れるな」

ずるずると木にもたれかかって座り込む。地面に腰を下ろすと、随分と楽になった。

ふう、と息を吐き出してまた目を閉じる。瞼越しに日の光を感じた。

こうしている以上に休まることはなかった。目を閉じれば記憶が蘇る。鉄錆の匂いがその合図のように嗅覚を刺激していた。

「　寝ろ。夢として見る方がまだ楽だろう」

東雲の声がまるで夢に誘い込むかのように深く響いた。

魔法が何かのように意識は闇に落ちていく。闇が深くなるたびに、記憶が呼び戻されて違う場所へと移っていった。

俺は、何から逃げていた？

月の姿のない、暗い夜だ。

部屋の中の明りが怪しく揺らめく中、中年の男を睨みつけて立っていた。

「ジョキルは」

低く問うと、男は口端を歪めて笑う。くつくつと笑い声が暗闇に響き、その気味悪さに顔を顰めた。

「弟君の心配をする余裕がおりとは。流石としか言いようがありませんね、カクタス様」

「黙れ」

腰から下げていた剣に触れつつ低く唸る。

しかし男は動揺した様子もなく歪んだ笑みを浮かべたままが続けた。

「王の器としてはあなたは正しいのでしょう。しかし我々には必要のない。弟君は心配なさらなくても無事ですよ。これから傀儡の王となっていたかなくてはならないのでね」

その言葉を聞いた瞬間に剣は抜いていた。

これ以上この男を生かしておくことはこの国のためにはならない。そう思えばこそその行動だった。

「最低だな、ガズラル」

剣を構え首筋を間違いなく狙う。男　ガズラルは余裕の笑みを浮かべながらこちらを真っ直ぐに見ていた。

「父に仕えておきながら、腹の中ではこの国を狙っていたのだろう。父が危うき今、邪魔な俺を排しジョキルを王座に座らせるために」



過去という名の夢の中からの情報で、少しずつ記憶が繋がっていく。

カクタス　それが自分の名前だった。真朱に常磐と名付けられる前の、本当の自分の名前。

ジョキルという弟を持ち、そして一国の後継者だった。大層な御身分だったんだな、と苦笑するしかない。ガズラル。

国の支配権を狙い、俺を排斥し、そして俺を殺そうとした男。

その男とのにらみ合いは長かったのか、短かったのか　それはひどく曖昧な記憶だった。

気がついた時には突如入って来た男達に斬られていた。

背中を斜めに斬られた。単身でガズラルのもとにやって来たことを悔い、渾身の力で反撃して部屋を飛び出した。

「殿下！」

騎士服を身に纏った男が慌てたように駆けよって来た。

「……レド、馬の準備を」

逃げるぞ、と弱々しく呟くとレドは全てを察したかのように頷いた。身体をレドに支えられながら出来るだけ急いで逃げる。

城のほとんどはガズラルの手に落ちていた。このまま城に残ってもありもしない罪を負わされて、拘束されるだけだ。逃げてても罪を着せられることに違いはないだろうが、自由に動けると動けないとでは大きな違いがある。

だから、この時は逃げるのが最善だった。

駄目だ。

頭の中でもう一人の自分が呟いた。それでも流れていく夢の中の映像は止まることがない。これは夢であって過去であるから当然なのだろう。

俺は馬に乗り、怪我を庇いながらも少しでも遠くへと逃げようとしていた。

レドは俺の隣を気遣うように並走している。血を吸った上着が重そうで、重い。過去の記憶による感覚と、夢として客観的に見ている自分が入り混じって混乱し始めた。

行っではいけない、けれど城にいては殺される。

すべてを忘れてもう戻ってくるな。

それは、今の俺に対する言葉なのか、それとも過去の俺に対する願いなのか。

『あなたは戻ってくる。私の愛しい常磐』

夢の終わりに、白い少女の幻影を見た。

## 18：遠き記憶（4）

ひどく甘い、優しい言葉の余韻だけが残る。

目覚めると青い空が見えて、草の匂いに違和感と懐かしさを覚えた。本来の俺は、こうして草の上で眠ることなんてなかっただろう。それでも今では草の匂いに安堵する。人間変われば変わるものだと苦笑した。

「大丈夫か」

気遣わしげな声に起きあがる。

木にもたれて座る東雲はじつとこちらを見ていた。

「……とりあえず、頭はいかれてないな」

冗談でも本気でもなく気がつけばそう呟いている。気が狂った方が楽なのかもしれないなんて思い始めている自分に嫌気がした。

思い出そうとしても思い出せなかった過去を、心のどこかで拒んでいる。

ずきりと、頭に痛みがはしった。

「もう一休みした方がいいみたいだな。見えるか？」

東雲に促されて見上げた先には、堂々と君臨する王の住まいがあった。かつて、自分がそこから逃げだした場所だ。こちらが眠っている間に移動したということか、と常磐はぼんやりと考える。どうやって運ばれたのだろうなんて疑問が浮かんで、すぐにどうでも良くなった。

「……懐かしい、んだろぅな、たぶん」

胸に浮かんだ不思議な感覚を言葉にしようと常磐は考えたが、「懐かしい」という言葉はどうもしっくりとこなかった。

悲しく、切なく、そして憎らしく。

溢れだそうとする記憶は常磐を苛むばかりで、少しも癒してはくれなかった。

視界が歪んで、過去の映像と今見ている光景が幾重にも重なり合った。

どうして、と叫ぶ自分の声が耳を貫く。

「っ！」

頭を押さえて蹲る常磐のもとに東雲が駆けよる。

「落ち着け、拒むな」

受け入れろ、とそう言う東雲の声が頭の中で反響するのに、どこか遠く感じられた。

もう、どれほど遠くまで逃げただろうか。

追っ手が迫る気配はなく、肩をかすめた傷を庇いながらももつと遠くへと馬を急がせる。長い付き合いのレドは何も言わず隣を走る。父はもう死を待つばかりだ。そして俺が城からいなくなれば、王座に座るのは弟だろう。疑うことを知らない弟がガズラルの手の上で踊らされるのは分かり切ったことだった。

傷を治し、体勢を整え、そして戻らなければ。

そうしなければ、この国は。

「殿下、少し休みましょう。傷の手当をしなければ」

隣を黙って走っていたレドが心配そうに言う。

肩から流れる血は勢いは衰えたものの、まだ衣服を濡らしている。そつだな、と呟いて適度な場所で火を起こした。

肩の傷を手当する。薬はないので布で巻く程度のことしかできないが、止血にはなった。

これからどうするか、そう考えながら空を見上げた時だった。

ぞくりと背筋を走る殺意。

いつの間にか追っ手に追いつかれたのかと剣に触れながら振り返る。

しかし、振り返った先にいたのは追っ手ではなかった。いつも共に行動してきた、長年の友人であり良き部下。

その友人の手には抜き身の剣があった。

「おまえもか、レド……！」

悪い冗談か何かだと誤魔化せる余裕なんてなかった。

レドは明らかにこちらに殺意を向けていた。そしてそれが嘘だと思えるような状況ではない。

「申し訳ありません、殿下」

レドは柔らかく微笑んだままで剣を向けてきている。もはや味方など一人もいないのかと絶望しそうになった。

死にたくない。

その意思だけが俺を動かし、レドの剣を再び避けて流れる血にも構わずに森の中へと逃げた。剣は完全に避けきったつもりだったのにも関わらず、剣は腹部を容赦なく斬った。肩の傷よりも深い。

「殿下……！」

森は奥へ奥へと進めば進むほど薄暗く、まるで侵入者を捕える檻のようで、飛べない鳥を守る鳥籠のようで。どこか安堵する自分に苦笑した。

頬をつたう熱い水に気づかないふりをする。

信じてきたすべてのものに裏切られた気がした。生まれ持ったものをすべて否定された。身体一つの自分になって、自分自身が持っているものは何一つ価値のないものだったことに気づかされた。

森が深くなるにつれ、馬で進むのは難しくなった。ゆつくりと馬から降り、もはや用済みの馬は放した。近場の木にもたれて、一度深く息を吐く。

そして薄暗い森を見つめて、重たい足を引きずるように進み始める。

そう長い距離を歩かずに、ずるりと地面に倒れこんだ。土の匂いが徐々に遠のいていく。視界がぼやけていくなかで、白い光を見た。くすくすと笑う声に、苛立つ。

「ねえ、生きてるの？ 死んでるの？」

その後は、記憶に残っているとおり。

ああ、と吐息にも似た声が漏れた。

どうしても知りたかった自分の過去は、知る価値もなかった。そう、知らない方が幸せだとも思えるほどに残酷だ。しかしその事実すらやはり過去を知らなければ分らないことで、どうあることが幸せだったのだろうなんて考えても無駄なことだと分かっている。

「なるほど、最悪な過去だな」

くつくつと笑いながらそう呟くと、こちらを見た東雲は奇妙そう

な顔をしている。

「裏切られて裏切られて 最後に残るのはなんだろうな？」

目の合った東雲に問うと、困った顔をした東雲は何も答えない。もちろんその問いの答えを自分も持っていなかった。

「……どうする」

「何がだ」

東雲の問いに問いで返した。これからどうする、という意味の問いであるのなら、自分に決定権はないのではないか。

「城に送り届けるか？ それとも別に住む場所をやるうか」

随分と親切な神様だな、と苦笑する。これほど人に親身になる神様もそういないだろう。

「確認だけはするさ。城がどうなったのか。……大体予想は出来るけどな」

今頃育った城は、国は、ガズラルの支配下に落ちているのだろう。レドはどうなったのだろう。ガズラルに尾を振って昇進でもしただろうか。……ジョキルは。

「……覚悟はしておけ」

そう呟く東雲の顔はどこか暗い。

もしかしたらこの男は、この先にある答えを知っているのではないだろうか。

そんな予想は胸の中で浮かび、そして消えていく。たとえこの先にあるのが最悪の絶望だったとしても これ以上の最悪はもうないにない気がした。

王子でもなくなった自分は、一体何者なのだろう。

カクタスなのか。

常磐なのか。



その答えすら、今の自分にはなかった。

## 19：遠き記憶（5）

城は、驚くほどに変わりなかった。

懐かしさと口惜しさが同時に込み上げてきて、唇を噛みしめて黙り込む。握り締めた拳がかすかに震えたことに気づかされる。

「それで、どこから入るつもりだ？」

城には高い城門がある。正面からではとても入ることはできないだろう。いくら長年暮らしてきた城とはいえ、門番とまでは顔見知りではない。

だが。

「俺は、ここで育ったんだぞ」

苦笑しつつ、遠くに見える城と大きな城門から離れて脇道に入る。騎士宿舎のある付近は小さな林と繋がっている。そしてそこには抜け道があるのだ。

「見つければ、殺されるぞ」

東雲の低い言葉に、一瞬だけ立ち止まった。

城の中に入れば、知りあいと会うこともあるだろう。そしてそれはもう味方ではない。確実に敵であり、俺の命を狙うのだろう。

「……その時は、その時だろう」

死んでもかまわない。ただ、すべての現実を受け入れてしまいたい。その先にあるのが絶望だけなのだとしても。

死ぬにしろ生きるにしろ、そうでなければ前へ進めない。

小さな頃の記憶というのは思いのほか鮮明で　遊び場であった城の中に侵入するのはそれほど難しい作業ではなかった。

無言のままに進み続け、結局誰一人とすれ違うことなく、執務室へと辿り着いた。

この城を去った時には自分が使うことが多くなっていた。父はもう　この世の人ではないだろう。

「……ジョキル」

心なしか少し精悍な顔立ちになった弟に話しかける。

身長も伸びているようだ。まるで　自分だけが取り残されたかのように時間が進んだみたいに。

「……兄上？」

ジョキルが目丸くしてこちらを凝視した。

恐らく弟には俺の存在は死んだものとされていたのだろう。

とりあえずは何の怪我もない弟の姿にほっと安堵した。ガズラルの手がどれほど及んでいるかは分からないが　ただ傀儡となるだけの人間には陥っていないようだ。

良かった、と呟こうとしたその瞬間だった。

「　何故、貴方が生きていますか！？　死んだはずだ！　レドが殺したはずでしょう！」

まるで死者を見るような目で、怯えきった瞳で弟は俺を見る。

「三年前とまるで変わらないその姿で　何故貴方は俺の前に現れる！」

……三年？

静かに振り返り、背後に立つ東雲に目で問えば、同じように静かに頷かれた。

「……外界では、それくらいの年月が経っているだろう。あの森はアレのせいで流れる時間が外とは違う。そもそもおまえが目覚めるまでにあの場所で数か月かかっているからな」

自分があの森で過ごしたのはほんのわずかな時間のはずだ。

決して三年なんて長い時ではなかった。けれど　目の前に立つ弟の姿を見る限り、それは真実だとしか言いようがない。

「自分が座るはずだった王座を奪った俺を、あの世から殺しにでも来たんですか」

恐慌状態に陥っているジョキルが騒ぎ喚く。

最初のセリフを聞いた時から、それとなく予想はしていた。

「陛下！？ なにが ……で、殿下！？」

駆けつけてきたレドが俺の姿を見て驚く。陛下が指す人物はすなわちジョキルで、そして殿下というのは俺なんだろう。立場がまるで逆転しているじゃないかと苦笑した。

「なぜ、生きて……」

震えながら呟かれた言葉に、どんどん冷静になっていく自分に気づいた。

本来ならば激怒するはずの場面なのかもしれない。それなのに笑みを浮かべながら現状をただ見つめていることのできる自分に少し驚かされた。

「なるほど、俺は全てに裏切られたのか」

ガズラルによって友が寝返っただけだと　そう思っていたかった。

しかし実際は、ジョキルを中心に行われた下剋上だったのだろう。王座に座る、ただそれだけの為に兄を裏切り、そして命を奪おうとしたのか。

「……覚悟しておけというのは、そういうことか」

すぐ後ろにいる東雲に呟く。

彼は何も言わないまま、ただレドを牽制するように立っていた。

彼の存在自体が牽制には十分すぎるくらいだと思う。それに実際レドが俺に剣を向けたら　彼は動かないだろう。

「殺し損ねたな、レド」

苦笑しながら呟くと、俺の存在を現実のものだと認識したレドが剣を抜いた。東雲の牽制も、もう彼の目には映っていないのだろう。狂気に取りつかれた亡霊のようにただ叫ぶ。

「貴方は、生きて、いては　生きてはいけないんです、貴方は！」

ああ、そうかもしれないな。

あの時死んでいた方が、幸せだったのかもしれない。

ただ迫りくる剣を静かに見つめて微笑む。

何も知らないままに死んでしまった方が、きっと俺は幸せだっただろう。

思ったとおり東雲はぴくりとも動かない。人間への必要以上の干渉を望んでいないようだから、俺を助けることはないだろうと思っていた。

静かに目を閉じる。

「  
駄目よ」

ふわりと甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

優しい声が耳元をかすめ、柔らかい何かが身体を包みこんだ。

「これは、私のものなんだから」

くす、と笑う声に目を開ける。

そんなことを言うのはただ一人しかない。そう、ただ一人しか。

不思議と安堵した。その甘い香りは包み込むような優しさだけを感じさせて。それがまるで聖母のような慈しみをもってこの俺を守るかのようで。

「真朱」

名を呼ぶと、後ろから抱きついていてる彼女は嬉しそうに微笑む。

顔の位置が見上げるくらいに高いところにあるのは。彼女が浮いているからだろうか。人間業じゃないな、と思いつつ人間ではないことを思い出す。

「もう、用はないでしょう」

子供に言い聞かせるような甘く優しい声で真朱が囁く。

小さな手が頭を優しく撫でて、不覚にも泣きそうになった。たぶん、泣きたかったのだろう。裏切られたと知ったその時から。

「帰りましょう、常磐」

真朱の声に力が抜けた。

包み込む柔らかい力はそのまま俺の身体を支えてしまう。

カクタスと常磐の狭間で揺れていた自身が、すんと地に足をつけたような感覚だった。過去の自分はどこかへと消え失せ　今ここに  
あるのは『常磐』でしかなかった。

驚くジョキルやレドの顔が次第にぼやけていき　最後には白い世界へと染まっていく。それと同時に意識は確実に闇へと堕ちていった。

## 20：遠き記憶（6）

ぼんやりと視界の中で、最初に飛び込んだのは白い光だ。

「……起きたの？」

どこかいつもよりも優しい声が脳まで響いた。

視線を泳がせればそこには真朱がこちらを窺うように立っていた。柔らかな微笑みをたたえながらただ静かに見つめてくる。

「まだ寝てなきや駄目よ。疲れたでしょう？」

小さな手が髪を撫でてくる。そのぬくもりが痛んだ心にはひどく染み込んで、優しさに餓えた身体が貪欲に温かさを求めた。

「夢、ではないんだろうな」

すべて。

弟の顔も、かつての友人の顔も、鮮明に思い出せるのだから。かつての自分の名前も未だに忘れずに残っている。

「いいえ、夢よ。悪い夢を見ていただけ」

言い聞かせるように囁かれた声を信じたくなくて、目を閉じた。

「……あなたは常磐なんだから。それ以外の何者でもないんだから。常磐ではない者のことなんて、すべて忘れてしまえばいいの」

優しい掌は何度も髪を撫でる。幼子をあやすようなその仕草が彼女には不釣り合いで少し笑えた。

静かな　しかしどこか心地よい沈黙が流れた。

長い間眠っていたのだろうか。睡魔は訪れないまま、彼女を見るのがどこか躊躇われて目を閉じたままの俺の耳に小さな声が届く。

「昔、ね」

躊躇するように呟かれた声は、ひどく脆い。

「とても偉い神様と、一人の女が出会ったの。神様はそれこそ他の神様を束ねるような人で、女はただの女だった。二人はすぐに恋に落ちた」

突然何の話が始めるのだろうと目を開けると、真朱はどこか遠く

を見て続けた。

「神様と人の恋なんて、当然禁忌だった。けれど二人はそんなことすべて無視した。……やがて二人には娘が生まれた。その子供は人間と呼ぶには不思議な力を宿し、そして成長が驚くほど早かった。それでも神と呼ぶには脆弱過ぎた」

そこまで黙って聞いて、それが真朱自身の話なのだろうと思い至った。

人と呼ぶには異質で、神と呼ぶほどの力はない。彼女はこの世界でただ一人で、他の何者でもない。

そしてその彼女に「創られた」俺も、もはや人ではない。神なんて大それたものでもない。

「その子供が生まれて五年 見た目はもう少女ほどだった。ある日突然天からたくさん神が降りてきた。抵抗する父を無理やりに拘束して、連れ去った。少女を見た神の一人は眉を顰めて剣を振るった。その剣は少女を傷つけることなく 少女をかばった母を刺した」

彼女の赤い瞳は遠い 遙か昔となったその時のことを思い出しているのだろうか。少なくとも彼女は母には愛されていたのだろう。身を挺して守ろうと思うくらいに。深く。

「そのまま神の一軍は去って行った。そして少女は一人ぼっちになった」

気が狂いそうになるほど長い間、一人ぼっちだった。

守ってくれるものはもうなかった。

幼い頃は寂しくて寂しくてたまらなかった。

ただぬくもりが欲しかった。

ぽつりぽつりと語られる言葉はどれも胸を打つもののはずなのに、真朱はなんの感情もなく呟いていた。



俺が静かに見つめていることにも気づかずにただ吐き出される言葉は、過去の自分をただ眺めているだけの少し冷たいもので。

思わず起きあがって彼女の髪に手を伸ばすと、びく、と肩が跳ねた。

「起きてたの」

眠っていると思ったからこそ吐き出された言葉だったのだということに気づかされて苦笑する。

「あんたが気づいていないだけで、ずっと起きてた」

不満げに真朱が目をそらした。

別に俺に自分の過去を語るつもりなんてなかったんだろうに。それでも。

「……………辛かったんだろう」

白い髪に触れながら呟くと、真朱はただ黙ってこちらを見た。

「同情はいらない」

射抜くような強い瞳がこちらを見る。赤い光がまるで燃え盛る炎のようにも見えて不思議だった。

白く細い手が伸びてきて、首に回る。そのまま甘えるようにしがみつかれた。

「今は、一人じゃないもの」

あなただがいる。

そう耳元で囁かれた。

何年も何年も一人で生きて　　ようやく見つけた「拾い物」だったんだろう。人々に疎まれ、神からは汚物を見るように蔑まされ、ただ一人で生きてきた彼女にとって倒れていた俺はまさに格好の愛玩動物だったのだ。

普通の動物では、瞬きするほどのわずかな時しか生きられない。人間でもそれは大して変わらないことだが　　彼女はその人間の理を崩した。

何度も何度も「私のもの」と主張するのは、冗談なんかではない。彼女は俺を自分の慰めにしたかっただけなんだ。身体も心も傷だらけになった俺を　慰め合うものとして傍に置きたかっただけなんだ。

愛し方をとうの昔に忘れてしまった彼女の、不器用な愛の求め方。それに気づいてしまったら、その細い腕を振り払うことはできなかった。

ぬくもりに餓えているのは、お互い様なのだから。

それから、幾度の季節が通り過ぎたのだろう。

両手で数えきれない季節を迎えた頃には、面倒で共にいる時を数えることをやめた。

彼女の奔放ぶりというのは相変わらずで　歪んでいるとしか言いようのない愛情表現もまるで変わらないままだったけれど。

それでも甘えることだけは上手くなった彼女に少なからずの安らぎを与えられて、同じように安らぎを与えて、それが当たり前になっ  
っていたことは言うまでもなかった。

東雲は彼女の目を盗んで様子を見に来てくれていたし、彼女の性格に慣れてからはこれといった問題もない。

恋人のように振る舞う時もあれば、家族のように接する時もあった。

唇を重ねることをもあつたし、ただ寄り添うように眠る時もあつた。

真朱という人は自由で、奔放で、我儘で　そしてどこまでも孤

独で、優しさや愛情に飢えている。

それでも長い時を共に過ごすことで、彼女自身も変わっていたの  
だろう。

優しさや愛情の、わずかな欠片でも、この俺から学んだのだろう。

そう。

確かに俺は真朱を愛していた。

不器用にしか振る舞えない、人を愛することが苦手な彼女を、心の底からいとおしいと思っていた。たとえ彼女が自分の身体を「人ならざるもの」に変えた張本人なのだとしても。

それでも、それすら彼女と共に生きるためだったのだと許せるくらいに 愛していた。

たとえ彼女が俺に与える愛情が、動物に与えるようなものだったとしても。

すべてを終わらせるあの時までには。

## 21：遠き記憶（7）

彼女と共に過ごした時は、どれほどだっただろう。

少なくとも人の一生より余りある時間だったことは分かっていた。それでも彼女は出会った頃とさして変わりなく、そして自分も老いないまま姿は少しも変わらなかった。

流れてゆく時間はとても長く、そしてとても短くも感じた。

彼女と共に生きる時間はとても満ち足りていた。

幸福だったとも言える時間だった。二人共にいるのがいつからか自然なことで、別たれることの方が不自然だった。

彼女に作られた存在だから。

だから、彼女が死ぬ時に自分の命も尽きると思っていた。

その日は、朝から嫌な胸騒ぎがした。

胸のあたりを始終風が吹きすさぶように落ち着きがない。それが何故なのかも分からないからだだ気のせいだと思っしかなかった。

空はひどく澄んでいて、それがどこか不吉なもののように思えて風がざわざわとざわめいているのがまるで自分の中の胸騒ぎと同調しているようにも感じた。

「……………ああ、そろそろかな」

突然隣の彼女がぼつりと呟く。

何が、と問おうとした瞬間に、その華奢な身体がぐらりと揺らいで倒れる。地面にぶつかる寸前に受け止めると、真朱は嬉しそうに笑った。

「真朱!？」

抱きとめた彼女の身体は氷かと思うほどに冷たく、そして顔は真っ青だった。

青白い手が伸びて、頬に触れた。ひんやりとした指先に、思いもよらなかった別れを予感させられる。

しかしそれ以上にまさか、と思う気持ちの方が強かった。

「……真朱？」

窺うように名前を呼ぶと、彼女は真っ青な顔のまま微笑む。

冷たい指先はいとおしそうに頬を撫でる。

「さよならね、常磐」

それはいつそ清々しくうちに潔い一言だった。

老いることのない身体でも、死が訪れないわけではないということとはどこかで悟っていた。神とて永遠ではない。人から見れば永遠に等しい長い時を生きるから永遠に見えるだけだ。半分だけ神の血をひく真朱は、普通の神ほど長くは生きないのだろうということも予想できていた。

一世紀以上の時を共に過ごして、もしかしたらという嫌な予感もあった。

けれど、それはこんなにも突然に。

唐突に、やってくるのか。

「真朱」

苦しくてそれ以上言葉を紡げなかった。

俺を見上げて真朱は苦笑する。泣き出しそうな子供を慰めるみたいな目でこちらを見る。

「……あなたは、人ではないし、神でもない。命あるものだと言えるのかも分からない。私の力によってこの世に縛りつけているわけでもないわ」

少しだけ苦しげに息を吐きながら真朱が告げる。  
俺にとつてはとても残酷な事実を。

「あなたは死ねない。私が死んでも、永久に生き続けるでしょう」

その言葉は鋭利な刃となつて俺の胸を貫いた。

「……そんな、わけ」

ない、と口にしようとした唇に冷えた指先が触れる。それ以上は言つても無駄だともいいたげに。

「あなたの存在は、私にとつては神々に対する報復。神を超える存在を、紛い物の神である私が作る。皮肉でしょう？」

そしてあなたはこうして存在して、神にも叶わない永遠を生きるんだから。

そう言う真朱は本当に嬉しそつだった。

つまり。

「……俺は、おまえの復讐のためだけに存在していると？」

静かな問いは、微笑みによつて肯定された。

孤独な彼女を救うための存在なのだと。お互いの傷を癒し合うための存在なのだと。飢えた愛を捧げ続けていくことでお互いが幸福になれるのだと。

そつ信じていたのに。

「死にたくても死ねない。そついう風に私は常磐を創つたから。神ですら到達し得ない長い時を生きることになるでしょうね。これからずつと」

例えるなら何千年もそこに在つた岩や木のように。

自然そのものと同じようなもので、命であるよつで命でないものになり果てた。

重そつな身体を持ち上げて、彼女は微笑を浮かべたままで優しく口づける。冷たい唇に自分の体温を奪われて、ひんやりとした感覚が唇に残つた。

「生きてね、常磐。私のために」

それは願いでも何でもなくて、ただの呪詛。

こうして真朱は俺を生にしがみつかせた。

ふわりと、花のように優しく微笑んで。

冷たい指先は頬を離れ、地面に落ちた。赤い瞳は閉ざされて、身体は氷以上に冷えていった。

「真朱

！！」

それはどんな叫びだったのだろう。

愛した者を失った悲しみなのか。裏切られた怒りだったのか。腕の中の彼女はもはや人形のように動かなくなつて、静かな終焉を迎えていた。

首を掻き切ろうととしても。

心臓を貫こうとしても。

手首を切ろうとしても。

この命ともいえない時間を断ち切ろうとすると、決まって真朱の言葉を思い出して躊躇ってしまう。

愛情と憎悪は確かにそこに両立していて、同時に俺を責め立てた。いつからか死ぬということに希望を見出せなくなつて、ただ世界を渡り歩くだけになった。

狂おしいほどの時間が経って。

麻痺してしまうほどの長い時の中でただ独り、彼女に憎しみにも似た感情を抱きながらただ流れにまかせて存在していた。

生きている、なんて言葉では表せない時の流れの中で。

再び彼女の欠片と巡り合う。

それは運命なのか、因果なのか　真朱の呪いなのか分からない。月光が照らし出す中で、その少女は真朱とはまるで正反対の色を持っていて。

真朱とはまるで違う純粹さの中に、彼女に似た諦めにも似た感情を忍ばせていて。錯覚だと分かっているのにいとおしさで胸がいっぱいになった。

その時の感情をどう表現すればいいのだろう。

『助けて　常磐！』

それはもう魔法のようなたった一言。

救いを求めるように、俺の名前を呼ぶ、その声が。

救いようのない何かに俺をまた縛りつけた。



## 22:さよなら

パチ、と火が爆ぜた。

「……真朱はその後、魂だけの存在となったところを神々に封じられた」

それで終わりだ、と言いたげに東雲が黙り込む。

青藍は溢れそうな過去の重さにただパチパチと音を立てる火を見つめた。真朱と常磐について聞いても、自分の中から記憶らしい記憶は湧いてこない。

ただ、どこか懐かしいと感じるだけ。

「本来なら、おまえの存在はありえなかった。転生する魂が、今もなお封じられているはずなんだから。だがおまえは存在し、そしてまた真朱も封じられている」

東雲の呟きには青藍の耳に確かに届いた。

「私は……」

何なんですか、という問いを青藍は飲み込んだ。たぶん、東雲に聞いても答えはないということを心のどこかで悟っていた。

東雲は心配そうにこちらを見ていた。

ただ青藍の中でただ一つ確証を得たことがあって、それが予想通り青藍を打ちのめしていた。

頭の中がぐるぐるする。

「……少し、向こうの川に行ってきます。顔、洗いたくて」

精一杯笑顔を作って東雲に言うと、東雲は少し躊躇った後に「気をつけるよ」と送り出してくれた。

一度頷いて、立ち上がる。

川と言っても少し歩いただけの距離だ。心配するほど離れるわけでもない。東雲も青藍の心情を気遣ってくれているのだろう。

ふらふらとした足取りですぐ近くの川まで向かい、川べりに腰を下ろす。

ぼんやりとした思考のまま川の水で顔を洗う。

冷たい水は、頭をはつきりさせてくれるかと思っただがそうでもなかった。

ぐるぐると嫌な考えばかりが頭を巡って、そして青藍の中にはもう最終的な決定が下されていた。

それを嫌だと拒むのは、たぶん自分の中の『真朱』の意思なのだろうか。

ぼんやりと空を見上げると、星達が懸命に輝いて地上を照らしている。

「……ときわ」

会いたい。会いたくない。二つの感情のどちらが青藍のものなんだろう。

泣くことも出来ずに佇んでいると、すぐ近くでさく、と草を踏む音がした。背後ではないから、東雲ではない。そしてこんな山の中にいる人なんて 心当たりは一人しかいなかった。

会ったのが怖い。

それなのに、会いたくて仕方ないなんて。

「……常磐？」

暗闇に呼びかけると、金色の髪の青年が少し気まずそうに姿を現した。

「……せ」

「あのね」

青藍、と自分の名前を呼ばれる前に言葉を遮った。彼の口から、自分の名前を呟かれるのを聞きたくなかった。そんな、大事なとき

に出なかった罪滅ぼしに名前を言うみたいな真似。

「東雲様から、聞いた。真朱と常磐のこと」

真つ直ぐに常磐と見て言うと、彼は居心地悪そうに「そうか」と呟く。

その続きを言うべきか否か迷って、青藍は一度黙る。そうするとその場に嫌な沈黙が下りた。

常磐はこちらを見ようとせず、ただ俯いている。

随分と大人だと思っていたのに、こうして青藍の前に立つ常磐は叱られるのに怯えている子供みたいだ。

「常磐は、真朱を愛してたんだね」

自嘲気味に問うと、常磐はやつとこちらを見た。

「それも、今となつてはもう分からない」

愛していたのか、憎んでいるのか。

ああ、この人は本当に馬鹿なんだな、と青藍は苦笑した。こんな子供の自分にも分かったことなのに、何十年、何百年と生きている彼は未だに分からないなんて。

「愛してたんだよ。ううん、今も愛してるのかも」

青藍がきつぱりと言い切ると常磐は訝しげに眉を顰める。

「そんなわけはない。少なくとも今はあいつに対してそんな感情を抱く余裕はないんだ」

「どうして？」

鋭く問うと、常磐は困ったように瞳を揺らした。綺麗な緑色の瞳がゆらゆらと揺らいでいる。

「愛してないなら、私なんて無視できたんだよ。人売りに捕まった時にだって、その後に私を置き去りにすることだってできたんだよ。それができなかったってことは、常磐がまだ真朱のこと愛している何よりの証拠だよ」

「違う！」

怯えるような叫び声に、青藍は怯えることはなかった。

「違う！俺はもう、あいつのことなんて考えてない！おまえを

助けたのだってそんな理由じゃ  
「ふつりと青藍の中に怒りが湧いた。悲しみと怒りがごちゃまぜになる。」

だって。

だって常磐は。

ぎゅ、と拳を握り締めて唇を噛んだ。

「分からないの？」

静かな問いに、常磐の瞳がまた揺れる。

「どうしてそんなに真朱が憎いのか。どうしてそんなに苦しいのか。簡単じゃない」

どうしてまだ分からないの。そう続けると、常磐は迷子の子供のような顔をする。

こんなこと私に言わせないでよ。

私の口から私を傷つける止めを言わせないでよ。

「一緒に逝きたかったって思うくらい 真朱のこと愛していたんじゃない!!」

言いたくなかった答えを張り裂けるくらいの声で叫んだ。

「遺されたのが辛いつて思うくらい真朱が好きだったんじゃない！死ぬ時は一緒に逝きたいって願うくらいに愛していたんじゃない！長い時の中でまた見つけた真朱の欠片の私なんか気に気をとられるくらいに、私に真朱を重ねるくらいに 真朱のことを必要としているんじゃない!!」

知らず知らずに涙が流れた。

頬を伝う涙が熱い。叫んだ喉が痛い。それでも何より胸が苦しい。

「せい……」

「呼ばないで」

きつぱりと常磐の声を遮って、涙で濡れた瞳でしっかりと彼を見た。

「私の名前を言いながら、他の人を重ねるくらいなら、呼ばないで」  
そんなの、私が辛いだけだ。

「……私は常磐が好きだけど、それは私の気持ちだって言えるけど、でももう傍にいないのは無理だよ」

告げた瞬間、常磐の瞳が大きく揺れた。

だって、そうでしょう？

涙はまだ溢れて流れる。これが自分にとっても辛い選択であることは分かっている。けれど最善はこれしかなかった。

「私は、常磐を駄目にする」

だから、さよなら。

常磐が真朱を求めることは仕方ないことで、そして私がこうして存在してしまっているのも、もう消し去れることではない。

常磐はたぶん、私と一緒にいればいるほど狂っていく。

もういない真朱の影に惑わされて、そして私への愛を錯覚して。

常磐が私を駄目にするんじゃない。私が常磐を壊していく。

唇を噛みしめて、さよならは口に出せないまま踵を返す。強く握りしめた拳が少し痛いくらいだったけれど、その方が愚かな行動をしないように戒められる。

溢れる涙は止まらないままだけど。

「っ　　青藍！！」

背後で叫ばれた自分の名前が痛い。

それでも私は振り返ることをせずに、彼から離れた。



## 23：遠い空の下で（1）

苦しい。

苦しい。

苦しくて苦しくて苦しくて気が狂いそうなほどに。

頬をつたった涙がまるで他人事のように地に落ちた。

自分の中の何かが無理やり引き剥がされたかのように胸が痛い。

名前を呼ぼうとした。

しかしそれは声にならず、守っていたはずの小さな背中はどう  
ん遠ざかっていく。

苦しい。

傍にいても離れていてもこの身が苛まれるというのなら、せめて

長い黒髪が風に舞った。

少年のような姿の少女は、微笑みながら薬草の手入れをしている。

「青藍」

名を呼ぶと、青藍はぱつと顔を上げた。

「東雲様。お帰りだったんですか？」

土で汚れた手を払いながら青藍は小走りに駆け寄ってくる。

「ああ、お土産もある。お茶にしようか」

「はい！ 今淹れますね！」

嬉しそうに笑って青藍はぱたぱたと駆けていく。肩に届くかどうかといった短い髪は、二年という歳月のおかげで背を覆うほどまで伸びた。美しい衣装を着ればそれは可愛らしいだろうに、青藍は少年の格好を好む。曰く、この方が動きやすいとか。

青藍が常磐のもとを離れて、二年。

『東雲様のもとに置いてください』

赤い目をしてそう青藍が言いだして、もう二年になる。

一人で生きることとはできない。ただでさえ神々に目をつけられている。しかし、もう常磐と一緒にいることはできない。

幼くも潔い青藍の決意を、東雲はただ静かに受け止めた。

もとより、東雲はそのつもりだった。

常磐が『青藍』と『真朱』を区別できない以上、共にあるべきではないと。常磐が青藍を真朱と呼んだあの瞬間から、東雲は二人を引き離そうと決めていた。

そして生まれた時からずっと見守り続けてきた青藍は、東雲にとつては娘も同然だった。その彼女が望むのだから、何も躊躇うことなどない。

ここは、人の住む地から離れた山の上にある東雲の屋敷だ。人神である東雲が、人の世を見守る為に建てたもの。

普通の人間がここを訪れることはまずない。人の往来が絶えて久しい場所であるし、青藍がここに住まうようになってからは屋敷の周囲に特殊な結界を張った。天上の神々には東雲が青藍の監視をするという形で、保護することを許されている。

青藍は屋敷の庭の一角で薬草を育て、それを薬にして時折人里へ



売りに行く。その時はいつも東雲が付き添うようにしている。

薬草の手入れをしている以外の時間は、屋敷にある蔵書で勉強しているようだ。貧しい家に生まれ、親を亡くしてしまっただけからあまり学校へも行けなかったようだから、学ぶ欲求は人一倍あるのだろう。

「東雲様、どうぞ」

につこりと笑いながら青藍は東雲の前にお茶を差し出す。

微笑み返すと、青藍は向かいの席に腰を下ろしてお茶に口をつけた。土産の菓子をつまむ姿は幸せそうだった。

「留守にしていた、何かあったか？」

東雲は曲がりなりにも神の一人だ。

いつも暇というわけではなく、人神として人々の様子を見に行くこともあるし、神々と顔を合わせる為に屋敷を空けることもある。

そういう時は青藍は大抵留守番だ。

「いいえ、特には。いつも通り誰もやってきていませんし。……あ

あ、庭の山茶花が咲きましたよ」

ほら、と青藍が指差す先に、赤い花が美しい姿でこちらの目を楽しませてくれる。

「ああ、本当だ。まあ……何もないのならいい。一人で退屈ではないのか」

「一人で過ごすことには慣れているので、大丈夫ですよ」

申し訳なさそうに問いかけると、青藍は何の憂いもなく微笑んで返す。

思えば小さな頃から一人でいることが多い子供だった。唯一側にいるのは母親だけ。年の近い子供と親しげにしている姿を見た覚えが東雲はなかった。

だからこそ、そんな子供が執着した常磐の側にいさせてやりたいと思ったのも、事実だ。

しかしその執着は青藍のものなのか、真朱のものなのか東雲に

も分からない。そもそも青藍という存在自体が謎なのだ。

真朱の記憶を持ち、真朱と同じ気配のある魂。けれど真朱の魂は未だ天上の神々によって囚われている以上、生まれ変わりという簡単な言葉では片づけられない。

「……………」

一度確かめる必要があるのだろうか、と難しい表情で茶を飲むと、青藍が首を傾げてこちらを見る。

「お口に合いませんでした？」

どうやら茶がまずかったから渋い顔をしたのだと思われたらしい。東雲は優しく微笑んで「いや」と答えた。

「考えごとをしていただけだ。すまない」

「考えごと、ですか？」

「ああ、まあ、いろいろとな」

おまえについて考えていた、なんて言うわけにもいかずに笑って誤魔化した。この二年の生活で 青藍は『常磐』とも『真朱』とも口にしなくなった。来たばかりの頃は寂しさで独り泣いていたこともあったようだが。

自力で振り切ったというのなら、下手に名前を口にしない方がいいだろう。

「そろそろまた薬を売りに行くのだろうか？ ついでに欲しいものがあれば買ってやるぞ？」

人里に下りるのは一、二か月に一回程度だ。その時にいろいろ買い込むのだが、青藍は薬を売った金で生活必需品しか買わない。食料などの金は無理やり東雲が払うようにしているが、それ以外で青藍が必要としているものは自分で稼いで自分で払うと頑なに主張されてしまったのだ。

けれど親心としては、ときどきはこうして青藍を甘やかしたい。

「いえ、そんな……………」

悪いですから、と青藍がまた遠慮するので、東雲は笑って続ける。  
「たまにはいいだろう。何かないか？」

「……ええと、その、新しい本が欲しいです。ここの本はほとんど読んでしまったので」

おずおずと欲しいものを口にした青藍に微笑みかけ、「では下りたときな」と約束を取り付けておく。

女の子らしいものを欲しいと言わないあたりが青藍らしいとしか言いようがない。せめて髪飾りの一つでも贈ろうかと何度思ったことが。

「東雲様、お代わりは？」

「ああ、もらおう」

静かに流れる時間の中で、青藍の心が穏やかであればいいと思う。何にも心乱されることなく、何にも惑わされることなく、ただこの少女が幸せであってくれればいい。

ただそれだけを、祈っていた。

## 23：遠い空の下で（1）（後書き）

大変お待たせしました。

常磐との決別を決意した青藍のその後の物語が始まります。

青藍はどう生きていくのか、青藍と別れた常磐は。

求めあった故に離れた二人はこの先も相容れないのか。

これからの行く末を見守ってくださいませ。

## 24：遠い空の下で（2）

どれほどの時が過ぎただろう。

どれだけの涙が流れただろう。

感覚はほとんどなくなっている。

ただ記憶だけが鮮明で、小さくなっていくあの背中だけが脳裏から離れない。

乾いた唇からは言葉は生まれぬ。

木々の合間から見える空に手を伸ばして、その青さに触れようとする。

「……………」

その色は、まるで彼女の。

賑わう町中は久しぶりに訪れると人の波に飲まれそうになる。

「わ、わわわ！」

大人の男の人とぶつかってよろけると、東雲様の腕が私の背を受け止める。

「大丈夫か」

「あ、ありがとうございます、東雲様」

ほっと息を吐いてお礼を言うと、東雲様は優しく微笑んでくれる。そして手を差し出してきたので、少し戸惑いつつもその大きな手

を握りしめる。遅いその手は、私が知っている手とはまるで違う。  
「薬はもう店に売って来たんだろ。なら約束とおり本を見に行くか」

「はい！」

離れないようにとしつかりと繋がれた大きなてのひらに絶対的な安心感を得る。以前　こんな町中で彼とはぐれて一人になったことがあったな、と淡く微笑む。

会わなくなつて、どのくらいだろう。

触れなくなつて、どのくらいあろう。

ふとこうして彼を思い出すたびに胸がひどく切なくなる。  
胸を締め付けられるような感覚に呼吸すらままならない。

……会いたい。

それは、口に出してはならない願いだった。

「青藍、どうした？」

東雲様に声をかけられて、はつとする。

気がつけば既に本屋まで来ていたらしい。古い紙の匂いが香っている。

「あ、な、なんでもないですー!!」

慌てて笑顔を作ると東雲様が苦笑する。ぽんぽん、と頭を撫でられて心の中まで見透かされたような感覚になった。

まるで大丈夫か、と問われているようで。

「……大丈夫ですよ？」

苦笑しながら東雲様を見上げると、少しだけ驚いたような顔をする。

くす、と笑つてもう一度「大丈夫です」と呟く。

まるで自分に言い聞かせるための魔法の呪文のように。そうすることによって本当に大丈夫なんだと思い込むために。

それから二冊の本を選んで、屋敷へと戻るはず　　だっただけ  
れど。

街に来るたびに東雲様は私に服を買おうとするものだから、今回  
だけは少し私の方が折れることにする。

東雲様は私がいつも男の子の格好をしているのが不満らしい。薬  
草の手入れをするのも屋敷の掃除をするのも、この方が動きやすい  
のに。

これがいい、と東雲様や店員の人が勧める服をされるがままに試  
着する。

「……これでいいですか？」

無理やりに渡された水色の服を試着して東雲様に見せると、満足  
そうに頷かれた。

「そういう服を着ると年相応の女の子だな」

可愛い、と褒めながら東雲様は私の頭を撫でる。

「あと……そうだな、さつき着てた赤い服も似合っていたな」

この際だから何着か買っておくか、と言いだす東雲様に頭を抱え  
たくなる。

さつき試着した赤い服を店員が持ってくる。その鮮やかな赤に、  
嫌な記憶が蘇ってきて　　。

一人の、女の名前を思い出す。

「東雲様」

くいつ、と東雲様の服の裾を引っ張る。

「どうした？」

「赤い服は嫌です」

きっぱりと言い切った私に東雲様も店員も驚いた顔を見せる。

「……なんだか、落ち着かないので」

それらしい理由が思いつかなくて、それだけぼつりと呟く。  
それだけなのに、東雲様には伝わってしまったのだろうか。

「そつえば、ああいう色はあまり着なかったな」

苦笑して東雲様は他の服を選んだ。菫色の服と、深い青の服。どちらも華美な飾りはないけれど、私には充分に可愛らしい服だ。  
「せっかくだ、そのまま着て帰ろう」

着替えさせたらしばらく袖を通さないと思われているのだろう、水色の服を着たままで私は屋敷へと帰ることになってしまった。

「あれ？」

屋敷の前　門の前に人影を見つけた。

この山は普通の人がやってくるのがほとんどない。少なくとも私は、屋敷に私と東雲様以外がいるところを見たことがない。

「東雲様、誰か……」

いますよ、と袖を引いて言うと、東雲様は気づいていたようであるで驚かない。

「やはり戻ってきていたか」

ふう、とため息を吐き出して東雲様は門の前にいる人へと歩み寄る。慌てて東雲様を追いかけると、その人はどうやら　少年のようだ。たぶん、見た目の年齢は私とあまり変わらない。

「山吹」

東雲様が声をかけると、少年はぱつと顔をあげる。

「あー！　帰って来た！　どこに行ってたんですか、主様！　久しぶりに戻ったら変な結界張られてるし中には主様の気配はないし知らないうちに拠点移したんじゃないかと不安だったんですよ！」

「騒ぐな。六年ぶりに戻って来た役に立たん式がいつぱしの口をきくな」

山吹と呼ばれた少年は東雲様に抱きつくこうとして　そして全力で拒まれていた。

「え、そんなになります？　俺としては三年くらいな感覚だったんですけど」



「まったく、おまえは……」

報告は後にしろ、と東雲様は呆れたように呟いて、そして振り返って私をみる。

青藍、と私の名前を口にしようとして 少年に遮られる。

「あー！？ なんですか、なんなんですか、東雲様ってそういう趣味ですか！？ 俺がいない間に随分と趣向が変わっ……」

東雲様の後ろから顔を出した少年は私の姿を見るなり急に騒ぎ出したけれど 後半は東雲様の拳骨が落ちてきてあまりの痛みに黙り込んだ。

「黙れ。青藍、これはいないものと思っ構わないからな」

「え、えーと……」

いないものとするにはあまりにも存在感がある気がする。

「せいらん？ せいらん？ …… あ、もしかしてあの青藍！？」

がばつと顔を上げて少年はまじまじと私の顔を見る。間近に迫る可愛らしい顔に、私は思わず一歩下がる。

「うん、面影が残ってる。まさかこうして会えるとは思ってなかったなー」

「あ、あのー……」

東雲様、と助けを求めると東雲様が盛大なため息を吐き出して少年の首を摘みあげる。

「……仕方ない。青藍、これは山吹。私の式だ」

「よろしく！」

猫のように摘み上げられているのに山吹はまるで気にした様子なく手を振って笑う。

「……よろしくお願いします。その、式って……」

なんですか、と問うと東雲様は微笑んで答えた。

「神の造る使い魔だ。人のように見えるがこれは人ではない。山吹はもともと屋敷に植えてある山吹の花から造ったんだ」

「あの山吹ですか……」

そつえば毎年綺麗な花を咲かせている山吹があった。

神様が造る、偽物の命。

「それじゃあ……」

ふと浮かんだ問いを口にしようとして、途中でやめる。

「とにかく、屋敷へ入ろう。青藍。お茶を淹れてくれるか？ 買ってきたお菓子を食べよう」

「あ、はい」

俺のも！ と主張する山吹の頭を東雲様が叩いていたけど……これは何人分用意すればいいんだろう、と少し悩みながら屋敷に入ってお茶の用意を始める。

神様が、人に似せたものを造り命を与えろというのなら。  
常磐は、真朱の『式』ということになるんだろうか？

浮かんだ疑問は口にするにはあまりに重く、そして言葉にしたら今でも胸を刺す痛みを孕みそうだった。

## 25：遠い空の下で（3）

生きているのか、死んでいるのかも分からなくなっていく中で、ただ一つ確に残るものが一つ。

重い瞼を閉じると、その姿はすぐに思い出せた。

おかしな話だ。

数年前まで、そうやって思い起こしていた人と、今思い出す人は違うのだから。

いつの間にもここまで大きくなっていたんだろう、彼女の存在は。いつの間にここまで捕らわれていたんだろうか。

今更気づいても、遅いと言っのに。

「おーい」

ぼんやりとお茶の準備をしていると、間の抜けた声が耳に届いた。

「え？」

はっと意識を戻すと、目の前に濃い金髪の少年　山吹が立っていた。

「どうした？　具合でも悪い？」

心配そうに覗き込んでくる瞳に吸い込まれそうな錯覚を覚える。

首を傾げてこちらを見つめてくるので、私は慌てて首を横に振った。

「へ、平気。ぼうつとしてただけ」

「そうか？　ならいいんだけどさ！　主様が待つてる、行こう」

そう言いながら山吹はお盆を私から奪い取るように持ってくれた。揺れた拍子に茶器が

かちゃ、と音をたてる。

「主様って、東雲様のことだよな？」

「うん？ 主様は主様だから。俺の命の形を変えて、こうして動けるようにしてくれた」

「命の形を変える？ 命を与えるじゃなくて？」

首を傾げると、山吹は頬を膨らみながら振り返る。

「おかしなことを言うんだな。花にも命はある。神様はその命に力を与えてこうして動けるようにしてくれるだけだ。命のないものに命を与えることができるのは、天上の神様だって難しいよ」

「あ、」

そうだ。東雲様だって造ったとは言ったけど、命を造ったなんて言っていないんだ。

「そうだよな、うん、そうだ……」

確かめるように何度も頷く。

そしてまた真朱や常磐のことを考えていることに気づいて、胸がぎゅっと痛くなった。考えれば苦しいのに、どうして忘れることはできないんだろう。

「……どうした？ やっぱり具合悪いのか？」

先程まで少し不機嫌そうだった山吹が、慌てた様子で私の顔を見る。

「違う、大丈夫だよ」

心配かけまいと微笑むと、山吹は黙って私の顔を見つめてきた。まっすぐな目に見つめられると、目がそらせなくて困る。

「あ、あの？」

どうしたの、と問おうとすると、するりと伸びてきた手が私の頬をつねる。

「ふへ？」

「変な顔するな」

むすっとした顔で言われ、私はますます困る。つねっている手はそのまま。さほど強くないから痛いわけではないけれど、どうすればいいのか分からない。

「女の子は元気に笑ってるのが一番なんだ。悲しそうな顔していると周りも辛い。おまえはここでたった一人の女の子なんだから、元気にしてなくちゃ」

早口にそう言うと、山吹は私の頬から手を離れた。

ぶいっとな顔を背けるとそのまま廊下をすたすたと歩いていつてしまふ。その後ろ姿はなんだか少し照れているようにも見えた。

……励まされたんだろうか、と思う。

つねられた頬にそっと触れながら、その場に立ちつくす。別に無理をしているつもりはない。言葉にすれば辛くなるだけだから、自分の中で飲み込んでいるだけだ。

「……ふっ」

良く分からないけれど、なぜかおかしくなった。

自然と笑みが零れると、鬱々としていた気分が晴れる。

「ねえ！ 待って！」

声をかけて走り出すと、山吹はぴたりと立ち止まってこちらを振り向く。まるで飼い主においてけぼりにされた子犬みたいな顔で、私はますますおかしくなった。置いていたかれたのは私なのに。

「行こう。東雲様が待ってる」

笑いかけながら言うと、山吹はじつと私を見たあとで満足そうに笑う。

東雲様が私に向ける笑顔とも違う。東雲様はいつでも見守るような暖かい微笑みをくれるだけだ。

一緒に笑いあえるような そんな明るい笑顔に心は自然と軽くなった。

東雲の目にも、青藍は明るい笑顔を見せるようになった。

影響は 考えるまでもないだろう。

「東雲様？」

青藍がお茶を用意しながら話しかけてきた。うん？ と微笑んで答えると、青藍は柔らかに微笑んだ。

「考えごとですか？ ぼうつとしてましたよ？」

「まあ、そんなところだ」

おまえのことを考えていたんだよ、と口にするとそれはまるで恋人に向ける言葉のようだと東雲は笑う。

「山吹を呼んできますね」

お茶の準備が整うと、青藍は式の少年を呼びに姿を消す。

山吹が東雲のもとに戻って来たのは、ほとんど偶然みたいなものだ。東雲が呼び寄せたわけではない。ただ青藍にとっては良いタイミングだったのかもしれない。

山吹も青藍を気にいったのだろうか。いつもなら報告を済ませるとすぐにまたどこかへと行くくせに、今回は随分と長く館に居座っている。

窓の向こうをぼんやりと見つめながら考える。

そろそろだろうか、と。

東雲は常に青藍を優先してきた。常磐と青藍、真朱と青藍、どう天秤にかけても東雲にとって重いのは青藍だ。幼い頃から見てきた存在だから 他のどんなものよりも気にかかるし、幸せになってほしいという欲目がある。

だからあの時、青藍が常磐との別れを決断した時、東雲は常磐を放置した。そもその原因は常磐にある。頭を冷やす必要があるだろうとも思った。

そしてしばらくしてから様子を見に行くと、常磐は青藍と別れたであろうその場所から一步も動いていなかった。

生気のない瞳が映すのは空だけだった。東雲の声すら届かないであろう状況に、さすがの東雲も少し焦ったが 常磐はどれだけその場所で過ごそうとも死ねなかった。否、今の彼は死を求めている

わけではないのだろう。ただ動けないだけなのだ。青藍という存在がないから。

そして逃避するように常磐は眠りに落ちては目覚めていた。一歩も動かず、ただ夢と現実を行き来しては青藍を想う。

常磐がそんな状態になっていると、青藍に伝えたらどうなるだろうか？

自分の存在が常磐にとって毒なのだと、そう思って別れを決断したのに　結局常磐は青藍なしには生きていく気力すらもてない駄目な男だったなんて。傍にいても傍にいらなくても、常磐は青藍によって壊れていく。そんな現実を知ってしまったら。

「はつきりさせた方が、いいんだろうな」

二人の為にも、と呟くと、向こうから青藍と山吹がやって来る。

ちょうどいい、しばらく留守にすると告げて、二人に留守番を頼もう。

もはや青藍は慣れたものだろうし、山吹がいれば少しは気が紛れるだろう。山吹が青藍を見ている間に　どこぞの駄目男を叩き起こしてこなければ。

## 26：君を望むことが罪じゃないなら（1）

東雲様がいない屋敷は、いつも以上に静かになっていた。けれど、今回ばかりは騒がしい。

「青藍、何してるんだ？」

薬草の手入れをしていると、山吹が私の隣にしゃがんで問いかけってくる。一見すると私よりも年下のようにだけど、子どもっぽい行動と違って何十年も生きているのだろう。

「……薬草の手入れしてたの。放っておくと、雑草がすぐ生えちやうから」

「そんなことしなくてもさ、主様に頼めば何でもしてくれるし、何でも買ってくれると思うけどな。青藍には甘いし」

そう言いながら山吹は目についた雑草を引っこ抜く。

「全部東雲様に甘えるのは、ちょっとね。こうしてここに住ませてもらってるだけでもありがたいのに」

と、言いながらも 東雲様は私から目を離すわけにはいかないのだろう。天上の神様にまで問題視されてしまっているんだから。

「それを気にする必要はないんだ。だって主様は人神なんだから。

人神は本来人間の為の神様だったんだから」

「でも、私ってその人間の分類に入るのかな」

冗談交じりに笑うと、山吹は困ったような顔をする。しまったと思っただのはその顔を見てからだ。

「……あのね」

気にしないでいいよ、と誤魔化そうとした。

私が一体何者なのか、なんて。そんな疑問を抱いていること自体、どう足掻いても答えを得ることができないことなのに。

「青藍」

しかし山吹は私の言葉を遮るように私の名前を呼ぶ。少し大きな



手が私の手を握りしめて、そつと包み込んだ。

「俺も主様も、青藍が生まれた時から知ってる。その頃は俺もあんまり出歩いていない時だったんだ。……星の、綺麗な夜だった。白い人の気配を感じて、俺と主様で様子を見に行つて　そこで君は生まれていた」

懐かしいな、と山吹は笑う。少年のような顔立ちの中に、急に大人っぽい空気を感じて頬が熱くなった。白い人、というのはたぶん真朱のことなんだろう。

「人から人でないものは生まれないよ。青藍がどんな運命を持つているとしても、青藍は人間なんだ」

ぎゅ、と確かに握り締めてくれる山吹のぬくもりが心に染みるようだった。

誰かに言つてほしい言葉だったのかもしれない　じんわりと目頭が熱くなつて、そのまま山吹の肩に額を押しつける。

「青藍？」

山吹が慌てたように離れようとするけれど　やがて背中をぽんぽん、と優しく叩かれる。一定のリズムで。

不安だった。

自分は何なんだろう、と。

私という存在を確かにしてくれる存在はもういなかった。以前のようは無条件に愛してくれる母さんはいない。常磐が注いでくれた愛情は『青藍』に与えられていたものではなかった。真朱という影がある限り　東雲様が与えてくれる優しさも疑つてしまう自分が嫌だった。

声も出さずに静かに泣いて、そして自分の中で整理がついたところで顔を上げた。山吹が目だけで「大丈夫？」と問いかけてくる。

子犬みたいな目に思わず笑みが零れて

「山吹って、何歳なの？」

きよとん、と山吹の瞳が揺れて　そして「あー……」と考え込む。

「五十、歳くらい？　かな？」

「……くらい、かな、なんだ」

「うん、たぶん。花だった頃も含めるともつと長いけど、式になつてからはそれくらいだと思う」

たぶん、とかだと思う、という言葉からして正確には覚えていないだろう。たぶん東雲様も自分の年齢なんて覚えていないだろう。人とは違う、長すぎる時を生きているから。

常磐も、数え切れない年月を超えて生きてきた。

「青藍？」

急に黙り込んだ私を見て山吹が首を傾げる。

「あ、なんでもないよ」

咄嗟に笑顔を取り繕って、自分の中に湧き上がった感情に蓋をする。

私は、長い時を生きることとはできない。

この人達とは違う生き物だから。

それならば、いっそ。

人でなかった方が、良かったかもしれない、なんて。

常磐は、今もそこにあつた。

今回は起きているようだ。起きているといっても、意識があるかどうかは定かではないが。

緑色の瞳が、ぼんやりと空を見上げている。

「……いつまでそうしているつもりだ？」

問いかけても返事はない。瞳は空を映したまま、こちらをちらりとも見ることもない。

乾いた唇がかすかに動く。青藍、とそうに言ったように見え  
たのは気のせいだったのだろうか。

「会いたいのか」

誰に、とあえて言うことはしなかった。

緑の瞳がわずかに光を増した。深いその緑色は、まるで何かを訴えるようにこちらを見つめてくる。

「……いつまでそうしている。会いたいのなら、自分から動け。おまえにとつての時間が悠久であるとしても、現実の時は待たない。おまえがぼんやりとしているうちに、取り返しのつかないことになる可能性だつてある」

青藍、とまた唇が動く。

二人が別れて、二年の時間が経っている。当時はまだ幼さを残していた青藍も、今では立派な女性とまでいえるほどに成長した。髪は長く、美しくなり、丸みをおびた身体は大人と少女の狭間にあるように。

「青藍は前を見てる。前に進もうとしている。おまえは、そこで置いていかれるだけか？」

また、と付け足すと、常磐は静かにこちらを睨みつけてきた。

「おまえに睨まれたところで俺は何も思わないぞ。おまえは逃げているだけだろう。青藍を求めて、青藍にまた拒絶されることに怯えている。真朱に置いていかれたことを嘆いていた時をまるで変わらないな」

「黙れ！」

険しい表情で常磐が叫ぶ。やっとしゃべったな、とこちらはただ冷静に見下ろすだけだ。

「俺だつて、これほど焦がれているなんて思つてなかったさ！ 守

つてつつもりだった！ 自分が支えられていたなんて　その支えを失って動けなくなるなんて、考えてもいなかった！」

吐き捨てるような言葉は、誰かに言っているというよりは、むしろ　自分に、確かめるように叫んでいるようにしか見えなかった。苦しげに地を見つめながら、常磐はやがて、力が抜けたように呟く。

「こんなに　……」

まるで、まだ認められずにいるように。

「こんなに、愛していたなんて、気づかなかった」

## 27：君を望むことが罪じゃないなら（2）

東雲が屋敷を空けて、一週間が経とうとしていた。

普段はそれ以上に帰って来ないことが多々ある。それなのに今回ばかりは気になった。いつもならばどこへ行くのか、何をしに行くのか　青藍が知り得て問題ない程度には教えてくれる東雲が、今回は「ちよつとな」と言葉を濁したまま出ていってしまった。

青藍をよく思っていない天上の神のもとへ行く時でさえ、説明を欠かさなかった東雲が初めてとった行動に、青藍は違和感を感じて仕方がない。

数日前から降り始めた雨のおかげで外へ出れない分、余計にそんな考えは深まっていくばかりだ。

雨に打たれ色を増していく庭の緑は　愛しい人の瞳を思い起こされるもので。

ああ、駄目だ。

即座に思考を停止させて、それ以上考えることを拒む。

思い出せば思い出すほど、会いたくなるだけだ。会って辛いのは自分だとわかつているくせに、それでも中毒のように彼に会いたくなる。

「会いたくない！」

耳を塞ぎ、目を瞑り、しゃがみこんで声を張り上げる。

「会いたくない会いたくない会いたくない会いたくない！」

それはもう癖のようなものだった。

常磐と別れ、それでも常磐に焦がれるようになってから　自分に言い聞かせるために続けた行為。会いたくて仕方ないと思った時に、その気持ちさえも拒絶するために。

いつもはそうして気持ちを落ちつけた。それなのにどうしてもどうしてだろうか。

「  
」

今日に限って、それでは治まらなかった。

ぐにやりと視界が歪んで、瞳から涙が零れ落ちる。外の雨に濡れたんだろっか、涙は溢れるばかりで止まることを知らない。

苦しい。

会いたくて苦しい。

会えなくて苦しい。

触れられない。触れたい。傍にいたい。傍にいられない。

「  
」

ときわ。

唇が勝手に音無く呟く。

その瞬間に溢れ出る想いに、瞳から流れる涙はよりいっそう止まらなくなる。もう限界なのかもしれない。

私は常磐を壊してしまう。

けれど常磐に会えない日々は私を確実に壊していく。

「  
青藍？」

心配そうな声が、青藍を一人の世界から引きもどした。顔を上げてみれば、そこにはどうしたら良いのか分からずに立ちつくしている山吹がいた。

「大丈夫、か？」

山吹は目線を会わせるように、私の前にしゃがむ。おずおずと伸ばされた手がそっと壊れ物に触れるように涙を拭ってくれた。涙で

冷えた頬に感じるささやかなぬくもりが、凍っていた心を徐々に溶かしていくようだった。

我儘だつて、分かっているのに。

欲しいものなんて持たなければ、苦しまなくて済む。手に入れてはいけないものに焦がれて泣き叫ぶこともしなくて済む。私一人が、耐えて我慢していればいいだけ。

「どうした？ 何があつた？」

よしよしと、見かけだけは決して年の変わらない山吹に頭を撫でられ、慰められる。これが東雲様ではなかったからだろう、自分に課していた鎖が緩んでいくのが分かった。

「……………たい」

ぽつりと願いは唇から漏れた。

「青藍？」

よく聞こえなかったのだろう、私の小さな願望を聞きかえす山吹に、しがみ付いて涙も堪えずに叫んだ。止めることなんてもう出来なかった。

「常磐に会いたい！ 会って話したい声が聞きたい離れてるのもうやだ、ずっとずっとずっと傍にいたい！ 傍にいていいんだよって許されたい！ 常磐につ」

そこから先の願いを口にすることを躊躇つて、山吹を見上げる。

山吹は泣き叫ぶ私にまるで動じることなく、ただ優しく笑っていた。いつもの山吹じゃないみたい。これじゃあいつもと立場が逆だ。それなのに、その笑顔が「言っていいんだよ」と言っているような気がする。

「……………常磐に、青藍って……………呼んでほしい」

誰かを重ねた私じゃなくて。

私自身を想って、私自身の名前を。

常磐に私の存在を認めて欲しい。常磐の中で『青藍』という存在を確かに焼き付けたい。真朱の欠片なんかじゃない、確かな私を。

山吹は子どもをあやすように私の背中をぼんぼんと叩く。

片方の手がまた頭を優しく撫でて、ほっとするような安堵感に気が抜けた。

「青藍は、少しくらい我儘になっていいんだよ」

良い子過ぎるから、と山吹が優しく囁く。

小さな頃から母さんと二人きりで、母さんを亡くしてからは一人で生きてきた。村人に売り払われて、奴隷商の男達から逃げ出して、常磐と出会うまで　甘える、なんてする機会はそう多くなかった。常磐も東雲様も、私を甘やかす。今でも充分すぎるくらいなんだから、これ以上を求めるなんて贅沢過ぎる。そう思っていた。

「みんな、青藍のことが大好きだから、我儘言ってほしいんだ」

……我儘、とか。

「言って、嫌って思われないかな？　嫌われたり、しないかな？」

それだけがずっと不安で、自分が望んでいることを隠すことはほとんどん得意になっていった。

山吹は優しく微笑んで「どうして？」と問い返してくる。

「大好きな人の望みを叶えることが、嫌なことになる？　その人を笑顔にすることが、面倒なことになる？」

静かに降る雨みたいに、山吹の言葉は胸の砂地にしみ込んでいく。するりと言葉は飲み込まれて、何故か分からないけれど納得できてしまう。



「だから青藍も言っていんだよ」

優しく頭を撫でてくれるぬくもりに、子どもみたいに安堵した。

いいのかな。

我儘になっても、いいのかな。

そんな躊躇いは胸の中にまだ残っている。でも山吹の手が何度も何度も「いいんだよ」と言ってくれているようで、強張っていた身体から力が抜けていく。

ゆるゆると訪れてきた睡魔に吸い込まれるように、山吹にもたれて眠りへと落ちていく。

それは不思議なくらいに穏やかな眠りの訪れだった。

## 28：君を望むことが罪じゃないなら（3）

「……眠ったのか」

山吹が眠った青藍を抱き上げると、そんな声が聞こえた。  
誰だと問うまでもない。山吹の主である東雲だ。

「戻られたんですか、主様」

いつ、と問おうとする山吹の手から東雲は青藍を受け取って、軽々と抱き上げる。涙に濡れた寝顔を見つめる姿は我が子を見守る父親のようだ。

「今さっきだ」

「じゃあ、聞いていたんですか」

悪趣味ですよ、と山吹は呟く。おそらく青藍は東雲には聞かれたくなかっただろう。おそらく山吹にだって知られたくなかったのだろうから。

自分の中で溢れだした願望を。

東雲は苦笑するだけで答えない。

「……願いを、叶えてやることはできないんですか」

青藍の部屋へ向かう東雲のあとをゆっくりとついて行きながら山吹が口を開く。東雲の表情は後ろからではうかがえない。

「青藍の願いを叶えることが出来るのは、この世でたった一人だ」

苦笑まじりのそのセリフに、山吹も黙り込む。何も出来ない自分自身にやるせなさを感じて拳を握り締める。

「そのたった一人に、少しふっかけてきたが      どう出るかはあいつ次第だ」

月に照らされる金色の髪。  
深い緑色の瞳。  
大きく優しい手のひら。  
低く響く声。

どれもこれも、恋しくて仕方がないあのひとのもの。  
胸が締め付けられるみたいに苦しかった。呼吸ができない。閉じた目からは熱い涙がぼろぼろと溢れた。

「ときわ」  
彷徨うように手を伸ばす。

どれだけ手を伸ばしても、望む人は傍にいてくれない。否、自分から彼の傍を離れたのだ。

「ときわ」

それなのに求める。なんて矛盾だろう。

夢にうなされるように、何度も何度も名前を呼ぶ。

「青藍」

低い声が、聞こえた。

恋い焦がれた、いとおいしい声だった。彷徨っていた手は大きな手のひらに包み込まれる。まるでそこが最初からあるべき場所であったかのように、強く握り締められて安堵した。

「ここに、いるから」

少し戸惑うような声だった。

これは夢なんだろう、とそう思った。だって彼がここにいるはずがないのだ。

「傍に、いるから」

それにしても迷子の子どものような声だ。不安でしかたないとも言っような。

ああ、これが夢だというのなら。

「……傍にいて」

大きな手を強く握り返して、青藍は夢現の中で呟く。

「傍にいて。もう離れないで」

夢の中で願うことくらい、自由でしょう？

そう思いながら青藍は手のひらに感じるぬくもりだけを感じながら深く眠りへと落ちていく。夢も見ないほどに、深い深い眠りへ。

「う、ん？」

目を覚ますとまず最初に映るのは見慣れた高い天井。

傍らにぬくもりがないことを確認して、やっぱり夢だったんだなと苦笑した。あんな夢を見たんだろうなんて考えるまでもない。

「重症だなあ……」

山吹にわめいただけでなく、夢にまで見てしまうなんて。

手のひらにはまだぬくもりが残っているような　そんな感覚さえあるのだから。

腕で視界を覆う。気を緩めれば涙が溢れてきそうだった。夢の名残ともいえるぬくもりさえいとおしくて仕方ないなんて、本当に馬鹿だ。

今となってはもう、常磐を想うこの気持ちが自分のものなんだと言いつ切る自信もないのに。会えない月日が長くなれば長くなるほど、苦しくなっていく。それはまるで真朱の呪いのような気が　最近ではしてくる。

あの頃のように、常磐への想いに揺るぎない自信を持ってない自分

が嫌だ。

それなのに恋い焦がれる自分が嫌だ。

「駄目だ！」

このまま寝台の上でごろごろとしていたら、気分が滅入るばかりだ。

起き上がって窓の向こうを見ると、綺麗な満月が浮かんでいた。雨は昼間のうちに止んでしまったのだろう。

窓を開けて空気を吸うと、かすかに水の匂いがした。澄んだ空気が胸に心地よくしみ込んでいく。

庭に出るだけならば、問題はないだろう。

そう思って私は音をたてないように静かに部屋から出ていった。

外に出ると満月に照らされて思いのほか明るい。

ふう、と息を吐き出す。深呼吸すれば自分の中のぐちゃぐちゃした感情が薄れていく気がした。

大丈夫、まだ頑張れる。

そう自分に言い聞かせて夜空を見上げた。

丸い月。かすかに光を放つ星達。常磐と出会ったのも、こんな夜だった、と思い出してまた涙が出た。

月に照らされる彼は、この世のものとは思えないほどに綺麗で、そして心臓の奥から湧き上がるような強い感情の名前を、私は知らなかった。

一目惚れなんて簡単な言葉じゃ片付かない。

これが真朱の魂による巡り合いだというのなら、それでも構わなかった。

愛しくて愛しくて愛しくて。

愛なんて言葉の意味を理解しきれない子どもの私ですら、その言葉しか浮かばなかった。それ以外の言葉はどれもの外れで、から回ってしまう。

「  
常磐」

会いたいよ、と小さく呟く。

また静かに溢れてきた私の涙を隠すように、月が雲で翳った。明るい夜闇が、一瞬にして暗くなっていく。足元の影すら闇に飲み込まれて、自分自身すら消えてしまいそうな不安がせりあがってきた。

寂しいよ。助けてよ。傍にいてよ。

そんな願いを小さく呟く。

「青藍？」

ぼつりぼつりと漏らした呟きは、低い声に反応して止まる。

嗚呼。

顔を上げて前を見る。翳った月がまた強い光を放って地上を照らし始めた。飲み込みそうに深い闇は、すぐさまどこかへと消え去って。

その人は、そこにいた。月光を受けて輝きを増す金の髪、深い森の緑瞳。美しいその人は、記憶の中の姿をまるで変わらない。

「常磐」

やはり、溢れる想いはただ一つ。

君が、いとおいしい。

## 29：君を望むことが罪じゃないなら（4）

幻でも、夢でもいい。

誰かに許されなくてもいい。

自分の存在が、常磐を傷つけるのだとしても、もういい。

「常磐！」

身体は自然と駆け出した。寝起きの頭は冷静に考えることなんて忘れていて、本能だけで動いていた。

想いは今にも溢れだしそう。

「常磐、常磐、常磐、常磐！」

駆け出して、常磐に抱きつく。拒まれることなく、常磐は優しく私を抱きとめた。

もう子どもじゃないのに、子どものように泣きじゃくって何度も「常磐」と呼んだ。抱きしめる身体から、常磐が困惑しているのだと気づいたけれど、自分から離れることは出来なかった。

しっかりと、それでも優しく抱きしめてくれる存在を、手放すなんてもう出来ない。

「青藍」

低い声が私の名前を呼ぶ。

胸が痛んだ。この人に名前を呼ばれると、いつも胸が苦しくなる。常磐が私の髪を撫でる。優しいその仕草に、懐かしさを覚えて涙が出た。私はこんなにもこの人を求めていたんだと思い知らされる



ようだった。

ぬくもりに酔いしれながら、再び巡り出会えたことを幸運に思う。そしてようやく、言いようのない罪悪感が胸から溢れだしてきた。

「ごめ、なさい。私は常磐を駄目にするのに、会いたいつて思つてごめんなさい。傍にいたいつて思つてごめんなさい。でも、もう、離れてるの、やだ……」

謝っているのか我儘を言っているのか分からなくなってきた。ただ強く常磐に抱きついて離れまいとしている私の本能は、我儘なのかもしれない。

「ごめんなさい、と何度も繰り返していると、常磐が「いい」と呟く。

「ときわ？」

涙に濡れたままで常磐を見上げると、常磐は眉間に皺を寄せて私を見下ろしていた。怒られるのだろうか、嫌われてしまったんだろうか、と思つて身体が震えた。

「いいんだ、もう」

苦しそくに瞳を閉じて、常磐は呟く。

次の瞬間にはきつく抱きしめられて、呼吸すら厳しくなる。私と常磐の間には空気すらも入り込めないほどに、強い腕の力に私はただ縋りついた。

「運命とか、宿命とか、もうどうでもいいんだ。俺はおまえに救われてた。そんなことに気づけないほどに以前の俺は愚かで、おまえがどれほど大事なのか分かつていなかった。いや、俺は今でも愚かなままだ。おまえが去ったあとにずっと動けなくなった。ずっと前から、こうしている今まで」

ぎゅ、とまた常磐の腕に力が込められる。

「俺は、おまえに支えられていたんだ」

耳元で囁かれる言葉に、思わず「嘘」と呟いていた。

「そんな、わけない。私は」

「嘘じゃない。嘘じゃないんだ」

震える腕で私は常磐の背に手を回した。

「だって、私は」

常磐を駄目にする。そう思ったから、離れた。

自然とまた涙が溢れてきて、空に浮かぶ月が歪んで見えた。それなのに月の光は眩しくなったような気がする。

「真朱じゃない、常磐が愛した人じゃない、常磐を助けた人じゃない、常磐が望む人じゃない、常磐に愛された人じゃない！」

涙が溢れて、零れ落ちる。

自分でも嫉妬にまみれた汚い言葉だと思った。

真朱に重ねられることを拒みながら、常磐の望む人でない自分が嫌だった。私は常磐にしがみ付いて、それでも常磐の顔を見ることが出来ずに月に向かって叫ぶしかない。

「そんなことどうでもいい！」

しかし私の声よりも強いその叫びに、私は黙るしかなかった。

「真朱じゃなくていい、今俺が愛して、俺を助けて、俺が望んで、俺を支えたのはおまえなんだ！」

頼むから、と耳元で弱く囁かれた。

「……傍に、いてくれ」

願う言葉とは裏腹に、常磐の腕は私をきつく抱きしめている。もう離すことはないとも言いたげに。ここだけが私の場所だとも言いたげに。

「わたしが、常磐の傍に、いてもいいの……？」

声は自然と震えていた。同じように震える手で常磐を抱きしめる。誰に許しを求めればいいのか分からない。けれど、私と常磐が共に生きていくことが出来るというのなら、私はこれ以上に何も望んだりしないだろう。

「誰に許されなくてもいい」

しつかりとした常磐の聲が、私の耳元で囁かれる。

確かな決意を感じるその声に、私はただ茫然と聞き入っていた。

「神が許さないとしても、人が許さないとしても、そんなこと関係ない」

お互いに縋るように支え合うように、力の限りに抱きしめ合う。

いつそ一つになればいいと、この時願ったのは私だけではないだろう。

「これが罪だというのなら」

常磐の手のひらが、そつと私の頬に触れた。

導かれるように身体を離して見つめ合う。離れた身体に夜風が吹きつけてくる。ぬくもりが去ったあとにそれはいつも以上に冷たく感じた。

誘われるように目を閉じて、頬を優しく撫でるぬくもりだけを感じ取る。

「共に堕ちよう」

呟かれた言葉は吐息とともに間近で感じた。

答える必要はなかった。たぶん、私がこの人の腕の中に飛び込んだ瞬間から、もう堕ちているんだ。

唇に感じる優しさにただ酔いしれて、満たされて、そして私も常磐も堕ちていく。

この人と一緒にいられるのなら、どんなに罪にまみれてもいいと思うた。



### 30：はじまりの小さな種

気が遠くなるほどの長い時のなかで、今確かにひとつの変化が生まれた。

それは、遙か昔に私が落とした楔。  
小さなひとつの種。  
願うように割いた想い。

ああ、ようやく。

「誓いは果たされる」

常磐。

おまえの、その手で。

「……いいのか？」

ようやくの再会を果たした二人を遠くから見ながら、東雲が隣にいる山吹に問う。

「何がですか？ 良かったじゃないですか」  
けろりとした顔で山吹は言う。あまりにも平気そうな顔に、質問をした東雲の方が居たたまれなくなった。

気づかないわけがない。

「青藍のこと、気に入っていたんだろう？」

ここで「気に入って」という言葉を使ってくるあたり、東雲なりに気を使っているのだろう。

しかし山吹は微笑みながら言う。

「山吹の花は、実らないものですから」

そう呟く横顔は、ただ優しく青藍を見つめていた。

外見は子どものままだというのに、こういう一面で山吹の懐の大きさは窺えた。

疲れか安堵か 常磐の腕の中で眠ってしまった青藍を抱き上げて、部屋まで向かう。先程眠っていた時は魔されていたようだが、今の寝息はただ穏やかだ。

「変わっただろう」

声に気づいて顔を上げると、東雲が微笑みながらこちらを見ているた。

「……変わったが、変わってない」

何のことだかなんて聞く必要はない。常磐はこの二年の歳月を長くも短くも感じない。ただ青藍は美しくなった。幼さを残した顔立ち、もう一人前の女性と言えるほどに。だがこうして眠っている姿は別れた時とまるで変わっていない。

「言っておくが、青藍をこれ以上傷つけるなら今度こそ二度と会わ

せるつもりはないぞ」

「これ以上傷つけるなんて、ありえない」

東雲の言葉に常磐は警戒するように青藍を強く抱きしめる。まるでおもちゃを奪われまいとする子どものようなうたと東雲は思った。

「なら、いいんだがな」

ため息を吐き出して東雲は踵を返した。

「早く部屋まで運べ。そのままでは風邪をひいてしまう」

じろりと睨まれながら東雲に言われて、常磐は口籠もりながらも頷く。薄着で夜風にあたっていた青藍の身体は冷え切ってしまった。いた。

寝台の上で眠る青藍は、満ちたりたような表情をしていた。

良い夢でも見ているのだろうか、微笑ましくなる。

長い髪を撫でてやりながら、飽きることもなくただ眠る青藍を見つめた。常磐には睡眠も必要ない。それはこの二年で証明された。

「……約束する」

もう何度傷つけたか分からない、常磐は聖なる誓いでもするように青藍の手をとった。

「この身体が存在し続ける限り、おまえを守るから」

だから、傍にいて。

何度も願った言葉は喉に張り付いて離れない。声にならないまま、また喉の奥へと押し込んだ。

おまえを、守るから。

祈るように、誓うように、囁かれた言葉が夢の中で響き渡る。

「……ときわ？」

声の主を呼ぶけれど、返事はない。

重たい瞼を開けて周囲を見回しても、常磐の姿は見つからなかった。

ただ、言葉の余韻が波紋のようにその空間に広がっていくような気がした。何度も何度も、青藍の胸に届くように反響する。

「小さな私の種」

甘い声が常磐の声の反響を切り裂くようにその場に突然現れた。聞き覚えのある、記憶の中だけに存在する声だ。しかし以前に聞いた時とはどこか雰囲気違った。

青藍はごくりと唾を飲み込んで、声のした方へゆっくりと振り返る。

白い髪、赤い瞳、まるで自分と変わらない姿をしているのに、その身を感じる時は行幾千年。少女の姿をした老婆、とでも言えばいいのか。

神と呼ばれる者と同じ気配。

「……真朱」

名を呼ぶと、その人は笑った。

可笑しそうに笑うのでなく、楽しそうに笑うのでなく、ただ笑った。感情のこもっていない笑みだった。

真朱はゆっくりと青藍に手を伸ばした。

細い腕は、青藍の記憶の中にあるものとまるで変わらない。それなのに。

「……真朱、なの？」

青藍は問わずにいらなかった。真朱の姿をしているその人は、真朱というにはあまりにも違いすぎる。どこか、とはっきり言うこ



とは出来ない。たが、違った。

ふ、と真朱は笑った。それはどこか自嘲的な笑みで。

「おまえの知る真朱ではないよ」

口調までが違っていて、青藍はただ黙るしかない。これは夢なんだろうかと思う。それとも、真朱が見せてるのだろうか。

伸びてきた真朱の手が、いとおしそうに青藍の頬を撫でる。

「ようやく、始まった」

ほっと安堵したような呟き。

青藍は振り払うでもなく、拒むでもなくただ真朱を見つめた。

「気が遠くなるほどの時が経った。種をまいたあの時から。私はただ待つしか出来なかった」

何の話をしているの、そう問おうともその時は思わなかった。

ただ真朱の赤い瞳を真っ直ぐに見つめていると、何も考えられなかった。ただ胸の奥で何かが訴えてきている。

「私の、小さな種」

優しい声で真朱がそう言った瞬間に、白い光が溢れる。

目が覚めるのだと思った。やはりこれは夢だったのだと。

「真、朱」

覚醒する意識の中で、ただ彼女の名前を呼ぶ。白い光の向こうで、彼女はただ微笑んでいた。

目が覚めると、そこは慣れた寝台の上だった。

朝の柔らかな光が部屋の中に溢れている。

「……………朝、だ」

ぼつりと呟いて、自分の頬に触れる。

夢の中の感触は残っていない。それなのにぬくもりがそこにあるような気がした。

何が始まったというんだろう。

何を待っていたというんだろう。

「……………」

寝台から降りて、大人しく服を着る。何故かいつもの少年の服ではなく、この間東雲に買ってもらった少女の服を着た。

ゆっくりと戸を開け、広い屋敷の中を歩いていると、庭の東屋に東雲と常磐の姿を見つけた。

常磐が青藍に気づき、ぱっと立ち上がる。つられてこちらを見た東雲が手招きをした。

庭へ降りて駆け寄ると、常磐は嬉しそうに微笑んだ。

常磐の隣に腰をおろして、東雲を見る。青藍と常磐が並んでいる姿に微笑みながらも少し複雑な表情を浮かべていた。

「東雲様」

そんな東雲を真っ直ぐに見つめて、青藍が口を開く。

何をすべきなんだろう。

何を知りたいんだろう。

自分が求めるものを、青藍ははっきりと分かっていた。

確かめたい。自分のことを。

「……………真朱に、会うことは出来ますか？」

その為には、彼女に。

### 31：君の願いの先に（1）

空気が二人の心情を写し取るように震えた。  
驚く瞳が真っ直ぐに私を見つめた。

「……何を、突然」

常磐が呆然として呟く。東雲様は冷静な表情を取り戻して、ただ黙って私と常磐の様子を見守っていた。

「突然、だけど。もう決めた」

「どうしてそんな必要がある」

はつきりと決意を告げると、常磐はわずかに苛立った。眉間に皺を寄せながら叱るようにそう言う。

「私は、私は何なのか知りたい。それを知ってるのは真朱だと思う……と、いうよりも真朱しかいない」

すべての起点は真朱にある。それだけは間違いなかった。

「だから、真朱に会いたい。会えますよね？ 東雲様？」

話しかけられた東雲は、固い表情で黙り込んだ。

「それが青藍の願いだというなら、叶えてくれるでしょう？ 主様」  
沈黙の中に突然振って来たのは山吹の声だった。頭上から声が聞こえたと思うと、東屋の屋根から山吹が華麗に飛び降りてくる。

「山吹」

たしなめるように東雲が名前を呼んだ。しかし山吹が気にした様子はない。

「それが人神の仕事でしょう。違います？」

「……ありがとう、山吹」

思いもよらない援護に、青藍は微笑みながらそう言う。山吹は明るく笑いながら青藍を見た。

「俺は青藍の味方だから！」

「山吹。私達が青藍の味方じゃないような口ぶりをするな」

東雲が不服そうに口を挟んだ。山吹は悪戯した後の子どものように笑いながら東雲を振り返り見る。

「だって、反対なんでしょう？」

それはずるい質問だった。反対するということは青藍の味方にはなり得ない、しかしここにいる全員は青藍の為をおもって動く者ばかりだ。

「……反対、というわけではない。話の上では真朱に会わせることは可能だ。だが、青藍」

短く答えた後で、東雲は青藍を見た。真っ直ぐと見つめると、同じだけの強さで青藍は見つめ返してくる。

「真朱を捕えているのは天の神々だ。その真朱へ会いに行くことは、それだけ天に近づくということだ。おまえが天の神々から危険視されているおまえが行けば、かなりの危険が伴うことは分かっているのか？」

想定していた問いに、青藍は迷いなく答えた。

「天の神々が私を危険視するのは、不確定要素の存在だからでしょう？ 私という存在がなんなのか、それを知りたいのは天の神々も同じこと。どちらにとっても悪いことにはならないと思います」

につこりと笑いながら東雲にはつきり告げると、東雲は言いかえす言葉が見つからずに黙る。

「それは、おまえが真朱に利用されていなければの話だ」

一瞬の沈黙を破ったのは、常磐の声だった。

「たとえば真朱が自分が捕まることを想定し、その上で逃げる手段としておまえを用意していたなら、おまえが真朱に会おうとする意志すら真朱の手の上で転がされているだけのこともかもしれない」

苦しげな表情で、辛そうな顔で、どうしてそんなことを言うんだろつと青藍は泣きたくなる。常磐は真朱を疑っているのと同時に、

真朱を信じたいと願っているのに。

「……その可能性は、あまりないと思うよ」

青藍は常磐の表情に心乱されながらも、そう呟いた。

「真朱は、自ら神々に捕まったんだから。だから、逃げようと思えることは可笑しいよ。それに私が生まれたのがこんなに遅くなるのも、可笑しい。でも、真朱に会おうとする気持ちで全部私の意思なのかって聞かれると、もしかしたら違うのかもしれないけど」

まるで夢に導かれたようだ、としか言いようがない。あれがただの夢でないのなら、間違いなく真朱の考えは絡んでくるのだろう。しかしそれをここで口にするつもりはなかった。

「このまま何もせずに生きていくのは嫌。天の神々からも睨まれて怯えて暮らしていけないの？ 真朱の名残に動揺しながら生きてくの？ 私は、私の人生を歩みたいのに」

「だが……」

なおも言葉を重ねようとする常磐を、青藍はただ黙ってじつと見つめた。その瞳に、常磐は気まずそうに黙った。

しん、とその場は静まり返り、時間の流れがやけにゆっくりと感じられた。

東雲や常磐が気まずいと感じる中で、青藍だけはにっこりと満足そうに笑う。何十年 何百年と生きた大の大人の男が、たかが十数年生きただけの少女に言い負かされたのだ。

「ほらね」

言わんこつちやない、と山吹が呆れたように笑う。

「この中じゃ、誰も青藍には勝てないよ」

青藍を甘やかすことにはばかり心を砕く大人は、青藍を止める方法を知らなかった。もともと青藍は大人しい子ではないのだ。なにしろ人買いから逃げ出すくらいの度胸を持ち合っているのだから。

「常磐」

青藍は笑顔のまま、常磐の手をとった。

まるで青藍の方がお姉さんみたいだ。手を握られた常磐は、どうしたらいいのか分からないといった顔で、戸惑っているだけだ。

「目をそらすのも、逃げるのも、もう止めよう」

それは固い決意の表れだった。

何人もそれを覆すことは出来ないと宣言するように、強く優しい声だ。

「真朱から逃れようとするのは止めて、私が何で、常磐が何なのかはつきりさせよう」

大丈夫だよ、と青藍は笑顔で続ける。

「もし常磐が倒れそうになっても、私が支えてあげるから」

そんな無邪気ともいえる笑顔に、常磐は呆気にとられた。まさかこんな小さな女の子に、こんなことを言われるなんて夢にも思わない。

守ると誓ったのは、先程のことなのに。

「敵わない、おまえには」

たった一言で、こんなにも簡単に自分を救いあげてくれる。

この目の前の少女は、そんな涙が出そうに嬉しいことをやっているだなんて、分かっているだろうか？

### 31：君の願いの先に（1）（後書き）

ついにクライマックスともいえる最終章のはじまりです。

青藍について、常磐について、真朱について、どんどん明かされていきますので、どうぞ最後までお付き合いいただけると幸いです。



### 32：君の願いの先に（2）

真朱は、天と地の境のとある場所に幽閉されている。

東雲は苦い表情でそう語った。

真朱という存在は異質過ぎて、死罪にするか否かでさえ神々の意見が大きく割れることとなった。

人なのか、神なのか。それすら決着のつかぬ論争の果てに、真朱は永遠に出ることの叶わない檻の中に閉じ込められ、長すぎる時の中ただ一人でいることしか出来なくなつた。

そこに行けば真朱に会える。

これから行くべき先が提示されると、青藍の中で真朱に会うという未来は確定されたものになった。

不思議なくらいに、会えないかもしれないという考えが浮かんでこない。

危険だということは百も承知だ。

けれど青藍の中に迷いはなかった。

「そこまで、どうやって行けばいいんですか？」

青藍は真つ直ぐに東雲を見てそう問いかける。

未だに釈然としない東雲は、ため息を零しながら答えた。

「人では辿りつけない場所だ。人神、または天の神のみが行ける領域。天と地の境というのは言葉にするのは簡単だが、その実不確かな場所だからな」

「不確かな場所？」

青藍が首を傾げると、東雲はどうしたものかとしばし黙り込む。

「感覚的なものだ。神には悟ることができる。しかし人はもともと地上にあるもの。だから天の世界を知る術はないし、天と地の境を

知るはずもない」

「それに境っていうのはどんなものにしろ曖昧なものなんだ。目に見えるものじゃない。誰かが決めるものとも違う。自然界のものならなおさらね」

東雲の説明に付け足すように山吹が口を開く。

分かったような分からないような気分になりながら、青藍は静かに二人の説明を理解しようと頭を動かした。

「それじゃあ、私には分からないってことですか？」

人には感知できない場所。それでは行くことすらできないのではないか。そんな不安が今さらに浮かび上がる。

「……おまえは特殊な存在だから、な。もしかすれば分かるかもしれない。それに俺が案内すれば辿りつくことはできるだろう」

「……連れていてくれるんですか？ 東雲様」

青藍が柔らかく微笑んでそう問いかけると、東雲はため息を零しながら「仕方ない」と答えた。

「放っておくと、何をしでかすか分からないからな」

それならば目の届く範囲でやってくれた方がいい、と東雲は苦笑する。

「ありがとうございます、東雲様！」

青藍は嬉しそうに笑いながら東雲の首に抱きついた。東雲は優しく抱きとめながらまた苦笑いする。

「……真朱は、生きてるのか」

青藍の背後で、戸惑うような声がした。

振り返れば、ずっと黙っていた常磐が迷子のように不安げな表情で東雲を見ていた。

「以前にも言ったと思うが。真朱は生きている。その寿命が尽きるまで、な」

東雲が幾分低い声でそう答えた。分かりきっていたはずの答えに、常磐の瞳はますます揺れた。

ああ、このひとはまだ。

失望にも絶望にも似た感情が、青藍の中で浮かんだ。  
分かっているつもりだ。常磐の中で真朱という存在は大きい。愛しくも憎い存在として。それでも常磐は心のどこかで、真朱を想っているんだろう。

自分に向けられている愛情が、どんな種類のものなのか、青藍には分からない。おそらく常磐自身も分かっていないのかもしれない。失いたくないと願われるほどには、愛されている。

「……常磐も、行くんでしょう？」

気がつけば青藍はそう問いかけていた。

緑色の瞳が、頼りなさげに青藍を映す。

迷いを払うように青藍が手を差し出せば、大きな手が青藍の手を包み込む。不安に揺れた瞳はそのままでも。

「青藍って、男の趣味悪いよな」

今日のところは、と話に区切りをつけて部屋に戻る途中で、山吹が唐突にそう切り出した。

「どうしたの、突然」

苦笑すると、山吹が「だってさ」と続ける。

「なんだってあんな男がいいのになって思うよ、俺は。青藍が好きだって言うんだから応援はするけど、手放しに褒められる男じゃないだろ」

アレ　と言われた常磐は、今頃くしゃみでもしているのだろう

か。

青藍としても、否定できないのがむなしい。

「そうだね、良い人とは言えないかもしれないね」

弱い人だと思う。

脆い人だと思う。

あの夜。初めて青藍が常磐と出会った夜。

あの時感じたような強さはもう常磐の中には欠片も感じない。

「分かってるんだ？」

呆れたように山吹が呟く。

「分かってるよ。でも、放っておけないんだ」

母性本能というやつなんだろう。それとも恋の愚かさ故だろうか。

人を信じる事が出来ず、過去を引きずり続けてきたあの人を、

慰めたいと思う。優しくされた分だけ、優しくしたいと思う。不安

な時は大丈夫だよと隣で微笑んであげたらと思う。

「恋って、呪いみたいだね」

苦笑すると、山吹はおおげさにため息を吐き出した。

「そこまで言い切っちゃうんだからもう末期なんだろうなあ。俺はいつまでも青藍の味方だけだよ」

そう言いながら山吹は青藍の頭を撫でてくれる。その手のひらの暖かさに胸が熱くなりながら、青藍は「ありがとう」と呟いた。

「でも、青藍をこれ以上泣かせたりしたら俺も黙ってないから。泣かされないように気をつけてくれな？」

山吹の手が名残惜しそうに頭を撫でるのを止め、茶化すようにそう言われる。

「私が気をつけるの？」

青藍が笑いながらそう問いかけると、山吹は頷く。

「だって、あいつに言っただって意味ないよ。自分の行動を上手く制しているように見えないし」

それに、と山吹が続ける。

「俺が怒ってあいつを殴ったら悲しいのは青藍だろ？ それなら俺がそんなことしないで済むように、ちゃんと幸せになつて」  
山吹は切なそうに微笑んで、その場から去って行った。

### 33：君の願いの先に（3）

その夜、青藍は夢を見た。

不思議な感覚は、何度か感じたことのあるものだ。慣れたといえるほどではないが、これが普通の夢ではないとすぐに分かった。

真朱に関する夢。

夢の中であることを告げるような、頼りない心地のまま青藍は周囲を見回した。そこにあるのは一面に咲く誇る、真っ白な花。白い靄があたりにたちこめていて、遠くはぼんやりとしか見えない。空は青空でなく、白い雲が覆いかぶさっている。

真っ白な世界だ。

まるで真朱のようだ、と青藍は思った。そしてその白い世界に立つ自分はまるで異界のものであるのだと強く告げられているような気がした。

さく、と一歩足を踏み出すと、足元の花が潰れた。足首ほどまでの高さの花はぎっしりと敷き詰められたように咲いていて、可哀想だが踏まずには前に進めない。

どこまで続いているんだろう。ここはどこなんだろう。そんなことを思いながら歩いた。ただの広い花畑と思いきや、いつまでたっても果てが見えない。

「……夢、だからかな」

それともこれがこの普通なのだろうか。

青藍にはここに真朱がいるような気がした。

『私の、小さな種』

そう優しく呟いた真朱と、もう一度話がしたかった。娘を見る母のような目で、念願の宝を見つけた人のような目で、青藍を見つめたあの真朱に。

「真朱」

試しに呼んでみた。しかし青藍の声は広い空間に小さく響いただけで、返事はない。

真朱に関係する夢だと思ったのは間違いだったのだろうか、と青藍は首を傾げる。しかしただの夢にしてはおかしなことが多すぎる。こんな場所は青藍は知らないし、そもそも夢を夢と認識しているのもあまり普通ではないだろう。

「真朱」

もう一度、今度は少しだけ大きな声で名を呼んだ。

しかし返ってくるのは言いようのない静寂だけだ。

真っ白な世界。音のない世界。異質な自分。ただ青藍は立ちつきました。最初は何とも思わなかった世界が、突然恐ろしいものに思えた。

はっと目が覚めて、青藍は飛び起きた。

先程まで見ていた夢のせいか、ひどく汗をかいている。怖かった、と思って何が怖かったのだろうと思う。

意味深な夢だった。だが青藍の頭の中にはどんな夢だったのかすっぽりと抜け落ちてしまっていた。

青藍とて人間だ。普段見る夢は大抵忘れている。けれど今回の夢は普通の、どうでもいいものとは違う気がするのに 内容は覚えていない。

「……ただの、変な夢だっただけなのかな」

首を傾げながら青藍は寝台からおりて着替え始めた。男物か女物のどちらを着るかしばし悩んで、なんとなく女物にした。東雲に買ったもらった董色の服だ。

ふと気を緩めると、思いだせない夢の内容が気になったが。

冷たい水で顔を洗うと、青藍は自分の頬をぱん、と軽く叩いた。じんわりと痛みが染みてきて、改めて目が覚める。

「気にしてもしかたない！」

意味があるものなら思い出すだろう。思い出さないということは、今の青藍には必要ないものだ。そう思いこむことで納得させる。

「おはようございます、東雲様」

部屋を出てすぐに東雲と会い、青藍はいつもと変わらない様子であいさつする。東雲もいつものように眦を下げ、青藍の頭を撫でて「おはよう」と返した。その瞳に複雑な感情が見え隠れするのは、昨日の話のせいだろうか。

「私の決意は変わりませんよ？ 東雲様」

追い打ちをかけるように青藍は下から東雲を見上げて宣言する。東雲は虚をつかれたのか驚いたように目を丸くして、ふっと笑う。

「知ってるよ。おまえは頑固者だからな」

「まったくだ」

はあ、というため息が聞こえたと思うと、東雲の後ろから常磐がやってきた。今の会話が聞こえていたのだろう。

「が、頑固って……」

そんなに頑固かな、私。青藍は首を傾げて呟いた。

「？ 昨日はあまり眠れなかったのか？」

常磐が青藍を見て問いかけた。青藍は「え？」と目を丸くする。

「そんなことなかった……と思う。夢見はあんまり良くなかったみたいなんだけど」

「なんだそれ」

「覚えてないんだよね。夢の内容」

だからたぶんと言えなくて、と青藍は苦笑する。

す、と常磐が手を伸ばして青藍の頬に触れる。指は優しくなぞる



ように目元に移動する。

「少しクマが出来てる」

じっと見下ろしてくる常磐の視線に少し居心地悪くなりながら、青藍は「寝ただけど、ね」ともごもごと口籠もる。何より東雲に見られているのが恥ずかしい。東雲は呆れたようにため息を吐いた。

「真っ昼間から何してんだよやらしい」

止まりそうにない常磐の愛撫を止めたのは、ふと湧き出た少年の声だった。

「や、山吹」

青藍は居心地が悪いまま少年の名前を呼ぶ。

「おはよう、青藍」

「お、おはよう」

につこりと曇りのない笑顔を向けてきた山吹に押され気味になりながら青藍は返事をする。山吹は常磐をちらりと見て、そして青藍の頬に触れたままの常磐の手を見た。

「ガキじゃあるまいし、もう少し時と場所と人目を考えたら？ 青

藍も困ってるじゃん」

「俺は別に……」

常磐が弁解しようとして口を開くが、山吹は間髪いれずに常磐に指差した。

「他意がなくても、他人からはやらしく見える場合もあるってことを学んでおけてことだよ。何年生きてんのあんた」

一見少年にしか見えない山吹に説教されている常磐の図というのは実に奇妙だ。二人とも見た目に反した長い年月を生きていると思うとなおさら。

「あまり役にたたんと思ってたが、思わぬところで役にたつな山吹」

東雲が関心したように呟き、いつの間にか常磐から解放された青

藍はその隣で曖昧に微笑むしかなかった。

### 34：君の願いの先に（4）

それから出発までは、それほど時間がかからなかった。短い期間の慌ただしい準備のなか、青藍はぱたぱたと館の中を駆け回る。

「青藍、手が空いたら薬草を摘んできてくれ」

「はい！」

しばらく留守にするのだから、と青藍は持っていく荷物の用意だけではなく掃除までやっている。

簾を壁にかけ、青藍は庭の薬草を摘みにまた走った。東雲から渡されたメモに書かれている薬草の名前は、普段あまり使わないものだ。と、いうより今まで使ったことがない。東雲が青藍が来た頃から植えたもので、世話は青藍がしていたのだが。

「これで、いいんでよね」

少し不安になりながら薬草を摘み取る。

確認をとるために東雲のもとへとまた急いだ。

「東雲様、これで大丈夫ですか？」

忙しそうにしている青藍とは違い、東雲は自室でのんびりとしていた。青藍が薬草を手話しかけると、振り返って微笑んだ。

「ああ、大丈夫だ。調合しておくから青藍は他のことをしておきなさい」

「はい……それ、なんの効果があるんですか？」

興味本位で問うと、東雲は薬草を見て笑う。

「これはおまえのために植えたんだ。人の身体に、神に近い場所というのは毒にもなる。もしかしたら、と思って植えたがここでの生活には必要なかったな」

予想外の答えに青藍は「え」と目を丸くした。

東雲と共に暮らすようになって、体調を崩したことなど一度もな

い。街と違つて空気も澄んでいるので気持ちいいくらだ。

「念のために調査して持つて行った方がいいだろう。天の神の領域となれば、ことは違つてきついかもしれないからな」

「あ、ありがとうございます」

ただ行きたいとしか考えていなかった青藍は少し恥ずかしくなりながら礼を述べた。東雲は優しく微笑んで青藍の頭を撫でる。そのぬくもりが嬉しくて、青藍は目を細めた。

「ほら、他の準備をしてきなさい。掃除も途中だったんだろう」

「はい」

東雲に急かされ、青藍は素直に頷き、東雲の部屋を後にした。

小走りで戻り、中断していた掃除を再開する。広い館全てを掃除するのは無理だが、普段使っている場所だけでも綺麗にして行こう。ふわ、と風がそよいだ。誘われるように庭に目を向けると、山吹の花が咲いている。あの山吹の、本体なのだそうだ。長い年月そこに植わっているであろう山吹の花は、庭の一角を鮮やかに染めるほど大きい。

「どうかした？」

山吹の花に目を奪われていると、目の前にひょこつと山吹本人が現れた。

「わっ！……や、山吹」

驚いて青藍は一歩後ずさる。そのままバランスを崩し倒れかける。短く悲鳴をあげる青藍の手を、山吹がひいた。

「危ない！」

小さな少年の手が予想外の力で青藍を引き寄せる。

「……まったく、危なっかしいなあ青藍は」

くすくすと笑いながら山吹は青藍を立たせた。

「あ、ありがとう山吹」

「どういたしまして」

につこりと笑う山吹に、青藍も微笑み返す。その名のとおりだなあ、と思いながら。山吹が笑うと、あの花のように周囲が明るくな

る。

「これじゃあ、青藍を見送るのが不安になるよ」

あいつじゃあ少し頼りないしね、と山吹は呟く。あいつ、というのは常磐のことだろうな、と青藍は苦笑した。苦笑して　そして、固まる。

「え、見送る？　って……」

何を言ってるの、と問うと、山吹は「うん？」と首を傾げる。

「そのまんまだよ。見送るって。俺は一緒に行かないから」

あつさりとした物言いに、青藍は啞然とした。不思議なくらいに、山吹も一緒だと思っていた。

「ど、どうして？」

突然の話に動揺しながら山吹に問う。山吹は「うーん」と困ったように笑いながら答えた。

「東雲様がいなくなるってことは、その仕事の代わりをする奴がないといけないしね。他に式がないわけじゃないけど、今どこらへんにいるのか分からないし。東雲様が見ていた下の街とか、しばらくは俺が見てないと」

ね？　と首を傾げる山吹に、そこまで説明されれば青藍は何も言えない。

「……山吹がいないと、さみしいな」

ぽつりと呟くと、山吹がますます困ったように眉を寄せた。

「時々残酷だよ、青藍って」

「え？」

小さく呟かれた声に、青藍は問い返す。上手く聞き取れなかった。「なんでもないよ！　ほら、早く準備しないと出発が遅れるよ。あの二人は何もしないんだろうしさあ」

確かに常磐の姿はさきほどから見えないが　。

「し、東雲様はちゃんと準備をしてたよ？」

「……ふーん。じゃああいつは？」

山吹の追及に、青藍は曖昧に微笑んだ。

「準備は準備でも、心の準備をしてるんじゃないかな」

たぶんね、と呟きながらその予感が外れていないだろうと確信を持てた。常磐にとって何よりも重要なのは真朱に会うための準備だ。「相変わらずどうしようもない男」

はぁ、という山吹のため息に青藍は何も言わなかった。同じように思う心がないわけではない。でもそれ以上に、仕方ないと思わなくもない。

「私も少し緊張してるから……常磐の気持ちも分かるし」

青藍が今まで会った真朱はどれも『本物』ではない。夢の中で会ったと言っても夢は夢だと言われてしまえばおしまいだ。

「今しかないから、そつとしておいてあげて」

準備が済めばすぐに発つ。感傷に浸れるのも覚悟を決めれるのも、今しかない。

山吹はため息を吐き出して「青藍は優しいなあ」と呟いた。

### 35：君の願いの先に（5）

準備が終わった頃に、常磐は顔を出した。わずかに緊張した表情から、やっぱり心の準備をしていたんだろうな、と青藍は笑う。

「じゃあ、頼んだぞ山吹」

門まで見送るという山吹に、東雲が念を押す。山吹は本来サボリ癖のある式だからだろう。

「はいはい、分かってますよ主様。ちゃんと仕事はしておきますから安心してください。それより青藍のこと頼みましたよ」

「頼まれるまでもない」

山吹の茶化するような言葉に東雲は呆れながらため息を吐いた。本人の目の前で頼む頼まれないなどという会話をされると、正直こそばゆい。

「青藍」

山吹がくるりと青藍を見て、優しく微笑む。

「いつてらっしゃい」

山吹は本当に優しく、慈しむように青藍の頭を撫でた。たった一言なのに、胸にじんわりと広がっていく。

いつてらっしゃい、なんだ。

思えば母と暮らした家から追われ、人買いに捕まってから安心して帰れる場所など青藍にあったらうか。帰る家も、待っていてくれる人も、こうして皆に出会うまではいなかった。

じわりと涙が滲んだ。寂しさではなく、溢れだしそうな嬉しさで。……うん、いつてきます」

きゅっ、と泣くのを我慢して、青藍は精一杯の笑顔を見せた。

青藍は山吹が見えなくなるまで手を振ると、山吹もそれに応えるようにずっと手を振り返してくれた。

常磐は、始終無言だった。

表情が強張っているのが隣を歩く青藍にはよく分かった。常磐が抱いている緊張と、青藍が抱いている緊張は似ているかもしれないがまるで違う。

だが青藍は慰めるような言葉は何も言わなかった。ただ隣を歩く常磐の手を握った。青藍が常磐の手を握った瞬間、びく、と常磐が驚くように青藍を見下ろした。

にこり、と。青藍は何も言わずに微笑んだ。

常磐の瞳が揺れた。しかしやがてゆるゆると、青藍の手を優しく握り返す。

青藍の気持ちは変わらない。この先にどんなことが待っているように、それがたとえ茨の道であつたとしても。

常磐と二人なら、どんな場所でも生きていけると思っていた。

やはりそう簡単には進めなかった。

最初青藍は目隠しをされていた。万一通ってきた道が記憶に残ってしまつと、それはそれで天の神々に攻撃される理由となるかもしれないから、と。



しばらくしてから目隠しを外されると、最早青藍が見たこともないような世界が広がっていた。

青い世界だ。今青藍たちが立っている場所は、空に浮かんでいるのだと分かる。あちこりに同じようなものがあり、大きさは家一件分ほどのものもあれば人一人しか立てないようなものまである。上に行けば行くほどそれは大きくなっているようだ。

「どう、やって……」

道らしい道などない。しかし青藍の足元の地がなくなったような感覚はなかった。

「人には見えぬ道もあるし、他にも方法はある」

驚く青藍に、東雲は笑いながら説明した。

「それにまあ、常磐がしっかりと手を握っていたみたいだからな。平気だろうと」

未だに握ったままの手を見て、青藍はなんだか気恥しくなった。そういえば途中目隠しされた中、常磐が手を強く握ってきたのはどこか危ないところでも通っていたからだろうか。

「ありがとう、常磐」

青藍が嬉しそうに笑いながらそう言うと、常磐は何も言わないまままたぎゅ、と強く手を握りしめた。まっすぐに前を見据えた常磐に、青藍は「どうしたの」と問いかけて 背筋に悪寒がはしる。

「なぜ忌み子がここにいる」

発せられた声は、とても重厚でとても気高い。

目の前には以前青藍のもとへ来た神の他にも、幾人かの神がいた。それだけで青藍に与えられる圧力は並大抵のものではない。

「ひ、う」

息を呑んでその圧力に耐えようとすると、常磐が青藍を支えるように抱きしめ、自分のその身体で神への壁を作った。以前は感じる余裕もなかったが、天の神から発せられる怒りは人の身には辛い。

「……答えを求めに来た。真朱と、青藍と、常磐の存在の答えを」  
東雲がそう告げると、天の神はざわめいた。

「忌み子をあれに近づけるわけにはいかぬ」

「捕えたところで真朱の自由にされているのなら、止めても無駄だ。これも彼女の作った運命の一つだろう」

人神である東雲が平然としているのは当然だろう。しかし、青藍は必死に呼吸を確保するなか、常磐は青藍を抱きしめているだけ普通だった。

「紛い物が作った運命など」

「くだらぬ」

「早くここから去れ」

ざわざわと騒ぎ始める神々の声が、青藍には重しに感じた。耳鳴りがして、眩暈がする。この地も影響しているのかもしれない。

幸いにして神々の注意は東雲に向いている。だからまだこの程度の圧力で済むのだろう。

「青藍」

常磐が崩れそうな青藍を支えながら小瓶を取り出した。青みがかった、それでも透明な液体が揺れている。

「飲めば少しは楽になる」

「そ、れ……？」

何、と呟くと、常磐は「東雲に渡された」と答えた。

出立の前に準備していた、あの薬だろう。だとすればこの状態はやはり天の世界にいるせいなのだろうかと青藍はぼんやりと思う。

嚥下する余裕もない青藍を見下ろして、常磐は小瓶の蓋を開けた。何も言わずにその小瓶に口を付けて、透明の液体を口に含む。

「とき、わ？」

青藍が常磐を見上げながら問う。多くの言葉を発する余裕のない青藍は名前を呼ぶしかできなかった。その青藍の唇を、常磐は塞いだ。

「んっ……」

途端に液体が口の中へと流れ込んできて、青藍は目を白黒させながら必死にそれを飲みほした。触れる唇は熱いのに、流れ込んでくる液体は冷たい。

先程までとは違う意味で、眩暈がした。

### 36：君の願いの先に（6）

薬を飲みほしたところで、意識がはつきりとしてきた。  
耳鳴りもやみ、眩暈もなくなった。

「……大丈夫か？」

まだ青藍を抱きしめたまま常磐が気遣うように問う。手のひらが優しく青藍の頬を撫でた。

「だい、じょうぶ」

顔を真つ赤にしながら青藍は答えた。常磐が壁になって見えないが、東雲と神々との問答は続いているようだ。

見られなくて良かった、と思うのはやはり乙女心故だろう。

「いつまでも目をそらし続けていては意味がないだろう！ だからこうして」

「愚を犯すわけにはいかぬ。我々は神であればこそ」

終わりそうにない問答に、青藍はぐくりと息を呑んだ。

常磐の腕から抜けると、周囲の視線はすぐに青藍に集中した。まじになったからとはいえ、やはり注目されると足が震えた。

「行かせてください」

それでも青藍は決意のこもった声ではつきりと言いつつ放った。

「危険はありません。真朱のあなた方への報復は既に済んでいる。

これは、天の方々には関わりのないこと」

真朱が青藍を呼んでいる。それは、たぶん青藍と常磐のことなのだ。『今の』真朱に、神々に対する恨みは感じない。

「行かせてください。行かなければいけないんです！」

それは使命なんて大それたものではない。青藍が常磐の手を離さなかったのと同じだ。本能ともいえる、止められない衝動。これが真朱による計算だとしてもかまわない。ただ青藍が答えを求めたの

は、青藍の意味だから。

「忌み子め」

ぼそりと呟かれた自分を指す言葉に、青藍は目を背けなかった。  
「忌み子ではありません。真朱でもない。私の名は青藍です！」  
深い青の瞳が神々を射抜いた。

澄んだ空気の中で、青藍の声が不思議なほどに大きく響いた。東雲も常磐も、青藍の強い意思のこもった声に驚き目を見張る。

「もう、子どもとは呼べないか」

ふ、と顔を和ませた東雲が静かに呟いた。

前を見据え、神々とも対峙し、しっかりと立つ少女は、もう東雲の庇護を必要としていない　立派な一人の女性だった。

意識がはつきりしたことで、青藍には分かった。

呼んでいる。たぶんずっと前から。

青藍は唇を噛み締めた。鼓動が青藍を急かすようにどくどくと鳴っている。力を入れていないと、手足が震える。早く早くと騒ぐ心は、こうして立ち止まっていることさえも苦しい。

「真朱のことも、私のことも、天の方々には関係のないことです。通してください」

苛立ちの募る声で、青藍は言い放った。

ただ一人の小娘の声に、天の神々でさえも動揺を見せる。

青藍は黙り込んでただ前に進んだ。その少し後ろを、常磐は黙って寄り添いながらついて来る。

『それなら、こうしよう』

膠着状態の続く話に、ひとつの石を投げ込んだのは東雲だった。

『二人が真朱のもとへ行っている間、俺はここに残る。万が一に害があるようなことがあれば俺を罰してくれてかまわない』

『し、東雲様！』

いつものように微笑みながらそう告げる東雲に、青藍は驚き声をあげた。それは万が一の時は「殺してもかまわない」と言っているように聞こえたからだ。

『大丈夫だ。行って来なさい』

優しく微笑む東雲に、青藍は何も言えなかった。

他に選択はなかったのか、どうしても考えてしまう。

たとえ万が一が起きなかったとしても、東雲を犠牲にしてもいいなんて選択はない。たとえ本人が納得していても、青藍は納得できない。

だってこんなの望んでない。

誰かを犠牲に、なんて。

誰かを置いて、なんて。

青藍の世界は以前と比べてとても狭くなった。優しく優しく、それは真綿で包み込むように、東雲が守ってくれていたからだ。東雲と常磐と山吹が青藍の世界のすべてだからだ。

唇を噛み締めてただ進む。

視界が歪んでいるのは、きつと天界にいるせいだと思いこんだ。歩くたびにゆらゆらとするのは、まだ酔っているからだ。

「青藍」

いつもよりも数段優しい声が、青藍の耳に届く。

大きな手が青藍の手のひらを掴んで、強張っていた青藍の身体がびくんと震えた。

「心配するな」

飾ることのない慰めの言葉に、ぼろりと青藍の瞳から涙が落ちた。慰められることが嬉しいのに、でもその言葉を素直に受け取れない。「むりだよ」

首を横に振ると、涙の粒は左右に落ちる。

涙を拭おうと伸びてきた常磐の手を、青藍は無言で拒んだ。今優しくされるのは嫌だった。

「……泣くな」

常磐は悲しそうな顔をして呟く。それも無理だ、と青藍は思った。泣きたくなかったのに、一度流れ出した涙は自分でも止める術が分からない。

「おまえに泣かれると、困る」

行き場のなくなった手をどうすればいいのかわからず、常磐は宙を彷徨わせた。涙で歪んだ視界の中で、常磐の顔が迷子の子どものように見えた。

青藍は一つ息を吐き出すと、ごしごしと少し乱暴に目元を拭った。ぱつと現れた目元は、赤い。

「……行こう」

新たに決意の固まった声で、青藍はまた前を見た。常磐は黙って頷いて、また青藍の隣を歩き始める。まるでいつまでも寄り添っている、と告げるように。

予感がした。

胸がときどきする。

何かにどんどん近付いていると、本能が、魂が告げている。

先に進むにつれ、空気は濃くなった。神らしい姿はひとつも見当たらない。

何かその先に待っているのか　青藍には分かる。  
迷わずこの道を進んだのも、ただ自分の中にある『何か』に従っ  
てきただけだ。

「……真朱」

呟くと、もうその存在が間近であると実感させられた。



### 37：永遠に続く恋物語（1）

白い花に埋もれるように、その人は眠っていた。白い髪も白い肌も、花に紛れてしまいそうだ。

ふ、と閉じられていた目がゆっくりと開く。空を映す瞳は、紅玉のように赤い。上半身を起こし、その人はひたすらに続く白い花畑を見つめていた。否、正確には花畑の向こうに続く道を。

白く長い髪からは、ぱらぱらと白い花びらが落ちた。まるで雪のように静かに地に落ちる。

変化を忘れた世界に、新鮮な風が舞い込んでくる。

「……来たか」

呟く言葉は、空気の中に溶けていく。話す相手もないのだから、今の彼女に言葉を発する理由はなかった。

固く引き結ばれていた口元が、わずかに緩む。

幾年もの間、待ち続けた瞬間が迫っていることが、嬉しいと思うのだ。もう随分と長い間、感情らしい感情も失っていたのに。

胸がどくどくと鳴る。身体の中の血がいつもにまして速く廻っているような気がした。

真白な世界に、黒い点が浮かぶ。

唇がその少女の名を紡いだ。

長き誓いが、ようやく果たされようとしていた。

本能が真朱に近づいている、と告げていた。気配が近くなれば近くなるほど、濃い天上の空気は弱まっていくようだ。青藍は身体が軽くなっていくような感覚に、自然と足は前へ前へと進みを速めた。引き離されていたものが一つに戻ろうとするように、言いようの

ない衝動は青藍を急がせる。常磐に惹かれていたものとはまた、別の衝動だった。

「……………ねえ、常磐」

どんどん前へと進みながら、青藍は口を開く。寄り添うように共に進む常磐は、何も言わずに青藍を見た。

「前に、言つたよね。常磐は常磐のものだつて」

「ああ」

短い返事に、常磐も少し緊張しているのだと感じた。

「それは、どんなことがあっても変わらないよ。忘れないで、常磐の主は、常磐自身なんだから」

励ますように言いながら、実際は自分にもそう言い聞かせているのだと青藍は苦笑した。

だつて、本当は少し怖い。

自分が何者かを知るのが。こうして自身を突き動かしている決意さえ、もしかすれば第三者に決められたものなのではないかと。

急いで進まないと、足が震えていることがバレてしまう。拳を固く握りしめていないと、指先が冷たくなっていく。行きたいと言いつ出した自分がこんなにも怯えているなんて、知られるわけにはいかなかった。だつてそれでは一人残つてまで青藍を行かせてくれた東雲に申し訳ない。

「覚悟は、いい？」

青藍は常磐を見上げて問う。その問いさえ、自分に向けているものに違いなかった。

「覚悟はとうの昔に決めている。おまえと、ここに来ると決めた時から」

優しく微笑みながらそう答える常磐に、青藍は自分の小ささを感じて少し恥ずかしくなった。同じように覚悟がまだ出来ていないと思っていた、なんて言ったら常磐はなんと思うだろうか。

「俺は真朱のことを恨みながら、それ以上に愛していた。おまえの言つたとおりだったんだ。憎んで、愛して　長い時を与えられ置

き去りにされたと、また憎んだ。そう思いこんでいたが、俺はやっぱりあいつと共に死ねなかったのが悔しかったんだ」

以前の常磐だったら決して認められなかったことを、常磐は今優しい表情のまま淡々と語った。

「ずっと未消化だったんだ。どうすることもできなかった。俺だけでは動くことは出来なかった。……それを救ってくれたのは、おまえだ」

その言葉に、青藍の胸に詰まっていたものがすとんと落ちた。ずっと、どこかに感じていた真朱と自分の価値の差。それでもいいと、それでも一緒にいてくれるならと納得していたはずなのに、やはり心のどこかでひっかかっていたんだろう。

「俺はもう平気だ。おまえの傍にいるし、支えてやる。おまえを守ると決めたから」

「……常磐は、自分のために生きていいんだよ」

嬉しさと恥ずかしさが入りまじりながら、青藍は呟く。青藍のために、なんてそれでは真朱の時と同じになってしまふ気がした。

「俺のやりたいことが青藍のために何かをすることだ。だから、いい」

きっぱりと言い切られ、青藍は顔を真っ赤にした。先程のキスといい、このセリフといい、一体どういふつもりなんだろう、と青藍はただ戸惑うしかない。

「青藍？」

低い声が青藍の耳をくすぐり、すぐく心臓に悪い。

見上げると、緑色の瞳がまっすぐに青藍を見ていた。最近は慣れてきていたけれど、常磐は本当に綺麗な人だ。この世の綺麗なものを集めて一つにしたんじゃないかと思うくらいに、綺麗な。それを意識すると少し隣を歩くのが恥ずかしくなるくらいに。

そんな人が、自分を見ていてくれる。

大切だと言ってくれる。

守ると言ってくれる。

それがすごく不思議で、信じられない。けれどそれは紛れもなく事実だった。

あの夜の出会いに、どんな意味があっただろう。

あの瞬間、飛び出してなければ。常磐の名を叫んでいなければ。こうして共にあることはなかっただろう。

「……常磐、行こう」

きゅ、と唇を噛み締めて決意を新たにする。拳を握り締めるのは、怖いからじゃない。覚悟ができたからだ。

「どこまでも」

ついて行く、という優しい声には青藍をそっと包み込むようだった。たった一言が、こんなにも心強い。

はらはらと、どこからか白い花びらが舞ってくる。

甘い香りが、青藍と常磐を誘うように漂ってきていた。

### 38：永遠に続く恋物語（2）

風が吹くと、白い花びら宙を舞った。花の香りが周囲に満ちている。

近づくにつれ強くなる気配と花の香りに、青藍はなぜか胸が締め付けられるようだった。見渡す限りに続く白い花の絨毯は、それ以外の色を拒んでいるようにも見える。

風に舞いあげられた花びらは、浮力を失うと雪のようにはらはらと舞い落ちた。

花が、花びらが、土の色が見えないほどに咲き誇っている。この空間が、花畑が、真朱そのもののようだ。

「白い」

それ以外の色が見当たらない。

ほう、と息を零しながら花畑の中へと入っていくと、遠くに赤い光を二つ見つけた。白い肌、白い髪、違う色を持っているのはその瞳だけだ。

「よく来たな」

記憶にあるよりも、ずっと落ち着いた声音だった。夢のとおりだと冷静な青藍に対して常磐は怪訝そうに眉を顰めた。

「会いに来たよ、真朱」

こうして面と向かって話すことは初めてなのに、青藍には何の違和感もなかった。

「現実で話すのは初めてか、我が種子」

淡く微笑む真朱の顔は、穏やかであってどこか老成した雰囲気がある。

「……………真、朱？」

呆然とした声は、青藍のすぐ隣から聞こえた。

青藍が顔を上げてその人の横顔を見る。驚きと動揺で見開かれた緑色の瞳は、真っ直ぐに真朱を見つめていた。信じられない、とても言いたげに。

真朱はそんな常磐を見て、ふ、と微笑んだ。その顔は老婆が幼い子どもに向けるものに似ている。何も知らない子に諭すような、優しい顔だ。少なくとも常磐の記憶にある真朱は、そんな風に笑わないだろう。

「……真朱、なのか？」

疑うような常磐の声。容姿はまるで変わっていないはずなのに、疑いたくなるのは、やはり今の彼女が纏う印象があまりにも以前とかけ離れているからだろう。

「もはや、おまえの知っている真朱ではないよ。常磐」

真朱は静かにそう答えた。

「おまえが愛した私は、もういない」

それは柔らかい否定だ。真朱と会う覚悟をしていた常磐も、これは予想外だろう。

「なら、おまえは何者だ」

徐々に苛立つてきた常磐は、声を荒げる。しかし真朱は顔色ひとつ変えなかった。

「……常磐、分かって。彼女は真朱だよ」

耐えかねた青藍が常磐の腕を掴んでそう告げると、常磐の顔が困惑するように歪んだ。受け止めきれない現実に、動揺しているのだと青藍は気づかされる。

「……真朱なんだよ」

重ねてそう言うと、常磐もどうにか飲み込もうと、黙り込んだ。

「……どうであれ、用件は別だろう。私に会いに来たのはおまえではなく、青藍のはずだ」

ふう、と呆れたような吐息が漏れ、青藍は真朱を見た。青藍と目が合うと、にっこりと微笑む。

「真朱。あなたは知ってるんでしょう？」

意を決した青藍の声に、真朱はただ微笑んだ。

風が吹くと、お互いの間を数多の花びらが押し寄せる。視界を奪いそうなまでの花びらの向こうに見える真朱は、花に溶けてしまいそうなほど儚く、まるで一瞬の幻のようだ。

「……私が、何なのか」

さらに重ねた問いは、思った以上に小さかった。

青藍は答えに怯えながらも、真朱から目をそらさなかった。

さあ、と風がまた吹き抜ける。防ぐものないこの場所は、風が自由に自分の存在を主張していた。

「そうだね、青藍。おまえの存在を、私以上に知っているものはいないだろうよ」

さく、と真朱が足元の花を踏みつぶして青藍に歩み寄る。赤い瞳と青い瞳が真っ直ぐにぶつかり合った。

「せい、」

二人の間に入ろうとした常磐を、青藍は無言で止めた。

真朱の白い手が青藍の頬に触れる。こうしていると、お互いに持つ色合いは真逆だが、二人はどこか似ていた。顔の造りの問題ではなく、纏う何かが、同じだった。

「こうして存在している私だが、人の世では死んでいる。そう、魂だけのようなものだ。神々より転生を禁じられ、幽閉されている身」  
本来ならば、魂は転生を繰り返し何度も世に生まれてくるのだという。人であれ神であれそれは変えようのない必然だ。しかしそんな超越した話は、人の子である青藍には遠すぎるお伽話のようなものだった。

「しかし私には神々を騙すだけの力があつた。そう、神よりも長い時を生きる存在を生みだせるほどの、な」

そう言いながら真朱はちらりと常磐を見た。

「神を超える存在。それを神々に見せつけることで、私は復讐を果

たした。すると困るのはソレをどうするか、にあった」

ソレなんて。青藍は眉間に皺を寄せた。真朱が変わったとはいえ、常磐を『自分のもの』扱いするのは変わらないのだろうか、と青藍は苛立った。

「そんな顔をするな、青藍。私とて愛していたよ。愛し方は間違っていたかもしれないが。それは　そう、我が子のように、孫のように、恋人のように、夫のように……愛していたさ」

その言葉とは裏腹に、優しく微笑む真朱の顔に常磐への愛は感じられなかった。

「だが私には、その愛を貫き通す意志はなかったんだよ。信じられなかったと言ってもいい」

「……どうして！　だって、常磐は……！」

常磐はあなたを愛していた。そう告げるには、その言葉はあまりにも重く、青藍は唇を噛み締めた。

「常磐は悪くないんだよ、青藍。私には、愛が永遠だと信じられなかったただけだ。神と人との間に生まれ、その愛が一瞬にして消え失せたのを知っているから」

苦笑する真朱に、青藍は何も言えなかった。常磐はただ黙って青藍の手を握りしめた。ぬくもりが温かい。

「　そう、だから知リたかった。永遠の愛が存在しうるのか、否か」

ぼつりと呟かれた真朱の言葉は、切なさを孕んでいた。

ふわりと風が舞う。ひどく優しい風が、青藍の頬を撫でた。

「それならば永遠の時を持つ常磐に証明してもらえばいい。しかし私が消えた後の常磐は生きた屍のようだった。きっかけを与えなければいけなかった」

そう言いながら、真朱は青藍の頬を撫でた。まるで我が子を慈しむように。

「だから、私は切り離れた。私の中にある、常磐への感情を」



え、と呟いたのは、青藍だったのか、常磐だったのか。  
真朱は青藍を見つめたまま、穏やかに微笑んで続けた。

「青藍。おまえは、かつての真朱の恋心が長き時を経て、一つの魂  
となって生まれた存在なんだよ」

### 39：永遠に続く恋物語（3）

「真朱の、恋心……？」

青藍の呟きは、思った以上に響いた。

「そう。だから今の私に常磐に対する感情は一切ない。記憶としてあるだけだ」

もとは真朱の中にあつたものなのだから、青藍と真朱が影響しあうのは当然だ。そして青藍から真朱の気配がするのも 欠片とはいえ『真朱の生まれ変わり』ならば当たり前のことだろう。

常磐と出会った時の、あの焦がれる感覚も 真朱の想いの塊である青藍の魂が叫んだのだ。いとしい、と。

青藍は自分の胸に手を当てた。衣服の下、さらに皮膚の下からはとくん、とくん、と生きている音が伝わってくる。

「心配する必要はない。青藍。おまえは私の欠片かもしれないが、その魂は、その思いは、すべておまえ自身のものだ。真朱ではない」  
「でも……」

真朱の言葉は、見事に青藍の不安を言い当てた。ふわりと香る甘い匂いに、青藍は妙に落ち着かない気分になった。

どこからが自分で、どこまでが真朱なのか。そう考えることは愚かなんだろうか？

「導かれた結果かもしれない。だが、己を離れたおまえの意志までは操れんよ」

静かにそう告げる言葉は、すんと、と青藍の胸の中に落ちる。

「それなら、私と常磐が出会ったのは」

「……出会いは偶然だろう。いや、ある意味では必然かもしれないな」

真朱は苦笑しながら青藍の頬をすりと撫で、一步後ろへと下がった。赤い瞳が切なげに揺れているのを、青藍は見逃さなかった。

「出会えば、惹かれるのは必然だった。私の中にあつた常磐への想

いは、執着と言ってもいいほどに強いものだったから。そして、出会うのは私すら関与し得ない、神をも凌駕した必然」

真朱が一言発するたびに、花びらは彼女を守るように舞い上がった。白い花びらは青藍たちと真朱を隔てるように主張を強める。

「……真朱？」

訝しげに名を呟く青藍に、真朱は淡く微笑む。

「これで、良い」

満足げに微笑むその顔は、今にも消えてしまいそうだ。

青藍は真朱の手を掴もうとして手を伸ばしたが、真朱はまた一歩後退る。青藍の手は届かず花びらを掴んだだけだった。

「私は、思いのほか満足しているよ。青藍。ともすれば、こうしておまえと会って話すこともできないのではないかと思っていた。それほどに、私の残した呪いは曖昧なものだったから」

「呪いなんかじゃない！」

消えてしまいそうな真朱の声と対照的に、青藍の声は花畑の中で強く響いた。真朱も常磐も、驚いたように目を丸くしている。

「呪いじゃない、呪いなんかじゃない、これは　これは、かつての真朱が今のあなたへ誓った、約束だよ」

真朱の赤い瞳が、呆然と青藍を見た。

「教えたかったんでしょ？　永遠はあるんだって。永遠にも等しい想いはあるんだって。証明したくて、証明してほしくて、常磐を使っただけでしょ？」

誰よりも愛した人を。誰よりも大切な人を。

青藍は、答えを見つけた。かつて真朱が望んだのは、自分本位なものではなくて　。

「……常磐に、幸せになって欲しかったんでしょ？」

ずっと、ずっと。

長い長い時を生きる常磐に、永遠ともいえる愛を与えることで、永遠の支えを与えることで。

それは、真朱の常磐に対する贖罪だったのかもしれない。

真朱は微笑んだ。それは幸せそうに、まるで咲き乱れる白い花のように、微笑んだ。

「……永遠なんて、ないと思っていた。おまえは真朱ではないのだから。たとえおまえたちが結ばれても、永遠の証明にはならない」  
望んでいたものを否定しながら、真朱は「それでいい」と笑う。  
「しかし常磐は歩き出した。青藍は居場所を見つけた。おまえたちの物語は、これから続いていくんだろう。私はもう必要ない」

「……真朱？」

必要ない、と呟いた瞬間から、また花びらが吹きあがる。

白い白い世界が、まるで真朱を包み込むように。

「もう、答えは見つけただろう？ 青藍」

一步、また一步と青藍たちから距離を置いて、真朱は笑う。

「おまえの存在が何か、私は答えた。おまえは知りたかったことを知り得たはずだ」

まるで青藍たちを拒むように真朱は離れていく。その行動に、青藍は妙な胸騒ぎを感じた。

「私は、見届けるために存在し続けた。私の役目はここで終える」

「真朱、おまえまさか」

常磐が慌てた様子で真朱を見た。まるで、かつての真朱が常磐を置いて逝ってしまったときと同じような そんな気配がした。

「真朱！」

常磐が叫ぶと、それに呼応するように花が吹き乱れた。

「私と青藍の対面によって、私は解放される。転生のない永久の牢獄からも、死と呼べぬ死からも」

「何を、」

言っているの、という青藍の呟きはあまりにも小さく、吹き荒れ

る風の音に遮られた。

「そういう仕組みになっていたんだよ、初めから」

そう微笑んだ途端、真朱の上半体がぐらりと揺れた。白い髪がふわりと広がる。ゆっくりゆっくりと、地面に吸い込まれるように倒れていく。

それは、ひどく長い一瞬だった。

「真、朱……？」

青藍の呆然とした声と、どさりと真朱が花に埋もれる瞬間は、ほぼ同時だった。

あれほど騒がしかった花の嵐が、ぴたりと止んだ。舞い上がっていた無数の花びらは、力を失ったように地に落ちていく。

無音になった世界で、真朱は花びらに埋もれ横たわっている。

「真朱！」

青藍が真朱に駆け寄ろうとした瞬間、まるで触れられることを拒むように突風が吹いた。あまりにも強い風に、青藍は思わず目を瞑った。後ろから青藍を呼ぶ声が聞こえて、慌てたように常磐が青藍の身体を支えるように抱きしめた。

「真朱　　！」

青藍の叫び声が風の中に強く響き、まるで嘘のように突風が止んだ時　　。

あれほど真っ白だった花が、赤く染まっていた。

花びらの一枚一枚まで、初めから赤だったと主張するように。

一面の白が、一瞬にして赤へと変わった。

まるで、主の死に殉じるように。



#### 40：永遠に続く恋物語（4）

何が起こったのか、分からなかった。

白い花はひとつ残らず赤に染まり、真朱は眠るように横たわっている。

「……終わったんだな」

青藍を支えていた常磐はそう呟き、ゆっくりと真朱へ歩み寄った。先程のような突風は起こらず、常磐は難なく真朱の傍らで跪く。

穏やかとしか言いようのない真朱の顔を見て、常磐は複雑そうな顔をした。

「永遠の愛とか、転生とか、そんなものよりもずっと……こいつは、ただ早く休みたかったんだろう」

真朱の頬を優しく撫でて、常磐は呟いた。

何度も何度も、壊れ物に触れるように頬を撫でる。その目はとても穏やかだった。青藍はすぐに受け止めることが出来ず、ただ立ち尽くしていた。純白の世界は、一瞬にして変わった。足元の赤が、死そのものにしか思えなかった。

「帰ろう、青藍」

常磐がそう言い出したのは、どれくらいの時が経ってからだろうか。呆然とする青藍の手を取り、常磐は眠る真朱に背を向けた。

「これから、どうなるの」

何を言えばいいのか分からず、青藍は呟いた。それは常磐への問いでもなく、まして自分に向けたものでもなかった。簡単に言えば、青藍はその後のことなんて考えていなかったのだ。

「何も変わらないだろう。俺は真朱の力とは別の存在のようだし、おまえもただ今までと変わらず生きていくだけだ」

常磐がはつきりと告げると、それもそうだな、と青藍は納得した。

劇的な変化なんて何もない。

常磐の手を握りながら、青藍は天の空を見上げた。地上の空とは色が違う。早く懐かしい地上へと戻りたくなつた。この手のひらのぬくもりと共に。

真朱は、常磐の幸せを望んでいた。

それと同時に、己の終わりを望んでいた。

その両方を得て、満足そうに眠りについた。ある意味で、青藍という真朱の欠片は、死への引き金だつたんだろう。

でも青藍がその死を背負うことはしない。それはおそらく真朱の望むことではないだろうから。真朱は自ら引き金を引いたつもりだつたんだろうから。

ただひとつ。

真朱へと感じていた『何か』が、ぱつたりと静まり返ってしまったことだけが、ひどく切なかつた。

それからは、瞬く間に過ぎ去つていった。

真朱の死は天上の神々も知ることとなり、脅威が去つたことにむしろ神々は喜んでいるような風だつた。青藍の存在がただの真朱の生まれ変わり。しかも真朱の欠片ほどの存在だと分かると、手のひらを返したように地上へと送りだされた。解放された東雲は、苦笑していた。

そして帰り道の途中で、真朱の最期を聞いてきた。『穏やかだつた』と常磐が短く答えると、ほっとしたように『そうか』と答えた。東雲も真朱のことを気遣っていた一人だつたんだな、と青藍は実感した。



来た時と同じように目隠しをされた。天上の神々との関わりを断てる今、不用意に地上以外の場所を知らない方が幸せだろうという東雲の配慮だ。常磐がずっと青藍の手を握っていたから、やはりあまり怖くはなかった。

「青藍っ！ おかえり！」

屋敷に着くとすぐに山吹が駆けつけてきた。

飛び込むようにやってきた山吹の抱擁を受け止めつつ、青藍は「ただいま」と笑った。山吹の声を聞いた途端に帰ってきたという実感が湧いてくる。

「でも、そんなに留守にしなくて済んで良かった」

天上へと行っていたのは一日程度だ。青藍はその間飲み食いもしていないのだから。

「何言ってるの？ 青藍は一カ月もいなかったじゃないか」

「え？ だって……」

山吹のセリフに、青藍は目を丸くした。そして困ったように東雲を見上げる。

「時間の流れが違うんだ。一日くらいにしか感じていないだろうが、地上ではそれだけの時間が経っていたということだろう」

東雲は苦笑しながら説明してくれる。そんなものか、と青藍はとりあえず納得するしかなかった。

家の中に入ってみれば、嫌でも一カ月の時間が経ったのだと分かった。山吹も掃除してしてくれたようだが、広い屋敷の中行きとどかないところはどうしてもある。あちこちに溜まった埃が見えた。

まずは掃除か、と苦笑しながら袖をまくる。

休めばいいのに、と苦笑する東雲や常磐に「大丈夫」と言い聞かせつつ青藍は掃除に取り掛かった。

そうしていつも通りの日常を過ごしていると、ゆっくりゆっくり

と現実を受け止めていける。

真朱は、本当に自分勝手だ。

望むものを手に入れて、あんなに幸せそうに死んでしまうなんて、  
箒を手にも、青藍は立ち止まった。空を見上げると、懐かしい色をして  
いる。薄い青はどこまでも広がっていて、風が運んでくる香りは人の  
生活を感じさせた。庭の花は相変わらず美しく咲き誇っている。

何も変わらない。青藍はこうして生きている。

ただ、己の半分がぽっかりと空いてしまったような気分になるだけだ。  
以前は嫌っていた真朱を、今は少し恋しく思う。

これで良い、と呟いた真朱も。終わったんだと言った常磐も。青藍  
には計り知れないほどの時を生きてきた。だからこそこの結末なん  
だろう。

心は穏やかだった。青藍はまた足元へ視線を戻して吐き掃除を始  
める。一カ月月の不在で溜まった汚れはなかなか頑固だ。

「ほどほどにしておけよ」

真剣に掃除に取り組んでいると、常磐が呆れたように声をかけた。  
振り返ると、常磐はふ、と笑う。

「……納得できないって、顔してる」

常磐は青藍の傍までやって来て、箒を取り上げる。顔に出ている  
のは自覚していたので、正直見られたくはなかった。常磐は苦笑し  
ながら青藍の手を引き、手ごろなところに座った。

「真朱は、疲れてたんだろう。長い時の中、孤独であることが」  
だから、これで良かったんだよ、と常磐は青藍の頭を撫でる。

「……常磐も、疲れた？ 死にたいって、思う？」

長い時、と言われて青藍はどきつとした。これから真朱以上の時  
を生きていく彼は 死にたいと、願うのだろうか。願われた時、  
青藍はどうすればいいのだろうと。

「俺は、孤独ではないから」

青藍の心配をよそに、常磐は穏やかに微笑んだ。青藍の手を握り

しめて。まるで隣にしていると伝えるように。青藍は胸が熱くなって、常磐の肩にもたれた。同じように、手のひらからだけではなく、こうして自分のぬくもりが伝わればいいと思って。

「一人にしないよ。私がずっと傍にいる」

ぬくもりだけでなく、言葉でも。伝える方法が他にもあるというのなら、いくらでもこの人に伝えたかった。ずっとずっと、長い間一人ぼっちだったこの人に。

「おばあちゃんになっても、傍にいる。常磐が要らないって言うても、傍にいる。覚悟してね。私しつこいから」

そう宣言すると、常磐は「怖いな」と笑った。

常磐の肩にもたれたまま、青藍はぼつぼつと語った。

今日の夕飯は少しだけ贅沢しよう。そして明日になったら下の町まで買い物に行こう。あとは掃除の続きをして、それから庭でお茶をするのもいいかもしれない。生活が落ち着いたら、二人で遠くに行ってみよう。前に話していた暑い国でもいいかもしれない。世界のいろんなところを見に行こう。そんな未来の話をするのは、とても楽しかった。

「ね、常磐。……常磐？ 寝ちゃったの？」

相槌を求めると、隣に座る常磐はとても静かだった。思えば自分ばかりが話していたな、と青藍は苦笑する。

大好きだよ、と耳元で囁いた。起きている時に言うのは少しだけ恥ずかしいから。

大好きだよ、ずっとずっと、大好きだよ。

ねえ、常磐。私は何度生まれ変わっても、あなたに恋するよ。だって私の魂はあなたを忘れないから。

真朱。

永遠はないと、そう言ったけれど。永遠の愛の証明にはならないと、言っていたけど。

この恋は終わらない。私が終わらせない。

何度死んでも、何度生まれ変わっても、私達は巡り合って、何度でも恋に落ちる。

そう、それは 約束された、永遠に続く恋物語。

#### 40：永遠に続く恋物語（4）（後書き）

これにて「朱の誓い、青の願い」完結となります。

長い間お付き合いくださった皆様、ありがとうございました。

青藍と常磐の物語をつづるのはこれで終わりです。でも、二人の恋はこれからずっとずっと続いて行くんでしょう。それが、この物語の結論です。

最後までお付き合いくださりありがとうございました。

また別の物語でお会いできれば幸いです。

あなたに最大の感謝をこめて。

青柳朔

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9360e/>

---

朱の誓い、青の願い

2011年4月10日00時55分発行